KONAMI
今田隆文(SATZ)
aKari
ときめきメモリアル2®
2
あなたを信じてる
G's 電撃文庫

ときめきメモリアル2②

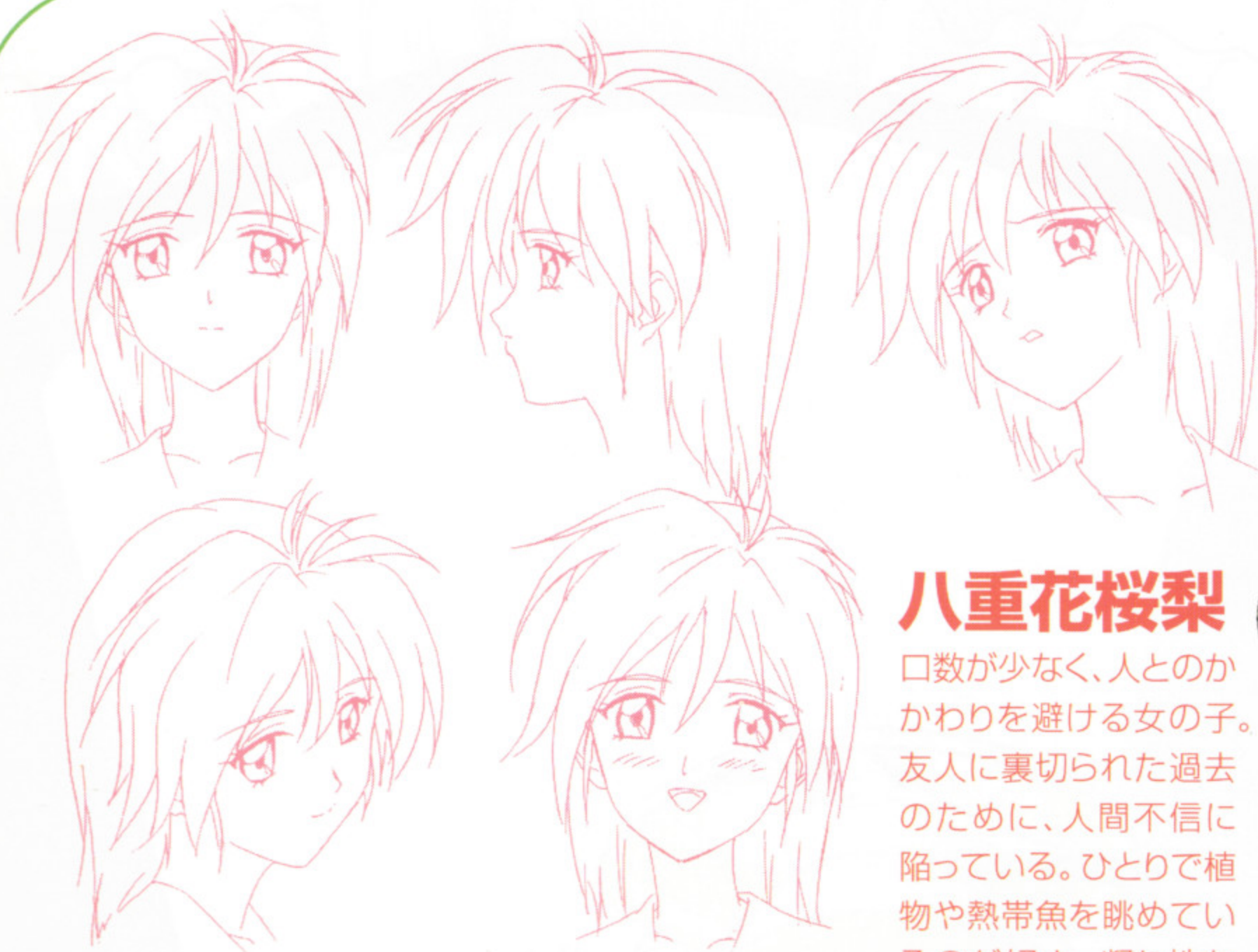
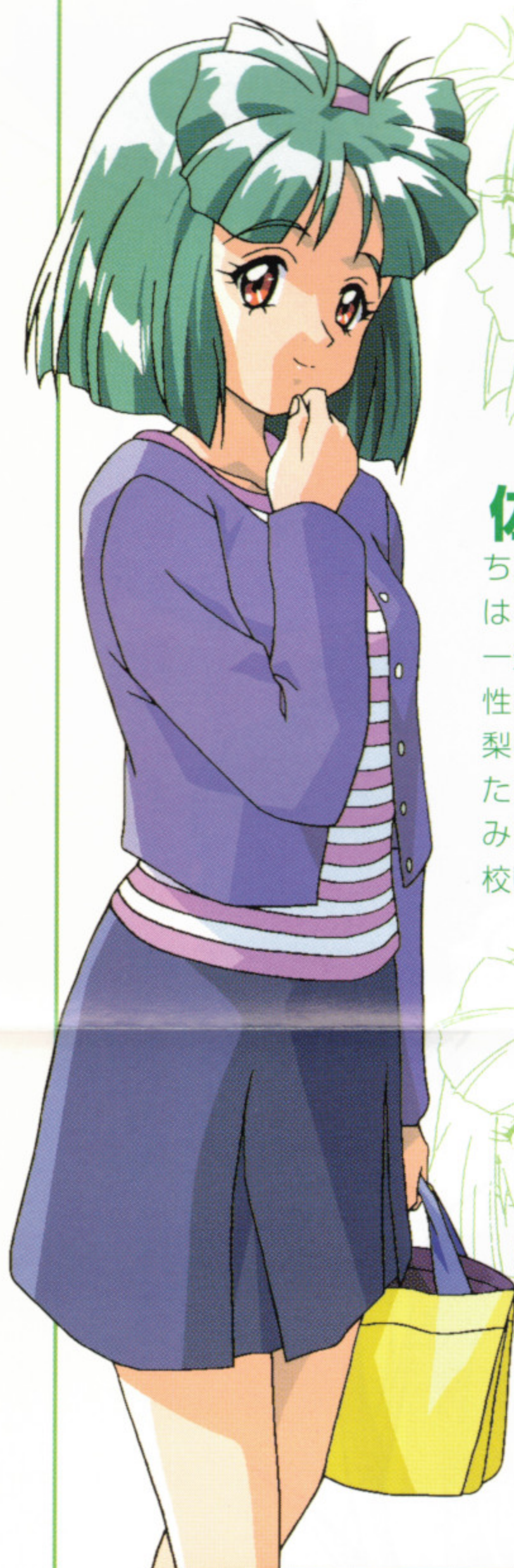
あなたを信じてる

学園生活の何もかもが煩わしくて、ひびきの高校を退学しようと決意した時、八重花桜梨はひとりの少年に出会った。
明るくて賑やかで、何もかもが彼女の対極にあった彼。もっとも煩わしいと感じるタイプ……しかも彼は、花桜梨がもう二度とかかわりたくないと思っているバレーボールの、部員だった。
にもかかわらず、彼と会うたびに凍てついた自分の心に温かな変化が起きている……花桜梨はそう感じていた。ついにデートまでするこことになった当日、ある感情が彼女の脳裏によみがえって……。
大好評に応えて、あの『ときめきメモリアル2』のノベライズ第2弾が登場！

カバーイラスト／コナミ・オフィシャル
カバーデザイン／荻窪裕司
カバーフォーマット／朝倉哲也（design CREST）

あなたを信じてる

今田隆文
(SATZ)

Tokimeki Memorial 2

八重花桜梨
口数が少なく、人とのかかわりを避ける女の子。友人に裏切られた過去のために、人間不信に陥っている。ひとりで植物や熱帯魚を眺めているのが好き。凝り性な一面もある。
佐倉楓子
ちょっとドジなところはあっても、いつも一生懸命で前向きな性格の女の子。花桜梨の唯一の友人だったが、二年生の夏休みに遠くの高校へ転校してしまった。
鳥越俊太
花桜梨のクラスメイトの少年。明るく、思ったことをストレートに口にする裏表のない性格のためか、相手を疑うことを知らない「いい人」。男子バレーボール部員で、ポジションはリベロ。ただし高校から始めたため、実力はからっきし。
月村小夜
花桜梨と俊太のクラスの学級委員。俊太とは幼なじみでもある。明るく元気で、おせっかい焼きな女の子。はたからは俊太と相性バッチリのカップルに見えるのだが、当の二人は共に否定している。女子バレーボール部員。

ときめきメモリアル2®
2
あなたを信じてる

イラスト／コナミ・オフィシャル
デザイン／荻窪裕司

プロローグ

ぷしゅう、と地下鉄のドアが左右に開く。

と、ひとりの少女が弾む足どりでホームに降り立った。

ワインレッドのブラウスに、ほんのり桜色のシャツジャケット。シックで華やかな色合いが、くすんだ駅の風景にはっとするほどの彩りを添える。

少女の背はすらりと高く、歩く動作はすがすがしい印象を与える。

目鼻立ちは涼しげで、瞳は澄んで深い。まっすぐに前を見つめる横顔はとても大人びていてきれいだった。

その水のように透明な印象を持つ少女の名前は、八重花桜梨といった。

花桜梨は改札を抜け、すぐ先にあるエスカレーターのステップに乗って足を止める。

上へと運ばれていく。

降りてくる風に短い髪を揺らしたとき、花桜梨はやはり我慢できないというふうにステップを上り始めた。

その先に、光る出口。

眩さに花桜梨は目を細める。一歩一歩近づきながら、こうしている過程がふいに今の自分の心と重なる気がして、ちょっと可笑しくなった。胸を弾ませながら、上っていく。そして――

まぶしい陽光に包まれた。

青空。微かな風、行き交う人々。

今日はたまらなくなるほどよい天気で、さわやかな秋風で、横切っていくすべての人がこの一瞬を心から楽しんでいるように見えた。

——ああ……。

花桜梨の表情が春の日溜まりのようにほころぶ。

世界は、こんなにも輝いている……。

広い道路をはさんだ向こうに、レゴ・ブロックで組み立てたような形の大きな四角い建物があった。

腕時計を確認する。もうすぐ。あの体育館で、もうすぐ彼のチームの試合が始まる。

花桜梨は体育館に向かって歩きだし、早足になって——

駆けだした。

あの人に逢いに行く。

もう一度信じることを教えてくれたあの人に、逢いに行く——。

一章……あの日の、夕空

1

澄んだ青い景色に、花桜梨はひとりたたずんでいた。
四季を通じてもっとも高く、かなしげな空。遠くに見える山は青紫を含んだ水彩の筆で一息に描いたようで、その手前には緑多いひびきの市の街並みが広がる。
ひびきの高校の屋上には風が絶えない波のように吹いていた。ほど近くそびえる時計台の鳴らない鐘はわずかに揺らぎ、整然と並べられた室外機のファンは売れ残った縁日の風車を思わせるさびしさで回っている。
…………。
花桜梨は胸をゆるやかに上下させ、音も立てずに呼吸した。
まるで、陸にいた魚がようやく水の中に戻れたときのように。花桜梨にとって、屋上とはそういう場所だった。
ここは景色がよくて、誰もいない。校舎と違って。
遠くをぼんやり見つめている花桜梨の表情。
それは氷のように硬く、冷たく、近寄りがたい気配をもっている。端から見たとき自然体に映る雰囲気は、彼女自身、ある程度意識してそうしているものだった。

――ひとりになりたい……。
花桜梨は思う。もう、限界だと。
だからたった今、ある決断をしたのだ。
きぃ……。
背後で戸の開く乾いた音がした。
振り返ると、そこにひとりの女生徒が立っている。腰まである長い髪をした和風美人。茶道室に出入りしているのをよく見かける。
彼女は放課後の屋上に人がいるとは思わなかったらしく、ひとつまばたきをして、それから困ったように眉をひそめた。
ここで誰かと待ち合わせをしているのだろうか。そんな雰囲気だった。
その切れ長の目をした女生徒とわずかに視線を交わしたあと、花桜梨は彼女のほう――出口へ向けて歩きだす。
そして無言のまま女生徒のわきを通り抜ける。
「……ありがとう」
女生徒が軽く会釈してきた。
「……別に」
つぶやくような低い声で言って、花桜梨は階段を下り始めた。

礼を言われることではない。ひとりになれないのなら屋上にいてもしょうがないし、そろそろ保健室へ行かなければならない時間だった。
踊り場まで来たとき、花桜梨は上ってくる男子生徒とすれ違う。
その取り立てて語るべきところのない平凡な男子生徒は、表情に深い苦悩をにじませている。
これから、屋上に来たあの女生徒と何か話をするのだろうか。
だが、どうでもいいことだ。
渡り廊下にさしかかると、花桜梨の目に壁の掲示板に張られたさまざまなポスターが入ってくる。生徒会からの文化祭の告知や、各クラブによる出し物の予告。
つい先日、修学旅行があったばかりだというのに。
花桜梨は、秋という季節が最近嫌いになった。
あちこちで行われる運動会、文化祭、『読書』、『スポーツ』、『食欲』。秋は物静かなようでいて、一年のうちでもっとも騒がしい季節なのだと思う。特に、学校においては。
そしてあの事件が起こったのも二年前の今頃……。
「…………」
花桜梨は少しきつく目を閉じて、誰もいない廊下を歩き続けた。
「……失礼します」

保健室の戸を開けたとき、陽ざしに温められた空気と、消毒薬の臭いに包まれた。
二つ並んだ白いシーツのベッドと、カーテンのついたて。薬品棚と、治療器具を置いた卓。
ぽつんと置かれた丸椅子。
先生はいなかった。おそらく、いつものように職員室でおしゃべりしているのだろう。
花桜梨は丸椅子に腰かけ、壁時計を見上げた。もうすぐ四時。今日はここで、五時までケガ人などが来るのを待つ。
花桜梨は転校したクラスメイトの引継ぎとして、二学期から保健委員をやっていた。
仕事といえば、傷の消毒と湿布の支給ぐらい。この保健室には生徒のたまり場という役割はなく、これまで三回ほど係を務めたが、まだひとりとして生徒は訪れない。花桜梨にとって、それはありがたいことではあった。
「…………」
日溜まりの保健室で静かな時間を過ごしながら、花桜梨は転校したクラスメイトに思いをはせる。
名前は、佐倉楓子という。
花桜梨にとってクラスで、いや学校の中で唯一友人と言えた少女だった。
肩のあたりで切りそろえた髪に、そっとのぞく黄色いヘアバンド。あどけない顔立ちでいつもほがらかに笑っていた。

『やーえ～さんっ』

可愛らしい声で、まるで幼い子が歌うように呼んでくる。

野球部のマネージャーをしていて、よくドジをしていた。話をするようになったきっかけも目の前で豪快に箱入りのボールをこぼされ、拾うのをつい手伝ったからだった。けれど、人とのかかわり合いで大切な部分はけっしてまちがわない女の子だった。

だからこそ花桜梨も、楓子とだけは少しずつ会話らしい会話ができるようになってきていた。

だが、その楓子も夏休みに遠くの町へと引っ越していってしまった。

「…………」

遠くのグラウンドから、部活のかけ声が緩慢に届いてくる。楓子のことを思いだしながら、花桜梨は浅いまどろみを覚え始めていた。

そのとき、がらりと戸が開けられた。

「すいませーん」

声とともに、半袖のユニフォームを来た男子生徒が中に入ってくる。

その容貌について一〇〇人に訊ねたとき、ほぼ全員が「かっこいい」でも、その逆でもなく、「明るい」と答えるだろう。そんな感じの少年だった。

花桜梨は彼を知っていた。クラスメイトの、たしか鳥越俊太という名だ。

「うわっ！　八重さん！」

花桜梨を見て、俊太は大げさに驚く。
だがすぐに「あ、そうか」という納得の顔をして、にこっと笑いかけてきた。なんだか、表情がころころ変わる。
「そうだった、そうだった。八重さん、保健委員だったよね」
言いながら近づいてくる。何の用で来たのかは、すりむいた膝の傷が語っていた。
「…………」
俊太が連れてきたさわがしい空気に、花桜梨は少し顔をしかめた。早く仕事を終わらせよう。
「……座って」
「あ、傷口は洗ってきたから」
そう返して、俊太は花桜梨の向かいの椅子に座った。
花桜梨はビンの金属のフタを上げて、消毒液を含ませた丸い綿をピンセットでつまむ。初めてなので多少ぎこちないが、簡単な作業なのであやまったりはしない。
そして、膝にある点状に赤くなった傷をぬぐった。
俊太は特に痛がる様子を見せない。実際、大したケガではなかった。レシーブの練習でもして、転んだのだろう。彼がバレー部員であることを花桜梨は知っていた。
「いやー、今日外でやってるんだけど、レシーブの練習で転んじゃってさ」
俊太が予想したとおりのことを言ってくる。

「こんなのほっといても大丈夫そうなもんなんだけどさ、やっぱりちゃんと処置したほうが治りが早いし、オレってこういうの気になるほうなんだ」
「……そう」
とだけ言って、花桜梨は綿をトレイの上に捨てて、ガーゼを取りだした。
「こう、こんなふうに、正義の味方にやられたザコ怪人みたいに転んだんだよ」
俊太は上半身のジェスチャーでごろごろ転がっていく動きを再現する。
「笑われてさ。やっててもなかなか上達しなくて。一年のほうがよっぽどうまいやつがいて、ヘコむんだ。あ、そういや先生はどこいったの？」
「……さあ」
「でも、あれだよね。ここってなんかほとんど人が来ない感じだし、八重さん退屈してない？」
「…………」
親しげに話しかけてくるが、同じクラスになって以来、まともに向き合うのはこれが初めてである。
「えーと……」
さすがに話題が尽きたのか、俊太が目をきょろきょろとさせている。そのほうが花桜梨にはありがたい。……話しかけないでほしいから。

ガーゼで傷を覆い、テープで十字に留めた。完了だ。花桜梨は道具を片づけ始める。
「……終わっ――」
「ところで八重さんって、バレーに興味があるの？」
花桜梨の手が止まった。
「この間、うちの練習のぞいてたの見つけてさ」
俊太が人なつっこい笑みを浮かべている。
「………」
花桜梨の表情が、氷の温度に下がった。
「もしよかったら、今度オレから――」
「……関係ない」
花桜梨は低く、鋭い声で言った。
「え？」
平和な顔で聞き返してくる俊太を、花桜梨はきつくにらんだ。
「あなたには関係ない。用が済んだなら、出ていって」
「八重さん……？」
俊太はきょとんと目を丸くしている。
花桜梨は立ち上がった。そしてカバンを取って、自分のほうから保健室を出た。

硬い足音を立てて、花桜梨は廊下を歩いていく。

――もう……。

他人にあれこれ干渉されるのも、今みたいに拒絶するのも、そのときわずかな胸の痛みを覚えるのも、そうさせる周囲と自分に苛立つのも。

――何もかもが、いや……。

もう、限界だと思った。

だからひびきの高校を退学しようと、花桜梨はさっき屋上でそう、決めたのだった。

2

『……ごめん、花桜梨』

そう言われた瞬間、花桜梨がそれまで立っていたひとつの世界が、完全に壊れた。

二年前の秋。

花桜梨は、ある高校に通っていた。

そこは運動部が強いことで有名な学校で、特にバレーボール部は地域の名門だった。

花桜梨は監督にスカウトされる形で、その高校のバレー部に入る。練習はハードだったが、

つらいとは思わなかった。バレーが、好きだったから。

中学からチームメイトだったセッターの親友もいて、新しく知り合ったメンバーたちとも仲よくなって、夏にはレギュラーのポジションを手に入れた。楽しくて、いつもみんなと笑い合っている。そんな幸せな毎日だった。

だが、唐突に起こった部費の盗難事件をきっかけにして、それはあっけなく崩壊した。

規律に厳しい監督は盗難事件に激高し、話は瞬く間に学校全体が知るところとなる。そして――

『犯人が名乗り出て謝罪するまで、部の活動をいっさい停止する！』

という決定がくだされた。

花桜梨たちメンバーの全員が、ある引退した三年生が犯人だということを知っていた。だが提示できる証拠がなく、何より本人が自ら名乗り出ないと意味がない。

監督はこのまま廃部も辞さない構えだった。事実の隠蔽に出るよりは、それはたしかに毅然とした態度と言えただろう。

――このままじゃ、みんなとバレーができなくなる……。

だから花桜梨は罪をかぶり、自分が犯人だと監督に告げた。

そして、一週間の停学を言い渡される。

学校を去り際、見送るようにして立つメンバーと親友の表情を見て、花桜梨は安心した。

――よかった。やっぱりみんな、わかってくれてる。

たった一週間。そうしたらまた、もとのようにみんなとバレーができる……そう思い、花桜梨は仲間たちに微笑みを向けて門を出ていった。

たった一週間。

だが、それですべてが変わってしまっていた。

廊下を歩けば、教室に入れば、生徒やクラスメイトたちがもの言いたげな視線で見つめてくる。時折「あいつだろ、部費盗んだの？」といった聞こえよがしな声が届いてくる。普通に話していたクラスメイトたちの誰もが声をかけてこなくなり、教師でさえあからさまな軽蔑の眼差しを向けてくる者がいた。

あんなに心地のよかった学校が、まるで机や壁、すべてのものから鋭い針が生えているような、そんな場所になってしまっていた。

ショックを受け胸を痛めながらも花桜梨は耐えた。ここでほんとうのことを言っては、すべてが無駄になってしまう。

それに、バレー部のみんながわかってくれている。だから……。

――だから、大丈夫。

しかし、花桜梨の心は無惨にも裏切られてしまった。

廊下でメンバーと会ったとき、彼女たちは逃げるように早足で去っていった。戸惑い、追い

かけた花桜梨を待っていたのは、「来ないで！」という冷たい叫び。
さらに、花桜梨は監督から退部処分を言い渡された。
『ねえ、どうして？　どうしてなの？　私がやったんじゃないって、わかってくれてるんでしよ……？』
中学からずっと一緒にやってきた親友をつかまえ、花桜梨は必死な思いで問いつめた。
セッターとエーススパイカー。チームにおいてもっとも意思の疎通が肝心な関係。いくつもの試合でチームワークを育み、通じ合い、信頼している相手だった。親友だった。そのはずだった。
親友はうつむき、一度ためらう仕草をしてからこう言った。
『……もう、私にかまわないで』
と――。
『え……？』
『かかわると同じに見られる。私たちも、花桜梨と同じ目に遭う』
『…………』
『監督にもにらまれる……だからお願い、友達なら巻き込まないで』
――信じてた……。
愕然と立ちつくす花桜梨に、親友だったその少女は、最後に告げた。

『……ごめん、花桜梨』

信じて、たのに……。

「…………」

デスクの白いライトに照らされながら、花桜梨はもの憂げな表情でボールペンのキャップを取った。

青と、白と、黒でまとめられた少し殺風景な印象の部屋。3LDKのマンションの中で、いつも人の気配があるのはここだけだった。

花桜梨の父は現在海外に赴任しており、雑誌の編集者をしている母の帰宅は遅く、出版社に泊まることのほうが多い。かけられた一番最近の言葉は、『四日ほど取材旅行のつきそいに行きます。緊急の際にはケータイに』という、冷蔵庫に張られた二日前のメモ。掃除や洗濯も自分でして、食事はたいていコンビニのもので済ませる。

花桜梨は硬質な音とともに紙にボールペンを走らせ、

『一身上の都合により、退学させていただきたいと思います』

と、書き記した。

二度目の退学願。

一度目のときとまったく同じ文章だと気づき、花桜梨はペンを止めて書いたばかりの文字を

見つめる。

それからまた先を進めていきながら、当時のことをふと思いだす。

あのとき、自分の心はとても不安定になっていた。

他人を疑う、という強迫観念にとらわれたのだ。

例えば、道を聞けばその人なりに正しく教えてくれるし、店員に渡されたお釣りはいちいち確認するまでもない――そういう、日頃生きている上で意識しない部分の信頼さえ、できなくなっていた。

相手のなにげない言葉、行動、すべてに対して受け入れるのに待ったがかかり、それはほんとうなのかと疑ってしまう。

それはとてもとても疲れることだった。苦しい、ことだった。

部屋に閉じこもりがちな日々が長く続き、やがて春が訪れたとき――

花桜梨は、ひびきの高校に入学した。

これまでの自分を知る人のいない新しい場所へ行けば、変われるかもしれない、この状態から抜けだせるかもしれないと思った。

――でも……。

花桜梨は沈痛に眉をひそめる。

新学期が始まってまもなく、早くもできつつあった女子のグループに話しかけられた。明示

はされないが、仲間に入らないかとの勧誘である。
——さあ、ここからだ。
そう思ったというのに……。
『……私は』
自分の出した声の低さに、花桜梨は動揺した。会話をしなければいけないのに、頭の中でいうべき言葉がまったく浮かんでこない。そして、固まってしまったように何の表情も作れていない自分の顔に気づいた。
こうしている今を、煩わしいと感じている自分の心に気づいてしまった。
彼女たちの笑顔は本物だろうか？
いつか、裏切られるのではないだろうか……？
以前のように他人を信じられない。だから、花桜梨はうまくかかわっていけなかった。
クラスの中で完全に孤立して、退学のことが頭をかすめた頃、ふとしたことで楓子と話すようになった。
崩れそうなバランスで過ごしながら、楓子に対してはどうにかまともに接することができるようになった。このまま少しずつよい方向にいけるかもしれない。そんな淡い期待が生まれかけた刹那——楓子はいなくなった。
——もういい……。

花桜梨が望むことは、もはやひとつだった。

――ひとりでいたい……。

そうすれば、心を揺らされないですむ。傷ついたり、不安になったり、落ち込んだりしないでよくなる……。

「…………」

花桜梨はペンを置き、退学願を折って封筒に入れた。

作業を終えて静かに息をつくと、それまで意識しなかった浄化(じょうか)フィルターのぶくぶくという音が聞こえてくる。

六〇センチサイズの水槽にピンク色をした魚が五匹、花びらのように泳いでいる。ペレズ・テトラという熱帯魚(ねったいぎょ)。

花桜梨は熱帯魚の飼育(アクアリウム)を趣味のひとつにしていた。

始めたのは二年前。昔から海の中で魚が泳ぐ映像(えいぞう)を見るのが好きだったりして興味はあったが、その手間(てま)と労力にかける時間が作れずにいた。

だが、それは解決した。バレーをしなくなったことによって。

花桜梨はじっと水槽を見つめている。

蛍光灯(けいこうとう)に照らされ、泳ぐピンクの体がきれいに映(は)えている。背後に揺れるあざやかな緑の水草(アマゾンソード)。二つの対比。

透明で幻想的な光と、循環する水の微かな、微かな音。

……………。

こうしていると、何も考えないでいられる。

そのことを意識したせいで、花桜梨はまた考え始める。

もっと水草のレイアウトに凝ってみようか。

もう一本水槽を買って、難しい魚——ディスカスにでも挑戦してみようか。

コーヒーのほうも自分で豆のブレンドをいろいろ試してみようか……。

ぜんぶやってもいい。

これから、もっと時間ができるのだから……。

そう思ってからしばらく、花桜梨は水槽から目を離し、机の引き出しを開けた。

中に、一通の手紙が入っている。

リビングへ行き、花桜梨は受話器を手にする。それから、便せんに書かれている番号をダイヤルした。

間があって、やや遠いコールが鳴りだす。

二度目の途中で、相手が出た。

『はい、もしもし。佐倉ですけどー』

男の子だった。変声期なのか、微妙にかすれている。

初めてだった。

「……あの」

緊張で胸が痛くなる。転校していく前も入れて、自分のほうから楓子に電話するのはこれが

「……八重といいますけど、楓子さんはいらっしゃいますか?」

『はい、ちょっと待ってください。――ねーちゃん、でんわーっ!』

受話器を離したらしく、家の中の音が聞こえてくる。

テレビのニュースらしき音声。フライパンで油が跳ねている音。小さな男の子がきゃっきゃと話している声――そういえば、弟が三人いると言っていた。

聞いているうち、花桜梨はそんな情景など経験したことがないのに、不思議と懐かしい気持ちになった。

『ねーちゃん、早く!』

急かす声に「は〜い」と可愛らしい返事がして、ぱたぱたとスリッパの足音が近づいてくる。

楓子だ。夕食の手伝いをしていたのだろう。

受話器が動く音。「誰から?」という楓子に、弟が「女の人」と答えた。

『はい、お電話代わりました。楓子です』

「……私。八重、八重花桜梨」

『八重さん!』

楓子の弾んだ声。
そのとき、横から「ねーちゃんって男からの電話、ぜんぜんないよなぁ」という弟のつぶやきが聞こえてきた。
『よけーなお世話！　……あ。ご、ごめんね。なんでもないから』
受話器を持ったまま移動を始めたらしく、階段を上る連続した響きがしている。
『最近やっと落ち着いてね、ちょうど私のほうから電話しようと思ってたところだったの。でも、八重さんに先、越されちゃったね』
へへ、と笑う声と一緒に、ドアを開ける音がした。自分の部屋に入ったようだ。
『電話くれるなんて、うれしいな〜。それでどう八重さん？　元気？』
「…………」
花桜梨は受話器を握る力をわずかに強める。そして、
「……やめるの」
と言った。
『え？』
「……やめることにしたの、学校」
目をつむってうつむいている。これを楓子に伝えるべきだという気がして、花桜梨は電話をしたのだった。

『……どうして？』
楓子が静かに訊ねてきた。
「……疲れたの。いるのが」
花桜梨は率直な気持ちを告げた。
受話器ごしに沈黙だけが伝わってくる。互いにひと言もなく、完全な静寂が訪れようとしたとき、
『……あのね、ごめんね』
ふいに楓子が言ってきた。それは、立ち入ったことを話す際に出す彼女の前置きだった。
『八重さんは、ほんとうにそうしたいの？』
「え……」
花桜梨は思わずそうもらす。
「……どういう、意味？」
訊ねると、少しの間を置いてから楓子の返事があった。
『私ね、八重さんは、ほんとは学校やめたくないんじゃないかなって思うの』
「………」
あまりに意外だった答えに、花桜梨は一瞬言葉を失う。
「……そんなことない。私は――」

『だって、電話してきた』
楓子の声が、そっと重なってきた。
そうしてできたわずかな沈黙のあとに、
『……八重さんは、止めてほしいんじゃないかな』
遠慮がちな、やわらかい響きが耳にふれてくる。
『だから、私に電話くれたんじゃないかなって……そんなふうに思ったんだ』
「…………」
花桜梨にとって、それはまったく考えていないはずのことだった。
けれど、楓子の言葉はとても大人びていて、真実を告げられたような感触がしてしまう。
『ねえ、八重さん』
楓子の声がかかる。
『私ね、ずっと思ってたんだ。八重さんにはきっと、前に何かつらいことがあったんだろうなって……』
「え……」
初めて聞かされることだった。楓子がそういうふうに感じていたとは。
『だから、八重さんが決めたんならしょうがないなって思う』
その声を聞きながら、花桜梨はふと考える。

気づいていても、詮索しないで自然にいてくれる……だから、楓子とは接していくことができたのだろう。
ほんとうは自分のほうがひとつ年上だというのに。楓子に対して、花桜梨はひどく子どもじみているような気になった。
『でもね八重さん、もうちょっとだけ考えてみて。……ね？』
「………」
花桜梨はぼんやりと、書いたばかりの退学願を見ている。
『ごめんね、なんだかえらそうになっちゃったね』
「ううん……そんなこと、ない……」
そう応えてからも楓子といくつかの言葉を交わしたが、自分の返事も含め、花桜梨の耳にはまったく入ってきていなかった。
………。
楓子の言うことが正しいのだろうか。それとも、違うのだろうか。
ひとりになりたい？
止めてほしい？
わからない。わからないが、ただ……。
迷って、いる。

『――じゃあ八重さん、今度は私のほうから電話するね』
いつのまにか、時間が経過していたようだった。
「……あ、うん」
『それじゃまだ早いけど、おやすみ』
「おやすみ……」
花桜梨は受話器を置いた。
とたんに、薄暗いリビングの広がりを意識する。
「…………」
ぼんやりとした闇。
自分の気配が拡散して、ただ吸い込まれていく感覚。何もない感覚。
それは心地よいようであり、つらいようでもあった。

3

「静かにしてくださーい」
放課後、教壇に立つ学級委員の月村小夜がざわつくクラスメイトたちを注意していた。
後ろで束ねた髪を結ぶハンカチで、ぴんと左右に羽根を作っている。はっきりしたラインの

眉ときりりとした瞳が、いかにも真面目で気の強そうな印象を伝えていた。
「おいおい、マジかよ」
「ねえ、帰りどうしよっか？」
「文化祭についての連絡事項があるので、みなさん静かにしてください」
小夜が再三言っても、雑談は収まろうとしない。このクラスは、学年でも特にやかましいことで有名だった。
その騒ぎから逃れようとするかのように、花桜梨はそばにある窓の外を眺めている。
「話ができないと、このままずっと終わりませんよ？　だから、静かにしてくださーい」
聞き分けのないクラスメイトたちに対して、小夜はていねいな言葉をけなげにくり返す。だが――
「おい、俊太」
「え、何？　あっはっは、なんだよそれー」
その瞬間、
「うるさいっ！」
びゅっ！　と鋭い音を立てて、小夜がチョークを投げた。
「いてっ！」
それが俊太の側頭部に命中する。

「なんだよ小夜！」
頭を押さえ、俊太は幼なじみである学級委員に抗議した。
「うるさいから注意したんでしょ」
チョーク投げという本来教師のものとされる技を放った小夜は、こともなげに返す。
「なんでいっつもオレなんだよ。こう言っちゃなんだけど、みんな、しゃべってるじゃないか」
小夜は鼻で笑ってみせる。
「タイミングの問題よ。あたしが『もう限界！』ってなったときに口を開くのが、いつもあんたなの」
「なんだよそれ！」
「あんたって昔っから間が悪いのよ。ブームの遊びにハマるのも、決まって周りが飽きた頃だし。それであたしが仕方なく、泣きそうなあんたの相手してあげるはめになるんじゃないの」
あはは、とクラスメイトたちの笑いが起こる。俊太はちょっと顔を赤くして、
「べ、べつに頼んだわけじゃないだろ！　それにおまえなんか、オレが休んでたのをいいことに給食で残したチーズパン、オレの机にしこたま押し込んでたろ！　あのカビ、びっくりしたんだぞ！」
「な……。い、今そんなの関係ないでしょ!?　男のくせに昔のことをうじうじと！」

「おまえから言いだしたんだろ！」
「何よ!!」
「なんだよ!?」
「……また始まったよ……」
クラスメイトのひとりがやれやれというふうにつぶやく。それから——
「まあまあ、やめとけよ俊太」
「小夜、落ち着きなって」
周りが言い争う二人を引き離しにかかる。そのあとクラスは静かになって、ようやく会議が進行していく。これが、ここのお決まりのパターンだった。
そんな流れの中、花桜梨はひとり、窓の外を見ている。
もともと、騒々(そうぞう)しいのは苦手(にがて)だった。
「…………」
ざわめきに背を向け、花桜梨は教室の外を眺めている。
ときどき、ガラスに映るクラスメイトたちの影を見ている——。
壁に、食中毒(しょくちゅうどく)を起こす細菌(さいきん)の顕微鏡(けんびきょう)写真が載ったポスターが貼(は)ってある。
花桜梨はまた、保健室で放課後を過ごしていた。

洗面台の鏡に、丸椅子に座る自分の姿が映っている。
――どうしたいんだろう……。
楓子と電話して以来、そのことばかり考えていた。
あまりに悩んでもう言葉も生まれず、ただ「悩んでいる」という気分の重さだけが頭にのしかかっている感じだった。
そのこと自体が煩わしい――と、ふいにそう思えた。
「…………」
カバンの中には、ずっと退学願を入れている。
花桜梨は鏡に映る自分と見つめ合う。疲れた顔をしていた。
――やっぱり、私は……。
がらっ。
「すいませーん」
のんびりとした声が響き、半袖のユニフォームを着た男子生徒が入ってくる。俊太であった。
花桜梨の表情が強張る。
「あ、八重さん」
俊太はまた驚く顔をしたが、前とは違ってちょっと気まずそうな色が混じっていた。
だが、すぐに「はは」と笑う。

「いやー、またコケちゃってさー」
言いながら、両手の外側を見せてきた。赤くなって、ちょっと皮がめくれている。
「ははは。まいった、まいった」
「……………」
花桜梨は目をそらして黙っている。前のこともあって、俊太に対してあまりいい印象を持っていなかった。
「えーと……じゃあオレ、自分でやるね」
空気を察したように、俊太はそっと音を立てないようにピンセットを取って治療を始める。
「いてっ」
傷に綿をあてたとき、俊太がちょっと顔をしかめた。こういう傷のほうがしみるものだが、どうも静かにするということができないらしい。
俊太はようやく黙って作業していく。どこに何があるのかを、花桜梨以上に熟知している様子だった。
と、俊太がちらりと見返してくる。いつの間にか注目していた自分に気づき、花桜梨はまた視線を外した。
「オレさ、ここの常連なんだ」
質問に答えるように俊太が照れ笑いで言う。

「しょっちゅうコケたりぶつけたりしてさ。転校してった佐倉さんにも、何回も世話になったな……」

「……そう」

ふいに出てきた楓子の名前に、花桜梨はつい反応する。俊太の言葉には、楓子の転校を惜しむ響きが込められているように思えた。

「それだけじゃなくて、佐倉さんはオレの恩人なんだ」

「恩人……？」

花桜梨は聞き返す。

「うん」

俊太はうなずいたあと、真面目な顔でうつむく。そういえば下を向く彼を見るのは初めてだと、花桜梨はどうでもいいことに気がついた。

「オレ、高校からバレー始めてさ。前も言ったかもしれないけど、入ってきた後輩がみんなオレよりぜんぜんうまいんだ。そりゃ、中学からやってたかもしれないけど……オレは一年やっても進歩なくてさ、向いてないんじゃないかって悩んで……それをつい、今みたいに佐倉さんに言ったんだ」

そこまで言って、俊太はぽりぽりと頭をかく。

「なんか、聞いてほしくなるような雰囲気あるから。佐倉さんって」

「……うん」
それは、とてもわかる気がする。
花桜梨は先日の電話を思いだす。ふと、学校にいた頃の楓子の笑顔が浮かんだ。
「佐倉さん、オレのこと一生懸命励ましてくれてさ。すごく一生懸命で……じんときて……がんばろうって気に、ほんとになれたんだ」
俊太はしみじみと話す。
…………。
ひょっとしたら、自分も抱えている苦しみを楓子に伝えてしまっていたのではないだろうか。
それとなく励ましてもらっていたのではないだろうか。
だから楓子といるとき、あんなに心が楽だったのかもしれない……。
「あのときやめなくてよかったって思う。だから、佐倉さんはオレの恩人なんだ」
顔を上げて、俊太はとてもさっぱりとした表情で言う。
「……そうなんだ」
つぶやいて、花桜梨は頬の強張りをいつの間にか解いている。楓子についてそういうふうに語る俊太に、なんだか悪くない気持ちがした。
「おっと」
俊太が、落としそうになったテープをあわてて受けた。傷口をガーゼで覆おうとしているの

だが、手のケガゆえ片手でしなくてはならず、かなりやりづらそうだった。
「……かして」
花桜梨は言った。
「やるから。私……」
「あ、ほんと？　じゃあ、ごめん」
「…………」
ガーゼとテープを受け取り、花桜梨は手早く作業していく。
「でも、ほんと残念だよ。もっとうまくなって、試合で活躍して、『佐倉さんのおかげで勝ったよ』って言いたかったんだけどね」
「そう……」
花桜梨はあいかわらずそっけなく応える。だが、その声は心なしかいつもよりやわらかい。
ぴぃ……とテープをのばす音が花桜梨と俊太の間にだけ響いて、それが放課後の日溜まりにしみていく。
なんとなく誰もしゃべらなくなる、そんなひとときだった。
「失礼します」
律儀な言葉とともに、戸が開かれた。
入ってきたのは学級委員の月村小夜だった。彼女もまた、俊太と同じバレー部のユニフォー

ムを着ている。
「もう、何やってるのよ！」
俊太を見つけたとたん、小夜はあからさまに不機嫌(ふきげん)な顔を作った。
「たかが擦(す)り傷(きず)の消毒にいつまでかかってるの？　早く練習に戻りなさい！」
「わかってるよ……」
俊太も、とたんにすねた子どものような態度になる。
「どーだか」
小夜がつかつかと歩(あゆ)み寄ってきた。
「だいたいなんであたしが、あんたとこの監督にこんな役頼まれなきゃいけないのよ!?」
「オレに言うなよ」
「そもそもの原因はあんたでしょ！　ほら、さっさと立ちなさい！」
言って、小夜が俊太の腕を取る。俊太はしぶしぶと立ち上がった。
「じゃ八重さん、また……」
「何が『また』よ。いいかげんその程度のケガで保健室来るのやめなさい！」
そのあと、小夜がころっと学級委員の顔になって花桜梨に振り向く。
「ごめんね八重さん。バカが迷惑(めいわく)かけて」
「……べつに」

「おい小夜、バカって――」
「行くわよ俊太」
言いかけた俊太を引っぱり、小夜は出口へと向かう。
「それじゃ、失礼しました」
「おい、バカって――」
戸が閉(し)まった。
「…………」
二人が出ていったあとを見つめながら、花桜梨はしばらく茫然(ぼうぜん)としていた。

4

花桜梨の休日の過ごし方はいつも決まっている。
熱帯魚の専門店でエサを、コーヒーショップで豆を買い、その二つの袋を下げて中央公園に寄るのである。
市の外れにある、ちょっとした町ほどもある緑の敷地(しきち)。
花桜梨は並木道(なみきみち)に向かって歩いていた。
ここに限らず、花桜梨は公園という場所が好きだった。なぜと問われてもはっきりした答え

はない。あるものを好きな理由というのは、ときとして曖昧なままで置いておくことがあるのではないだろうか。

日曜日の夕方近く、並木道へと向かう途中には散歩や遊びに興じる多くの人たちがいたが、苦手なはずのざわめきもここでは気にならない。植えられた緑がそういったものを吸い込んでいるのではないかと、花桜梨はそんなふうに考えた。

長い一本道の両わきに、木々がずっと奥まで並んでいる。

──あ。

朱や黄色、ほのかな緑。

すっかり紅葉をとげている景色を、花桜梨は少しきょとんとした表情で見つめた。先週来たとき、それはまだまだ深くくすんだ緑だったのに。

「…………」

葉を茂らせ、花を咲かせ、実を結んで、眠りにつく。四季の中で、植物はそれをきちんと行っていくのだ。けっして、とどまったりせずに。

そんなことを思いながら眺めて、花桜梨はゆっくり並木道を歩いていく。

木々が震え、梢が鳴った。

風にさらわれ葉が一枚だけ宙に舞い、澄んだ空気の中を音もなく揺れ落ちていく。

ほう……と吐息をついた。

胸のあたりがくすぐったくなって、花桜梨は小さな幸福感に満たされる。美しい景色には、ほんとうに人の心を動かす力がある。
並木道が終わりにさしかかろうとしたとき、花桜梨の目に、宙に浮くバレーボールが映った。
ボールはなだらかな放物線を描いて天頂(てんちょう)に達し、落下(らっか)に転(てん)じる。
それをジャージを着た少年の背中が追いかけ、組んだ両手ではじいた。
はじかれたボールは投げてよこしたらしき男の子の、ずっと左後ろに転(ころ)がっていった。
「あ、ごめん！」
少年が不機嫌そうにボールを拾いに行った男の子にあやまる。
少年は、俊太だった。
男の子がまたボールを投げていき、俊太はそれを左右に追ってレシーブしていく。きちんと相手の手元に返ることはめったになく、男の子はたびたび拾いに行かされていた。
――基本ができてない。
遠目(とおめ)に見つめながら、花桜梨はそう思った。
俊太がボールを肩にぶつけて後ろに飛ばしてしまう。拾おうと振り返った彼が、はっと花桜梨に気がつく。
「八重さん！」

俊太が、明るい顔をして駆け寄って来た。
「買い物？」
「……うん」
花桜梨は無表情に答えた。
「そっか。オレはちょっと気が向いてさ、自主トレに来たんだ。いつもは部活あるんだけど、今日は講堂ふさがってるし、外も陸上大会やってて使えなくてさ」
「そう……」
「いやーそれにしても、よかったよかった」
何がよかったのか俊太は、のんきに笑う。
「なあ！」
俊太の後ろで子どもの甲高い声がした。ボールを投げていた男の子が、もの言いたげな目で見上げている。
「もういいだろ？　オレ行くぞ？」
「あ、ああ。うん。ありがとな」
俊太がうなずくと、男の子は「じゃ」と言って、見たいテレビがもうすぐ始まるかのような勢いで駆けていった。
「頼んで練習手伝ってもらったんだけどさ、今の小学生が一〇〇円じゃ動いてくれないってこ

とがよくわかったよ」
　苦笑（くしょう）する俊太に、花桜梨は何の反応もせずにいる。不機嫌というよりも、どうしていいのかがわからない。そんな『自分』がずっと固定してしまっていた。
「……それじゃ」
　逃れるように花桜梨が歩いていこうとしたとき、
「あ、待って八重さん！」
　俊太が呼び止めてきた。
「……何？」
「よかったら練習、手伝ってくれないかな……？　さっきの、ちょっとしかやってなくてさ」
「え……」
「ボール投げてくれるだけでいいんだ！　お願い！」
　俊太が両手を合わせて頼んでくる。
「………」
　花桜梨は少しの間（ま）を置いたあと、
「……少しなら」
　と言った。花桜梨にとっての公園という場所が、そういう気持ちにさせたのかもしれない。
　俊太が離れていき、一〇メートルほどのところで軽く構えた。

「左右に振って投げてくれるかな？　サーブレシーブの練習なんだ」
サーブレシーブとは、相手から来たサーブを処理する過程。なんでもないように見えるが、実は勝負の八割を占めているとも言われる最重要のプレーである。
花桜梨はかがんで、足もとにあるボールを取った。
…………。
すべらかな革の感触。球にそって縦横に走る溝。両手にちょうどよく収まる。……軽い。
二年ぶりに手にした、バレーボールの感触だった。
抱えたボールを見つめて、花桜梨はどうして引き受けたんだろうかと今さらに思った。だがそう思いながらも、体の奥でうずうずと何かがくすぶりだしているのを感じてしまう。
「じゃ、投げるから……」
それを断ち切ろうと、花桜梨はボールを構えた。
──投げるだけ。
少しつき合って、すぐ切り上げよう。
そう決めて、花桜梨はボールをゆっくり右に投げた。
俊太がそれを追って移動していく。
──違う。
花桜梨は心の中でつぶやいていた。

ステップがめちゃくちゃだ。だから体が上下に揺れて構えが安定しない。
ボールに追いつき、俊太がレシーブした。
——そうじゃない。
膝が出ていない、腕に傾斜がついていない、打ったあと体がこちらに向いていない——あれではちゃんと返せるはずがない。
案の定、見当違いにそれていく。花桜梨は移動して、ボールをキャッチした。
「ごめん、ごめん。もう一回お願い」
「…………」
「？　どうしたの、八重さん？」
「……正面に投げてみて、いいかな」
「え？　いいけど……」
それはできるのに、と言いたげな俊太に向かって花桜梨はボールを投げた。
「よっ」
軽いかけ声とともに俊太がレシーブする。ボールはきちんと、花桜梨の手に収まった。だが——
——やっぱり。
基礎の基礎から、できていない。

このレシーブではいい攻撃につながらないし、相手が少しでも変化のあるサーブを打ってきたら処理できないだろう。

前にクラブをのぞいたとき正直レベルが低いと思ったが、おそらく練習ではメニューをくり返すだけでまったく個別(こべつ)指導が行われていないのだろう。弱いチームはたいていそうだ。

「八重さん？」

怪訝(けげん)そうに呼びかけてくる俊太に、花桜梨は、すっ……と眼差しを向けた。

「……構えて」

「え？　えーと……はい」

「もう少し低く」

すかさず言って、花桜梨は俊太に歩(あゆ)み寄っていく。

いつの間にか本気になっている自分に、花桜梨はまったく気づいていなかった。

「引きつけたほうがいいボールが返せるし、相手のコートもよく見えるから」

「えーと、これくらいかな？」

「低すぎる。手と膝がカタカナの『コ』の字を作るぐらいにして」

「こう？」

「そう。もう少し前かがみに。重心は両足の親指にかけて——そう。じゃ、ちょっと上げてみて」

言って、花桜梨は俊太の手の上にボールを落とした。
「よっと」
俊太がはじく。
「腕を振らないで。乗せて、膝のクッションで送りだすイメージで」
花桜梨はもう一度ボールを落とす。
「えいっ」
「腕が曲がってる。板を作る気持ちで。それと、ボールを当てる瞬間は手首を内側にしぼって」
花桜梨は後ろに離れて、俊太にボールを投げた。
ぼんっ、ぼんっ……と、何度かくり返して、だんだんきちんとしたボールが返ってくるようになる。
「じゃ、横に振るから」
花桜梨は左に投げた。
すると、俊太はまた外れた軌道のボールを返してきた。
「あれ？」
「そうじゃなくて。まず、短い移動は継ぎ足（サイドステップ）を使うの」
言ったあと花桜梨はレシーブの構えを作って、すっと右に移動した。上体（じょうたい）がまったく動か

ずに水平を保つ。
「右に行くときは右足から出て、そのあと左足を引きつける。こうすると上体が保てるから。それから――」
花桜梨は手首を絞り、膝を伸ばしざま俊太のほうを向く。
「こう返す。ボールが来た方向に膝を突きだして、腕は外から内に傾斜をつける。打ったあと、へそがセッターに向いてるように」
花桜梨はもう一度、連続でくり返す。そのなめらかな動きが経験者のものであることは、誰の目にも明らかだった。
そして花桜梨がまたボールを投げ始めると、俊太が必死に真似をしてレシーブしていく。
「とっ」
「姿勢がぶれてる。もっと上体を意識して」
「ふっ」
「また腕が曲がってる。ボールを板に乗せて、全身でもっていくイメージで」
「ほっ」
「そう」
一年以上も我流でやっていれば変なクセがついているものなのだが、俊太には奇跡的にそれがなく、しかも吸収が早かった。

「じゃ、もう少しボール強くするから」
言って、サーブの構えを取ったとき、
――！
花桜梨は、はっとなった。
「…………」
ゆっくり腕を下ろす。落ちたボールが芝生の上で一度、重たげに跳ねた。
「どうしたの、八重さん……？」
わずかに息を弾ませながら俊太がきょとんとしていたが、すぐにもう終わりなのだと察したらしく、構えを解いた。
「…………」
花桜梨はうつむいて黙っている。俊太の視線を感じた。
八重さん、バレーやってたんだ？
なんで、今はやってないの？
これから、そう訊かれるに違いない。いやな気持ちにさせられなくてはならない……。
「ねえ、八重さん」
――来た。
「……何？」

花桜梨は身構えるような低い声を出す。
「ジュース買ってくるけど、何がいいかな？」
花桜梨は顔を上げた。
「手伝ってくれたお礼っていったらケチくさいけど。あ、でも今度、なんか改めてお礼するよ……で、ジュースだけど何がいいかな？」
「……コーヒー」
少しあっけにとられたまま、花桜梨はそう答えた。

ごくまれに、こんな夕景が訪れる。
空気そのものが色づいたかのように景色がぼんやりとした金色に包まれ、そのままずっと暗くならずにいる。
あたりには、そんな景色にはしゃいで意味もなく駆けている子どもたちや、帰途についてる恋人たちの姿があった。
「いやー、なんか不思議っていうか、きれいだよねぇ」
花桜梨の横で俊太が言う。二人は同じベンチに離れて座っていた。
「………」
花桜梨は無言のまま、手にした缶コーヒーのあたりに視線を置いている。フタは開けていな

い。

「昨日は寒かったけど、今日は一日過ごしやすかったよね。あ、でも明日は雨降るんだってさ。久しぶりに」

さっきから俊太は、そんなどうでもいい話題を続けている。それが花桜梨にはどこか白々しく聞こえていた。

普通ならば、真っ先に会話の糸口に使うだろうこと。気づかなかったはずはない。

――どうして、訊かないの？

花桜梨は気になって、ふれてほしくないはずのことなのに、やきもきしてきていた。

「そういや、昨日テレビで見たんだけどさ――」

「……訊かないの？」

花桜梨はとうとう、自分から切りだした。

「えっ？」

そのわずかに動揺した調子から、花桜梨はやはり俊太が気づいていたことを悟った。

「気づいてたんでしょ……？」

すると、俊太はなさけない苦笑いを浮かべて、足もとに視線を落とす。

「うん。でも、訊いてほしくなさそうだったから……」

「あ……」

花桜梨は思わずつぶやく。彼がそういうことを言ったのが、とても意外な気がした。
「でもさ」
俊太が振り向いてきた。
「八重さんはすごくバレーが好きなんじゃないかって、オレには見えた。オレはそうだから、もし一緒だったらうれしいな」
屈託のない笑みで言う。そして照れを隠すように、持っていたジュースを一気に飲み干した。
「八重さん、コーヒー飲まないの？」
言われて、花桜梨は再び手にした缶を見つめる。
「…………」
ついコーヒーと言ってしまったが、本格派の性か、缶コーヒーにはあまりいい印象を持っていない。
ぷし……とプルを開けた。
缶の飲み口をゆっくり唇にあて、花桜梨はちょっとだけ飲む。
……そんなに、悪くなかった。
「オレさ、昔からずっとバレーやりたかったんだ」
ふいに俊太が話し始めた。
「こう見えてオレ、小さい頃は体弱くてさ。学校は休みがちで、体育も見学って感じだったたん

だよ。だから、今もちょっとしたケガで消毒しなきゃって不安になって……」
花桜梨は黙って聞いている。
「でも高校に入るあたりから急に元気になってさ、念願のバレーが始められたんだ」
俊太の声が弾む。
「もう、『やったーっ！』って喜んだよ。すごくうれしくてさ」
楽しそうに話す俊太の横顔には言葉どおり、うれしくてしょうがないという気持ちがあふれていて、それが花桜梨のところにまで届いてくる。
……自分にも、そういうときがあった。バレーをしていた、うれしかった毎日。
あのときの自分も今の彼と同じ表情をして、同じ印象を人に与えていたのだろうか……。
「で、今は憧れだったリベロのポジション目指してがんばってるんだ」
「リベロ……？」
花桜梨はつい、聞き返した。
攻撃に参加できない守備専門のポジション。大切な役割ではあるが、憧れの対象にはなりにくいもののはずだった。
「そう、リベロ。やっぱりめずらしいかな？」
「……うん」
花桜梨が応えると、俊太は「なんて言うかな……」と頭をかく。それから、じっと花桜梨

の目を見つめてきた。
「自分で決める、じゃなくて、拾う。仲間を信じてつなぐ……そういう気持ちが好きなんだ」
そう言って、ちょっとはにかんでみせた。けれど瞳だけは変わらずにまっすぐでいて、きらきらと景色の光を照り返している。
とてもきれいだと……花桜梨は思った。そのとき——
鐘の音が聞こえてきた。
花桜梨は空を仰ぐ。
とても遠くからだろうその響きは透明で、聞いていると不思議なほどに胸が温かくなってくる音だった。
「どこからかな？」
俊太も空を見上げている。
「学校のほう、かな？」
耳を澄ませながら、かなり当てずっぽうに言っている。
「…………」
花桜梨は空を見つめている。微かに目を細めて。
そうしていると、ふいに何かがわかりそうな、そんな感じがこみ上げてきた。
「あのさ、八重さん」

振り向くと、俊太のやや改まった表情があった。
「……何？」
すると、俊太が少しためらいがちに言ってくる。
「よかったら……また、バレー教えてくれないかな？」
「…………」
花桜梨は表情に戸惑いをにじませ、そのあと、
「……べつに、いいけど」
ぎこちない声で言った。
「ほんと!?　ありがとう八重さん！」
ぱっと明るくなった俊太を前に、花桜梨の中でひとつの自覚が芽生えた。
――やっぱり、私は……。
もう一度他人を信じられるようになりたいのだ。
彼のように……。
鐘の余韻が金色の夕空にたゆたっている。
泣きたくなるほど美しいひとときに包まれながら、花桜梨はそう、気がついた。

二章……雨のち晴れて

1

部屋の片隅にほろ苦い芳香が立ちのぼっている。
かちりと磁器のふれあう音をさせて、花桜梨はカップを手にした。
金と濃紺の縁取りに、言われなければ気づかないほどさりげなく貝の模様がほどこされた上品なデザイン。ローデスという、イギリスブランドのカップだった。
そのひとつだけで雰囲気が出て、ここが自分の部屋だということを忘れそうになる。
揺れている褐色の液体。この色は焙煎によってできた豆のカラメルが元になっているのだと、前に本で読んだ。
口元に寄せると、あごに湯気があたる。その香りは心を落ち着かせて、けれど深く吸い込むと胸の中がきゅう、と少しせつなくなる。
花桜梨はそっとコーヒーを口に含んだ。
角のない苦みが広がって、まもなくほのかな甘みへと変わっていく。
——うん。
きちんと淹れられている。
満足の吐息をついてから、花桜梨は隅に置かれた水槽に目をやった。

水がわずかに白く濁っている。さっき水を三分の一ほど入れ替えたせいだ。半日もすれば、バクテリアの浄化でまた透明に安定する。
アクアリウムの手間をひと言で表せば、『魚が住んでいた熱帯河川の環境を水槽という狭い空間で再現、維持していく』ということになるだろう。
縁日の金魚でさえ、ただ水の中に放しただけでは一週間ももたずに死ぬ。熱帯魚をきちんと飼うためには、浄化フィルター、ヒーター、pHを初めとした水質調整剤など、最低でも二三ほどの道具をそろえなければならない。病気になれば薬がいるし、水草を育てるなら二酸化炭素添加器具も必要だ。そして、清掃や水換えなどのメンテナンス。
ただ、そこにはひとつの世界を創造し育てていく楽しみがあり、それがアクアリウムの醍醐味と言えた。
元気に泳いでいるペレズ・テトラを眺めながら、花桜梨はまたコーヒーをする。
おいしい。昨日買ったばかりの新鮮な豆だから、格別だ。
「…………」
昨日、と思ったとき——花桜梨の中に俊太のことが浮かんだ。
信じる気持ちが好きなんだと言った、屈託のない表情。自分もこの人のようになりたいと、そう思った。
あのきれいな眼差しに、まっすぐ見つめられながら……。

なんだかふいに恥ずかしい気分になって、花桜梨は誰もいないのに視線を落ち着きなくそらす。

そのとき、電話のコールが聞こえた。

花桜梨はリビングまで行って、そっと、どこか気乗りしない動作で受話器を取る。

「……八重ですけど」

『あ、八重さん？　私』

「佐倉さん……」

『こんばんは』

驚く花桜梨に、楓子がいつもの可愛らしい声で言ってくる。

『今度は私から電話しちゃった』

へへ、と笑う。

『今、大丈夫だった？』

「うん」

『よかった。あのね……』

それから、楓子は自分の近況をあれこれと話してきた。

向こうの学校でも野球部のマネージャーになったということ、強豪だけあり部員が多くて大変だということ、でもやりがいがあるということ。

「そうなんだ……」
花桜梨は相づちを打っている。
『でも私って、あいかわらずドジばっかりで。おとといもね……』
「うん」
リビングにひとりきりだったが、電話している今は不思議とそんな気はしなかった。楓子と二人でいて、場所もうまく言えないけれど、どこか別のところだという感じがする。
『……ねえ、八重さん』
楓子が急に、声をうかがうような調子に変えてきた。
「何？」
『八重さん、何かいいことあった？』
「え……？」
唐突な問いに、花桜梨はきょとんとなる。
「どう、して……？」
花桜梨が聞き返すと、楓子は『う～ん、なんとなくだけど……』と前置きして、
『声が明るいから』
と言う。
「…………」

そのとき、花桜梨の脳裏(のうり)にまた昨日のことが浮かんできた。
でも、それが「いいこと」で、「声が明るくなった」ということになるのにはなぜか抵抗を感じたので、
「べつに、ないけど……」
花桜梨はそう答えた。
『そっか～……』
楓子は、納得(なっとく)も疑(うたが)いもないというふうな、曖昧(あいまい)なつぶやきをもらす。
「……佐倉さん」
今度は花桜梨が調子を変えた。
『何？』
音も立てず、花桜梨はひと呼吸する。前に電話したときのこと。今自分がどうしているかを、伝えておくべきだという気がした。
「……私、まだ行ってるから……学校」
『うん、知ってるよ』
「えっ……」
『昨日先生からお手紙が届いたの。そこに、八重さんが保健委員を引継(ひきつ)いでやってくれてるって。だから……』

そう言う楓子の声にはうれしそうな気持ちがたくさんにじんでいて、その響きが花桜梨に温かくふれてくる。

「…………」

『あ、委員のことごめんね。迷惑かけちゃった』

「ううん……べつに」

『でも、保健委員って退屈でしょ？』

楓子が振り返るような口振りで言ってくる。

「うん。でも、それは平気だから」

『あ、そうだ』

ふいに楓子がくすくすと笑いだす。

「何？」

『やっぱり鳥越君はよく来るの？』

「――！」

唐突に出たその名前に、花桜梨は少し動揺した。

『どうしたの、八重さん？』

「……なんでもない。……うん。彼、よく来る」

『だよね～。レシーブで転んだって言って来るんだよね？』

「そう」
『でも鳥越君ってすごく一生懸命でしょ？　だから私、見ててつい応援したくなっちゃったなあ』
「……あ」
ふと思いだして、花桜梨は声をもらす。
『え？』
楓子に聞き返されると、花桜梨はためらうようにわずかな沈黙をおいてから、こう言った。
「……彼、残念がってた。佐倉さんが転校したこと」
『そうなんだ……』
一度口を開いたことで、半ば勝手に言葉が出ていく。
「佐倉さんのこと、恩人だって言ってた。うまくなったところ、見せたかったたって……」
それから少しだけ長い沈黙があったあと——
『……鳥越君と、お話ししたんだ？』
と、楓子が訊ねてきた。
「……少し」
答えながら、花桜梨はどうしてか「口がすべってしまった」というあせりの気持ちになった。
『ふ〜ん……』

楓子のつぶやきを聞きながら、花桜梨は受話器の向こうからなにごとか考えている空気が伝わったように感じた。
『ねえ、八重さん』
「何？」
『あのね、鳥越君に伝えてほしいことがあるんだけど』
「え……」
『機会があったときでいいから。お願いしていい？』
「うん……なんて？」
『がんばって、って』
言ったとき、楓子がなぜかくすりと笑った。
「……わかった」
『あ！　いけない、もうこんな時間～』
楓子があわてる。つられて花桜梨も電子レンジのデジタル時計を見ると、もうすぐ夜の一一時というところだった。
『ごめんね、練習で毎朝早いから……』
「うん。それじゃ……」
『八重さん』

「何？」
『……がんばって』
今度は囁くような、けれど力のこもった声だった。
『おやすみなさい』
そして、楓子からの通話はそっと途切れた。
花桜梨は受話器を置く。
「…………」
がんばって――。
楓子の声が、花桜梨の脳裏にぼんやりとこだました。

2

「ねえねえ！　あれってやっぱり伝説の鐘だったみたいよ！」
「うそぉ？」
放課後の教室で、女生徒たちが会話していた。
といっても、他のクラスではちょうど六時限目が始まったところである。自習の授業を繰り上げたことにより、早く終わったのだ。だがこれで得をするのは帰宅部の人間だけで、スポー

ツ系クラブの部員はこうして練習が始まるまで教室で時間をつぶしたりしている。
「ほんとだって！　聞いたんだから！」
「えー。でもぉ～」
まくし立てるメガネの女の子に対し、ちょっと太めの女の子は疑わしげな反応をした。
「…………」
そんなやりとりから離れた位置で、花桜梨は黙々と帰り支度をしている。
花桜梨の学校生活はこれまでどおりだった。——独り。
もう一度他人を信じられるようになりたいと、そう思った。今でも気持ちは持っている。
でも、思ってすぐに変われるのなら誰も苦しんだりはしないのだ。
「友達の友達が陸上部でさ、大会の帰りに学校から聞こえたって言ってるんだからまちがいないわよ！」
メガネの女の子が、太めのクラスメイトを納得させようとやっきになっている。
休日に花桜梨が中央公園で聞いた鐘の音。あれがこの学校にある『伝説の鐘』だったのではないかと、校内では今、それがけっこうな話題になっていた。
「でもなぁ……」
「何よ？　何が不満なのよ？」
「だって鳴ってないじゃない、鐘ぇ……」

そう。恋人たちに祝福を与えるという伝説を持つ時計台の鐘は、あいかわらず故障したままだった。
「直ったんなら、今も鳴ってるはずだよぉ？」
「それは……そう、あれよ！　あの鐘は祝福すべきカップルが生まれたときにしか鳴らないのよ！」
「なんか話が違ってる気がするけどなぁ……」
「そうなの！　きっとあの日、学校の中で素敵な恋人同士が生まれて、伝説の鐘の祝福を受けたのよ……はぁ。ロマンチック……」
「妄想入ってるねぇ……」
うっとりとしたメガネの子をやれやれというふうに眺めつつ、太めの子は食堂で買ったチョココルネをもくもく食べ始めた。
「もう、あんたって食べることばっかなんだから！　ねえ、小夜はどう思う？」
「え？」
呼ばれて、少し離れた席に座る小夜が振り向く。
「ごめん、何の話……？」
「ほら、あれよ。伝説の鐘が鳴ったかって話」
「ああ」

「どう思う？」
「そうねえ……」
小夜はシャーペンを手元で揺らしながら、天井のあたりを見上げる。
「小夜だって伝説、信じたいよね？」
「まあ、そうね。女の子だし」
「ぷっ」
小夜の向かいで俊太が吹きだした。
「何!?　俊太!?」
小夜がきっ、とにらむ。
「べつに……」
何か言いたげなにやけ笑いを浮かべつつ、俊太はノートの数式を解いている。
「！　あ、だからそこはそうするんじゃないって言ったでしょ！」
小夜が俊太の書いていた解答をごしごしと消しゴムで消し、シャーペンの先で教科書をつつく。
「ここ！　これ！　この公式を使うの！」
「うるさいなあ……」
「何よ！　それが教えてもらってる人に対する態度!?」

「誰も頼んでないだろ……」
むすっと俊太が言い返す。
「あんたね……意地張ってる場合じゃないでしょ？」
小夜は出来の悪い弟を見る目でため息をついた。
「前の期末、赤点二つも取ってたでしょ？　他もすれすれだったし」
「うっ……」
俊太がひるむ。ひびきの高校は全生徒の一教科ごとの点数を掲示するという酷なシステムを実施しているため、隠しようがなかった。
「このままじゃ補習どころか、進級だって危ないわよ？」
「だ、大丈夫さ。この学校で留年したやつなんて聞いたことないし」
「あんたが第一号になるのよ」
「そんなの……だいたい、オレがどうなろうとおまえには関係ないだろ！」
「あっそう」
ふふん、と小夜が鼻で笑った。
「じゃあ来年からは『おまえ』じゃなく、『月村先輩』って呼んでくれるわけね？　もちろん言葉も、です・ますってていねいな言葉使って。あーすごい楽しみ」
「まだ留年って決まったわけじゃないだろ！」

「決まりよ」
「バカ！」
「なっ……何よそれ!?」
「まーまー！」
「二人とも、やめときなよぉ……」
さっきの女の子たちが仲裁して、なんとか収まった。
「でも、ほんとあれよねー」
メガネの女の子が言うと、
「うんうん」
太めの女の子がうなずいた。
「何？」
小夜が訊ねると、女の子たちは意味ありげな表情を浮かべて口をそろえる。
「二人って仲いいよねー」
「どこが!!」
俊太と小夜の声が重なった。
「………」
教科書を詰め終えたカバンを手にしたまま、花桜梨はじっとその光景を見つめている。なん

となく。
と、俊太がこちらに気がつく。
花桜梨は視線をそらし、そのまま教室を出た。
授業が行われている他のクラスを通り過ぎ、花桜梨はつきあたりの階段を下る。
そして、下駄箱へと続く渡り廊下にさしかかった。
「八重さん！」
振り返ると、俊太が駆け足で階段を降りてきていた。
軽く息を切らしながら、俊太が花桜梨の目の前まで来る。
「……何か用？」
花桜梨はいつもの無表情で訊ねる。だが見る人によっては、わずかながら冷ややかだと感じたかもしれない。
「話したいことがあるんだ。いいかな？」
「何？」
「あのさ……」
言って、俊太がちょっと姿勢を正す。
「実はさ……」
「…………」

「……えーと」
「…………」
「その……」
「…………」
きょろきょろしたり、頭をかいたり、なぜか俊太は落ち着かない。
とうとう黙り込んでしまった俊太を前に、花桜梨は渡り廊下のひんやりした空気を足もとに感じていた。
「……あの」
そう口を開いたのは花桜梨だった。今がちょうどいい機会だと思った。
「伝言あるの。佐倉さんから」
「佐倉さんから？」
俊太が目を丸くする。
「電話で話、したの。そのときに……」
花桜梨が言うと、俊太の緊張していた表情がやわらぐ。
「そうなんだ。で、なんて言ってたの？」
訊かれて、花桜梨は楓子からの言葉を口にした。
「『がんばって』……って」

「……………」
俊太がなぜかぽかんとなる。言葉をしみ通らせているかのような長い沈黙のあと、
「そっか」
とつぶやいた。浮かべた苦笑（くしょう）は、楓子のことを思いだしているふうだった。
「……それじゃ」
「待って」
行こうとした花桜梨を、俊太が呼び止めた。
振り向くと、そこには俊太の少し引き締（ひし）まった表情がある。
「話っていうのはさ」
言いながら、俊太がズボンのポケットから二枚のチケットを取りだした。そこには『ケルト展』という、現在メディアに大きく取り上げられているイベントのタイトルが印刷されている。
「今度の休み、一緒（いっしょ）にどうかなって……」
「え……？」
瞳（ひとみ）を見開く。花桜梨にとって、それは何を言われたのかすぐに理解できないほど唐突な言葉だった。
「……私と……？」
訊きながら、花桜梨は自分の鼓動（こどう）が早くなってきていることに気づく。

その先で、俊太は指ではさんだチケットをせわしなくこすり合わせていた。

「あ、えーと、この前、練習手伝ってもらったとき、何か改めてお礼するって言ったよね？　ジュースだけじゃケチくさいからって。それで、だから……すいません!!」

いきなり俊太が頭を下げてきた。

「えっ……？」

「ほんとは単に、八重さんと一緒に行きたいだけなんです!!」

あまりのことに、花桜梨は口もきけない。

………。

鼓動はますます激しくなって、胸全体が揺れ動いているのではないかと思えるほどだった。耳の奥でじぅぅと、全身をかける血の音が聞こえる。手のひらににじんだ汗に気づく。

初めてだった。

異性から誘われるということ。小学生のときからずっとバレー一筋でやってきていたし、やめたあとは……。

「どうかな……？」

茫然としている花桜梨の前で、俊太がちょっと心許なさそうな目で見上げてくる。

「………」

――どうすれば、いいの……？

わからず、花桜梨はただ胸の音を聞いている。と、奥から突然、ひとつの声が聞こえてきた。
『……がんばって』
受話器ごしに聞いた楓子の声。
どうしてそれを今、思いだしたかはわからない。だが花桜梨は——
「……いいよ」
と、俊太に答えていた。
俊太は一度まばたきしたあと、みるみる明るい顔になっていく。それはまるで風船がいっぱいにふくらんでいくような感じだったが、
「よかったあ〜……！」
いきなり空気が抜けたように肩を落とし、大きな息をつく。とても、ほっとしたようだった。
「ありがとう八重さん！」
「……べつに……」
「いやー、よかった！　昔車にひかれそうになったときぐらい、どきどきしたんだよ！」
さっきまでのぎこちなさがウソのように俊太がはしゃぎだした。
「ほんと、今度の日曜が楽しみだなあ……！」
………。
おもいきり素直に喜ぶ俊太を見つめながら、花桜梨はこれでよかったような気がした。

胸の高鳴りは、まだ少し、続いていた。

3

ようやく就こうとしていた浅い眠りを、目覚ましのアラームが中断させた。

「…………」

花桜梨はひとつため息をつき、身をよじって枕元に置いた時計を見る。時刻を確認して、タイマーを止めた。

結局、眠れなかった。

あくびをかみ殺しながら起きあがり、そっとベッドから降りる。それから、しゅう……とカーテンを引くと、淡い光が部屋に満ちた。

窓を開けると肌寒い秋冷が入ってきて、視界に薄く雲がかかった曖昧な空が広がる。

予報では、日曜日は晴れ。

今は八時。一〇時にバス停で待ち合わせだった。

花桜梨は部屋を出て、支度を始めた。

いつものように顔を洗って、いつものように簡単な朝食をとる。

だがテーブルにかけながらもぼんやりとして、パンの味もいつも以上にわからない。ただ

日々の習慣として機械的にこなしている感じだ。かと思うと妙に落ち着かない気持ちになり、いつもより念入りに後片づけをして、その際に霧吹きが目に入ると、まだ必要ないのに部屋に置いた鉢植えのサボテンに水をやったりする。

何とも言えない……としかいいようのない気持ちだった。

こういうものなのだろうか。霧吹きを元の棚に戻しながら花桜梨は疑問に思う。普通は、他の女の子たちは、どうなのだろう……。

わからない。なんとなく違うんじゃないかという気がしてしまう。自信がない。わかるのは自分の心だけだから。でも、今はそれさえも怪しい。

花桜梨は続いて、水槽を泳ぐペレズ・テトラにエサをやる。ゆらゆらと落ちてきた飼料に魚が寄っていく。

——他の魚も、入れてみようかな……。

見つめながら、花桜梨は心の中でつぶやく。水槽の中がさびしいような気がした。たしかにまだまだゆとりがあったが、そんなふうに思ったのはこれが初めてのことだった。

入れるとしたら、同じテトラの、どの種類が映えるだろう……。ぼんやりと考えながら、花桜梨は水の中を眺めていた。

だが、突然はっとなって動きだす。

こんなことをしている場合ではない。出かける用意をしなくては。

花桜梨はクローゼットへと向かう。マンションの一室は静かに、あわただしかった。
クローゼットを開いて、花桜梨は中を一通り見る。
何も取らず、タンスの引き出しを引いた。
別の段を引いた。
また引いた。
「………」
花桜梨はそのまま立ちつくした。
『こういうときにふさわしい服』がないような気がした。
何を、どう着ればいいのだろうか。自分にとっての、こういうときにふさわしいものとはどういうものなんだろう。
すべてが初めてで、わからないことだらけで、花桜梨はほんとうは深く考えなくていいことにまでひとつひとつ戸惑い、迷う。
だが焦燥を感じながらも、花桜梨は次々と服を見ていく中で悪くない、という気持ちを芽生えさせていた。
手を止めたとき、ベッドの上には出された服がまるで飾りのように重ねられていた。それからふと時計に目をやって、花桜梨は驚いた。
あと一〇分で家を出ないと間に合わない。

花桜梨は大急ぎで結局普段どおりの、でも一番よいと思っている組み合わせを着て洗面台に向かった。花桜梨の部屋に鏡は置かれていない。

——今日は……。

歩きながら花桜梨は考える。

——どんな一日に、なるの……？

俊太のことを浮かべる。

中央公園で鐘の音を聞いたときのこと、渡り廊下で「一緒に行きたいんだ！」と頭を下げてきたときのこと、あとのうれしそうな表情……そのときの自分の気分を、胸の鼓動を思いだす。

——これから、彼と会う。

駅前広場で会う。顔を合わせて、挨拶する。

それから……。

「…………」

緊張してきた。

だが、それはけっして不快なものではなかった。

とくん、とくん……と心臓の音が耳に聞こえ始める。

——このまま、もしかしたら……。

変われるかもしれない——そんな気がする。

花桜梨は脱衣所に入り鏡の前に立つ。そこには、意外な自分がいた。

やわらかな表情をしている。

見慣れた冷たさも翳りもない。ほどけていて、とても穏やかだった。

こんな自分と対面するのは、きっと二年ぶりのこと。あまりに久しぶりだから一瞬頭が空白になって、不思議な感覚が襲う。

懐かしい顔と向き合いながら、花桜梨は——

怖く、なった。

「…………」

鏡に映る花桜梨が、見る間にいつもの無表情に戻る。

何度となくくり返し見た顔が、声が、よみがえってきた。忘れもしない過去の記憶。

『……もう、私にかまわないで』

親友だと思っていた。信じていた相手から言われた言葉。それは時が経っても少しも色褪せてくれず、積み重なるごとによけい痛みを増してくる。

——もし……。

また、裏切られたら……?
彼が、自分を傷つけたら……?
――怖い……。
今度裏切られたら、もうぜったいに立ち直れない。
――こわい……。
花桜梨はその言葉を浴びせられた瞬間と同じ悲痛な瞳になって、壁にもたれてずるずるとしゃがみ込んだ。膝に、顔をうずめる。
いつのまにか、空気のにおいが強くなっている。そのとき――
ぼつ、ぼつ、と外からガラスを叩く水の音がした。
それはどんどんせわしくなって、とりとめもなく、ついにひとまとまりの激しい雨音となった。
………。
薄暗い脱衣室に、降りしきる雨の音がこもっている。
もう、約束の時間には間に合わない。
花桜梨はひざを抱えながら、まるで外の雨に打たれているかのようにちいさく震えていた。

4

「これは余談ですが、一七世紀ヨーロッパの貴族社会では、娘を嫁がせる持参金で一家が破産することもままあったんですね」
　歴史の授業が淡々と行われている。月曜日の五時限目。生徒たちにとっては長かった今日の終わりが見えて明るい気持ちになってくる頃だ。
「当時の度重なる戦争で、貴族はどんどん財産を減らしていきました。ですから親は……」
　そんなふうに雑談が続いていたとき、がらがらと鈍い音を立てて戸が開かれた。
　花桜梨だった。
「……すいません」
　言いながら教壇に遅刻届を提出する。そのあと、花桜梨はクラスメイトたちのほうを振り返り、ある一点に目を向けた。
　俊太の席。
　そこは、ぽつんと空いていた。
……………。
「席につきなさい」

教師にうながされ、花桜梨は無言のまま自分の机に向かう。

席についたとたん、「どうして今頃来たんだ」と言いたげなクラスメイトたちの視線を感じた。そこから逃げるように、花桜梨は窓の外を見る。

昨日の雨に引きずられての重たげな曇り。

——どうして、来たんだろう……。

会いたくなかった。約束を破ってしまったのだから、顔など合わせたくなかった。

けれど、どうしても気になった。来ずにはいられなかった。

「…………」

花桜梨は、自分の心がまったくわからない。

わからないうちに、歴史の授業は終わった。

休憩時間に入り教室を出ていこうとする小夜を見たとき、花桜梨は立ち上がっていた。そして廊下の途中で追いつき、一度ためらってから、

「……月村さん」

声をかけた。

「えっ？」

振り向いた小夜は、花桜梨を見てとても意外そうに目を開く。

「どうしたの、八重さん……？」

「……鳥越君は、欠席してるの？」
花桜梨が訊ねたとき、小夜がふっとすました表情をのぞかせる。だがすぐに元のなにげない様子に戻った。
「ええ。具合が悪いみたい」
「具合が……？」
花桜梨が聞き返す。
「だって。詳しくは知らないけど」
「……そう」
言って、花桜梨は戻ろうとする。
「ねえ、八重さん」
ふいに小夜が呼び止めてきた。微妙に声の調子が違っている感じがした。
振り返ると、表情もなにげない中に、瞳だけがさっき垣間見せた静けさを宿している。
「昨日は、一緒じゃなかったの……？」
「え……」
思わず言葉を詰まらせた。だが、
「ううん……」
花桜梨は否定した。たしかにそれは嘘ではない。

「あ、ごめんね。変なこと訊いて」
とたん、硬直していた空気を払うように小夜がやや大きめの声で笑いかけてくる。
「誰かと出かけるみたいなこと言ってたから、もしかしてって思ったんだけど。そうよねぇー、あいつにそんな度胸あるわけないわ」
「…………」
「普段はあんなだけど、ほんとはその辺すごく小心者なのよ。俊太って」
小夜が苦笑いとともに言っていたとき、休憩時間の終わりを知らせるチャイムが鳴った。
「あ……」
「……ごめんなさい。用事、あったんでしょ……？」
花桜梨があやまると、小夜が軽く手を振った。
「ああ、いいの。ちょっと鏡見ようかなって程度だったから。さ、教室に戻りましょ」
「うん……」
そして二人は並んで廊下を歩きだす。
「あ、そういえば、こうして八重さんと話するのって初めてよね？」
沈黙を嫌うように小夜が話しかけたが、
「……そうだね」
何かを思うように、花桜梨の反応は鈍い。

「……うん。そうなの」
そんなちょっとぎこちない雰囲気で、花桜梨と小夜は教室へと戻っていった。

今日は、係の日だった。
放課後、花桜梨は保健室の椅子にかけたまま動かずにいる。そこに「悩み」というある種強い生気がなければ彫刻と映ってしまうほどに、じっと。
「…………」
俊太はどうして学校を休んだのだろう。花桜梨はずっとそればかり考えている。具合が悪いからと言うが、ほんとうは……。
――私と顔を合わせたくないせいかもしれない。
そう思ったとき、罪悪感と、どうにもならない自分への苛立ちと……あとひとつの気持ちで、胸が苦しくなる。
花桜梨は視線の先にあるあの白いベッドに身を投げだして眠ってしまいたい、と少し考えた。
保健室はあいかわらず、深まった秋の物さびしい日溜まりに満たされている。グラウンドからのかけ声や放送の呼び出しがその淡い光に溶け込んで、ここをぼやけた曖昧な世界にしている。
花桜梨はふと、戸を見つめた。

「…………」
こうしていると、また俊太が入ってくるのではという気がしてきた。レシーブの練習で転んだ、などと言って。
ありえない。
でも、そうならないか、と思った。どうして休んだのか、今どういう気持ちでいるのか、たしかめたいと……花桜梨はそう思った。
そのとき、がらりと戸が開いた。
——!?
花桜梨は自分の目を疑(うたぐ)った。
入り口には、俊太が制服姿で立っていた。
俊太はぼうっとした様子で視線をさまよわせ、ゆっくりこちらに向いてきた。
「……あ……」
花桜梨の姿を認めたとたん、俊太がほっとした表情になる。
「……八重さ…………」
言いきる前に、俊太が突然床に倒れた。
「——!」
花桜梨は俊太の元に駆け寄る。

「鳥越君！」

背中を揺すっても返事がない。あえぐような息が聞こえて、抱き起こした。

「…………」

荒い呼吸。顔全体にうっすら汗がにじんでいる。額にふれてみると、ひどい熱だった。

「鳥越君！」

花桜梨は名を呼ぶ。名前で呼びかけたのはこれが初めてだということに気づかずに。

そして俊太の肩を支えて立ち上がらせた。意識のないその体はひどく重かったが、幸いにも花桜梨はそれを支えるだけの体力に恵まれている。

運んでいき、俊太をきちんとベッドに寝かせた。

それから備え付けの白い洗面器に水を張り、枕元に持っていく。

花桜梨は水に布を浸して、きつくしぼった。

ぼたぼたぼたっ、と水音が重なって響く。

あとに、ぴち、ぴちっ……と水滴が跳ねる。

…………。

さざ波の広がる洗面器に視線を落としながら、花桜梨は昨日の激しい雨を思いだす。

折りたたんだタオルを、そっと俊太の額に乗せた。

熱。うなされ、苦しげな表情。

もしかしたら。
――雨の中、ずっと待ってたんじゃ……？
予報外れの雨、バス停。あの周辺で雨宿りのできる場所へ行けば、もし自分が遅れて駆けつけていたとしても彼の姿を見つけられない……。
花桜梨はじっと俊太を見つめる。
――そうなの……？
問いかけながら、頭の中にひとつの構成されたイメージが浮かんできた。
バス停の前で、雨に打たれて自分を待っている俊太の姿。
表情はどんなだろう。怒っている？　苛立っている？　いや、いつもどおりに明るいかもしれない……。
目の前で、眉をひそめて眠る俊太。見つめる花桜梨は、同じ表情をしている。
少し前まで体が弱かったと言っていた彼。もしそうだったら。ずっと待っていたんだとしたら……。
――どうしよう。
花桜梨の心が揺れる。迷う。締めつけられる。
――怖い……。
いつの間にか、彼の存在が大きくなってきていることに気がついた。

――駄目。
このままでは、いけない。
「…………」
俊太は昏々と眠っている。
いずれ目を覚ますだろう。そのとき、花桜梨は彼にこう言おうと決めた。
『……もう、私にかまわないで』
と。
彼の存在が大きくなって、このままもっと大きくなって、そうなったとき裏切られたら
……。
きっと、粉々に砕けてしまう。
「……う……ん……」
ふいに小さくうなったあと、俊太がうっすらと目を開いた。
「……八重、さん……」
見上げながら呼んでくる。
「あ……」
花桜梨が何か言おうとしたとき、俊太がとてもうれしそうな笑顔になった。そして――
「よかった……昨日ずっと来なかったから、何かあったんじゃないかって、すごく心配して

たんだ……」
安堵のため息をもらした。
「…………」
茫然となった花桜梨の前で、俊太は努めていつもの明るさで続ける。
「電話とか知らないし、どうしても気になって出てきたんだけど……ごめん、迷惑かけちゃったな……」
そんなことはない、という言葉を花桜梨は出せなかった。あまりに心がいっぱいなせいで出せなかった。
何もなかった。
ただ、行かなかっただけだ。
だというのに、彼は痛いほどに澄んだ眼差しを自分に向けてきている。
裏切られたなどと、少しも考えていないのだろうか。疑わず……疑わずに……
——私を、信じてるの……？
「……あのさ」
俊太の声に、花桜梨は我に返った。
「来週……駄目かな？」
「え……？」

聞き返すと、俊太が照れくさそうに目を細める。それからおずおずとして、
「……デート……」
と、ぽつり言った。
「…………」
「……けほっ」
俊太が小さくせき込む。
「あ、薬……」
はたと思いついて、花桜梨は席を立った。
薬箱から市販のカプセルを取りだし、蛇口(じゃぐち)へ行ってコップに水を注(そそ)ぐ。その二つを持って枕元に戻ったとき——俊太はまた眠りについていた。
花桜梨はゆっくり丸椅子(まるいす)に腰を下(お)ろす。そしてそっと手を伸ばし、俊太の額からすっかり温められてしまったタオルを取った。
水音が響く。
しぼり直したタオルを乗せたとき、俊太が少し楽になった顔をした。
「…………」
花桜梨はじっと俊太を見つめる。
その表情は、昨日鏡に映ったものと同じ穏やかで優(やさ)しげなそれだった。

——もし。
再び俊太が目を覚ましても、『もう私にかまわないで』と言わないかもしれない。
失いたくない、という気持ちがしたから。

5

雲ひとつない晴れだった。
しゅん、しゅん、と自動車の過ぎていく音を聞きながら、花桜梨は歩道を歩いている。角を曲がれば、すぐバス停。
そこにはもう、彼が待っているだろうか——。
花桜梨はちらりと腕時計を確認した。九時五八分。ほぼきっかりに着く。もっと早く来るつもりだったが、また鏡の前で迷ってしまった。新しく買った服を映しながら、変(へん)ではないだろうか……？　と。
今日は、先週の日曜の仕切直(しきりなお)し。
「…………」
角が近づいてくるにつれ、花桜梨は緊張してくる。少し怖いような気持ちも起こったが、それは先へ進みたいという誘惑(ゆうわく)に必ず断(た)ち切られてしまう類(たぐい)のささやかなものだ。

花桜梨は角を曲がった。
すると、そこにはあっけないほど自然に俊太が立っている。白のパーカーとジーンズという普段着が、新鮮に映った。
俊太がこちらに気づく。
いつものように、ぱっと明るい顔をするのかと思うと、彼ははにかみがちに軽く手を上げてきた。
「えっと、今来たところなんだ」
待った？　と花桜梨が訊く前に、俊太がぎこちない調子で言ってきた。
「そう……」
花桜梨はつられてぎこちなく応える。
「あ。いやー、ごめんごめん。おもいっきりベタなこと言っちゃったな」
はっはっはっ、と俊太が笑う。ようやく普段どおりになってきたかと思ったとき――
「ごめん!!」
いきなりあやまってきた。
「え？」
「実はさっき、なにげにチケット見たんだけど……もう、イベント終わっちゃってるんだ！」
俊太はまた「ごめん！」と、手を合わせてくる。

花桜梨はあっけにとられたが、べつに大した問題だとは思わなかった。
「……べつにいいよ。私、気にしてないから」
すると、俊太はゆっくり頭を上げて、やや落ち着かない仕草で話してくる。
「で、待ってる間考えてたんだけどさ、このままバスに乗って遊園地に行くのはどうかな？動物園でもいいし」
「…………」
「あ、もし八重さんに行きたいところがあったら、そこがベストだって思う。どっかあるかな？」
そう言われたとき、花桜梨の頭にふとひとつの場所が浮かんだ。
「……じゃあ」
そこには一面、銅色を照り返す石畳がしかれていて、瀟洒な空間を作りだしている。博物館やメセナがそれぞれ凝った建築で設けられていて、その一角に青空を映す鏡張りの建物があった。
入り口の上部にはペンギンの模型が飾られていて、その片手が示す先に『ＡＱＵＡＲＩＵＭ』という文字があしらわれている。
「はい、八重さん」

俊太が窓口で買ってきたチケットを花桜梨に差しだしてくる。お金は先に渡しておいた。
「水族館かー。八重さん、魚とか好きなんだ？」
入場口へと向かいながら、俊太が訊いてくる。
「うん」
花桜梨はそう答えてから、
「……熱帯魚、飼ってるの。部屋で」
と、なんとなく付け加えた。
「へぇー」
俊太がちょっと大げさに声を上げた。
「あれって世話がすごく大変なんだよね？」
「うん」
「なんか、フィルターつけたり、買ってきたばっかの魚はすぐに水槽に入れないで様子見たり慣らしたりって」
「……くわしい、んだね」
「まあね。ちょっと」
驚く花桜梨に、俊太はなぜか苦笑してみせる。
そして二人はゲートを抜けて、中へ進んだ。

深海をイメージしているのだろうか。順路のない広く解放されたスペースはアクアマリンとインディゴの濃い青で統一され、水槽からもれてくる光に淡く浮かび上がっている。
展示された大小の水槽には海ごとに分けられた魚や海洋ほ乳類、は虫類、無せきつい動物といったさまざまな生物が自由に、だが各々の規則性を持って泳いでいた。
「…………」
花桜梨はとたんに目を奪われ、何かに導かれるような足どりでそれらの水槽へと歩いていく。
「あ、八重さん……」
俊太が花桜梨の後を、そっと追っていった。
まるで抽象画の風情を漂わせて水中をさまようマンボウ。
圧倒的な銀の線となって進んでいくマイワシの大群。
鼻から出した泡を追いかけ、食べて遊ぶカマイルカ。
コバンザメを引き連れ悠然と泳ぐジンベイザメ。まのあたりにしたとき、その大きさに驚かされる。
ひとつひとつゆっくりと回っていき、花桜梨はある場所に釘付けになった。
そこはアクリルを仕切りに四角く切り取られ、上から左右、ちょうど海中に入っているかのような展望が広がっている。『珊瑚の浅瀬』という名前のこの場所は、熱帯の浅い海を再現したギャラリースペースだった。

いる。

そう思ったきり花桜梨は空白になって、ただただ目から入ってくる景観(けいかん)を意識に映しだしている。

──きれいだな……。

幾重(いくえ)にも弧(こ)を重ねた薄緑のテーブル珊瑚(さんご)。色あざやかな縞(しま)のバタフライフィッシュ、スズメダイ。魚の群が水をなぞるように絶えず流れ、交差していく。深い、奥にある深い青。

天井には水面の光の揺らめき。混(ま)じり合うアクアマリンとエメラルドグリーン、明確になる水の輪郭(りんかく)、質感(しつかん)。

「………」

小さな水槽の世界を持っているからこそわかる。ここにあるものがいかに大きなものであるかということ。ただ美しいものとしてだけでなく、手にできない憧(あこが)れとして見つめてしまう。

花桜梨はとても長い時間、目に映る水の世界に心を浮かばせていた。

ふいに、我に返る瞬間が訪れた。

花桜梨がはっとなって振り向くと、そこにはぼんやり人工の海を眺めている俊太の横顔がある。

「………」

俊太はあまり関心がなさそうだった。あからさまではないが、そういうものは伝わって来るものだ。

花桜梨の視線に気づいたように、俊太がこちらを見てきた。
「あ、どうしたの八重さん？」
「……ううん」
「そろそろ一休みしようか？」
その俊太のなにげない態度に、花桜梨はよけいつらい気持ちになった。
花桜梨と俊太は二階にあるカフェに入った。
丸テーブルがいくつも置かれた、キャンパスなどでよく見られる簡素なカフェ。店内にはいくつかの水槽があって、花桜梨が飼育しているものと同じような熱帯魚が泳いでいる。
「いやー、八重さんって、ほんとに魚好きなんだね」
オーダーを済ませたあと、向かいに座る俊太が感心したふうに言ってきた。
「…………」
それを受けながら、花桜梨はじっと目をふせている。
「どうしたの？」
「……ごめんなさい」
「え？」
きょとんとなった俊太に、花桜梨は少し沈痛な声で言う。
「私、ずっと水槽ばかり見てた……」

そう。花桜梨は魚に夢中になって、俊太のことをまるでかまわなかったのだ。
「ああ、べつに。魚、見に来たんだからさ」
俊太が軽く笑って応えた。
あたりにはコーヒーの香りと、他の客の雑談がさざめきとなってたちこめている。休日だが混雑しているというほどではなく、席はそれなりという感じに埋まっていた。
…………。
沈黙、を花桜梨は意識する。
俊太と話すようになって、これで何度目だろうかと思いを巡らす。
沈黙が訪れるのは俊太が黙ったとき。彼が口を開いていないと、二人の間は静寂に包まれる。
それは、自分が話さないせいだ。
何も言えない。話すべきことが浮かんでこない……自分はあいかわらず、閉じたままなのだ。
それを、自分ではどうすることもできずにいる。
うつむいた額のあたりに、俊太の視線を感じた。
「……私といても、つまらないでしょ？」
花桜梨はぽつりと訊ねた。落ち込んだ気持ちが、つい自分を傷つけることを言わせてしまう。
「そんなことないよ」
俊太が驚いたように返してきた。

「でも……」
信じられない。
「八重さん、オレといてつまらない……？」
「そんなことない」
「よかった。じゃあ、ぜんぜん――」
「でも」
花桜梨は少し強い声を出す。
「……私、話とか、うまくできないから……」
目をつむりながら、ため息のように言う。これまでの、どの瞬間よりそのことがつらいと思った。
「こうしてても、ちゃんと向き合ってても、魚を見てたときと変わらない……」
変わらない。どうして自分は変わることができないのだろう……。花桜梨はまた、苦しい問いかけをしてしまう。
「あのさ、八重さん」
俊太がちょっと改まった声をかけてきた。
「八重さんは魚を見てたとき、どんな感じだったかな？」
意表をつかれて花桜梨が顔を上げると、そこに俊太のやわらかな眼差しがあった。

こちらの考えをうながすように俊太は黙っている。魚を見ていたとき。
そのとき、自分は……。
「見てるだけで、そこにいるってだけで、うれしい気持ちになってたんじゃないかな？」
「…………」
それから俊太は照れくさそうに頬をかき、目をそらしたくなるのを堪えているようにじっと、強く花桜梨を見つめてくる。
「オレは八重さんといて……きっと、それと同じ感じなんだ」
かけられたその言葉に、花桜梨は何と言っていいかわからなかった。ただ、頭の芯がじんとしびれるようになっている。
「あっ、八重さんが魚だって言ってるわけじゃないよ！」
俊太があわててそんなフォローを入れてくる。
「ありがとう……」
花桜梨はさりげなく過ぎる瞬間に乗せて、俊太に感謝の気持ちを伝えた。
そのとき頼んでいたコーヒーが運ばれてきて、二人の間に生まれていた濃密な空気があっけなく拡散した。現実というものは、個々の都合にはかまってくれない。
「…………」
置かれるカップを視界に映しながら、花桜梨は打ち明けようかという気持ちになりかけてい

た。
先週、来なかったこと——の奥にある理由。自分の過去。
すべてを俊太に話してみようかと、そんな心境がふと訪れていた。
「でも、オレの周りって魚好きな人、多いのかなあ」
コーヒーをすすりながら、俊太がつぶやいている。
花桜梨は、膝の上に置いたこぶしをきゅ、と握りしめた。
「……鳥越君」
小さく言ったとき、背後を見つめる俊太の目が驚きに開かれた。
つられて花桜梨が振り返ると、そこには小夜が俊太と同じ顔をして立っていた。
「小夜、なんで……」
俊太が訊ねたとき、小夜がはっとなる反応をして、そのあと小さく笑った。
「なんでって、あたしがよくここに来てること知ってるでしょ？　それに、驚いたのはこっちよ」
言って、小夜がちらりと花桜梨を見てきた。
「あんたが八重さんと一緒にいるなんて、どういう事情？　ここでぐうぜん会ったの？」
「誘ったんだよ……オレが」
俊太がどこかやりにくそうに告げると、小夜は信じられないというふうに、

「へぇえー？　あんたが……？」
まじまじ俊太の顔をのぞき込む。それから、
「病気なんじゃない？」
と、俊太の額に手をあてた。
「んなわけないだろ！」
俊太が手をどかす。
「明日、きっと雪が降るわ……」
小夜が首を振りながら、ため息まじりにつぶやいた。
「ベタなこと言いやがって」
「うるさいわね。――ま、あんたも少しは成長したってことかしら。今度祝ってあげるわ」
「よけいなお世話だ」
「何よ、遠慮しなくていいわよ？」
「する」
「…………」
二人のやりとりにはさまれながら、花桜梨はなんとなくの疎外感を覚えた。
少ししたあと、小夜が花桜梨に気さくな笑みを向けてくる。
「じゃあ八重さん、大変だと思うけどこいつの相手してやってね」

「もう、あっち行けよ」

俊太が「しっしっ」と手を振る。小夜に対する態度は別人のようにあどけなく、花桜梨はこちらが彼の素顔なのではないかという気がした。

「言われなくたって帰るところよ。じゃ、『今日はつまんなかった』って言われないようにちゃんとリードするのよ」

言って、小夜は手早く会計を済ませ、店から出ていった。

「……実はさ、あいつも魚とか好きなんだ」

俊太がはは、と場を取り繕うように笑う。

「そう……」

花桜梨は鈍く返事した。

それからしばらくして、花桜梨たちも店をあとにした。

6

傾いた夕陽がひときわの眩さを放ちながら、向かいの空はうっすら藍色に染まり始めている。

そんな時間帯。

花桜梨は俊太と中央公園を歩いていた。俊太が寄ろうかと言ってきたのだ。

公園はもう人もまばらになっていて、毎日来ているのだろう、犬を散歩させているおばさんとすれ違う程度。たどり着いた並木道はこの前よりいっそう紅葉が進んでいる。斜陽の光を受けて、それは熱を発さずに燃えているようだった。

地面に、歩く二人の長い影が伸びている。

「……月村さん」

「えっ？」

ふいにつぶやいた花桜梨に、俊太が振り向く。

「……幼なじみ、だったよね」

「あ、うん。家が近所だから、幼稚園のときから一緒だったんだ」

「……それで？」

「それでって？」

「あ……ごめんなさい。なんでもない……」

花桜梨はふっと顔をそらす。どうして気になってしまうんだろう。

「まあ、兄弟みたいなもんかな」

「兄弟……？」

花桜梨はまた俊太のほうを向いていた。

「妹——」

上を見ながら、俊太が言葉を止める。
「……いや、認めたくないけど……姉、かな」
俊太はしょうがないな、というふうにため息をついて花桜梨に視線を移す。
「オレ、ガキの頃は学校とか休んで家にこもりがちだったから……友達ぜんぜんいなかったんだ。ほとんど家で独りでさ」
「え……」
花桜梨は思わず声をもらす。体が弱かったとは聞いたが、それはとても意外な気がした。どこか今の自分と重なってくる、とも。
「それであいつが相手してくれたり、いろいろ面倒(めんどう)見てくれたんだ。……うん、やっぱりお姉さんだな。だから、あいつの前だと今でもガキみたいになってさ」
「…………」
「でも」
俊太がちょっと真顔(まがお)になる。
「元気になったし、もうあいつに世話かけられないなって。独立ってやつかな」
「そうなんだ……」
つぶやきながら、花桜梨はふっと自分の心が軽くなったのを感じていた。
並木道が終わろうかというとき、俊太がいきなりベンチのほうへ歩いていった。そしてその

下にかがんで、
「ああっ！　こんなところにバレーボールがっ!!」
わざとらしく驚き、取りだしたボールをかかげて見せた。
「……なんてね」
小さく笑い、俊太が花桜梨の前に戻ってきた。
「実はさ、オレあれから練習して、自分で言うのもなんだけどうまくなったんだ。それをどうしても八重さんに見てほしくて」
「…………」
花桜梨はきょとんとしたまま黙っている。
「あ、ごめん。こういうの、嫌いだったかな……？」
俊太が不安げな顔で訊く。
「ううん。そうじゃない……」
花桜梨は応えた。俊太が実際上達したか、見てみたい気がした。
「よかった」
俊太はほっとなって、花桜梨にボールを渡してきた。
「じゃあ投げてみてくれないかな？　オレ、ばっちりレシーブするからさ！」
俊太は芝生の上をてて、と駆けていき、ある程度離れたところで「いいよ！」と構えた。

「じゃ……行くから」
花桜梨はとりあえず、ゆっくり何球かを放った。
「よっ」
俊太がすべて正確に返してくる。言葉どおりあれからみっちりやったらしい。もうフォームが完全に定着している感じだった。
それから花桜梨はサーブで前後左右に揺さぶってみたが、俊太は危なげなく対応してくる。驚いたことに、高いボールが来たときのオーバーカットも身につけていて、きっちり対応してきた。
よほど、がんばったに違いない……。
「ほらね！」
俊太が晴れやかな表情を向けてくる。そのとき、花桜梨の胸がとくん、と小さく音を立てた。
――え？
その動揺をふりきるように、花桜梨は次の段階に進んでみようと決めた。
「ちょっと、変化つけてみるから」
「え？」
俊太が聞き返す間(あいだ)に花桜梨は斜め前にボールを浮かせ、フローターサーブを打った。
ボールは弧を描(えが)いて俊太の正面に飛ぶ。

俊太は定位置についてレシーブしようとしたが、

「！」

手前まで来たとき、ボールがすっと落ちた。あわててフォローしたが、手にふれただけでボールは点々と芝生に転がる。

花桜梨はまたサーブを打つ。

今度は最後まで軌道が変わらなかったが、俊太がとらえた瞬間ボールは真上(まうえ)にはじかれた。強いスピンをかけていたのだ。

花桜梨は歩いて、そっとボールを拾(ひろ)い上げた。そして、戸惑う俊太に凛(りん)とすました表情を向けて言う。

「まともなチームなら、素直なサーブなんてまず打ってこない。だから守るほうはどこに、どんなサーブが来るか予測(よそく)できないと駄目」

「予測？」

「そう。だから相手を研究して、ときには試合の中でサーバーの得意なコース、球種を見極(みきわ)める必要があるの」

「へえぇ……」

俊太が初めて知ったというふうな反応をする。

「そして打つときのサーバーの目線や肩のライン、フォームに注目して、来るサーブを予測し

て対応する。その連続」
「……奥が、深いんだ。知らなかった」
「相手のサーブを上げないと、続きはない……だからサーブレシーブは一番大事なプレーなの」
そう言ってから、花桜梨はまた位置について構えた。
「私が使える変化は今の二つ。打つときをよく見て、対応してみて」
ボールをすっと上げる。花桜梨は腕を鞭のようにしならせ、次々とサーブを打っていった。
初めこそついて来れなかったものの、俊太はすぐに順応してだんだん正確な球を返すようになってきた。
相手を観察する――センスがあるのかもしれない。その吸収の速さは、打っている花桜梨がちょっと悔しくなるほどだった。
ばしんっ、と花桜梨が強いサーブを打つ。
ぼんっ、と俊太がレシーブをする。
そうして帰ってきたゆるやかなボールを、花桜梨はダイレクトに叩いた。
ばしんっ。
ぼんっ。
俊太がレシーブを返してくる。

ばしんっ。
ぼんっ。
花桜梨の打った強い球を、俊太が受けとめ、そっとやわらかく返してくる。
…………。
花桜梨はあることに気がついた。
これが、自分と俊太との関係なのではないかと。
自分はいつも、こんなふうに彼にきついボールを投げつけていたのではないだろうか。
それを彼が受け止めて、やわらかく返してきてくれていたのではないだろうか……。
ばしんっ。花桜梨は強くボールを打ちつける。
ぼんっ。俊太がそれをレシーブした。
ふわりとボールが浮かび上がる。
こちらに向かってゆっくり落ちてくる。じっと見つめて、花桜梨はそれを——
ぽんっ……と、やわらかなトスで返した。
俊太は一瞬戸惑う様子を見せたが、同じようにオーバーハンドで戻してきた。
花桜梨はそれを、今度はレシーブでパスした。
俊太も合わせてレシーブで返してくる。
花桜梨はまた、トスをした。

「よっ」
俊太が軽い調子で言う。
「はは」
意味もなくはしゃぐ。
夕闇の迫った青い景色の中で、小さなボールがゆっくりと二人の間を行き来した。
……………。
ただこうしてボールを渡し合っていることが、花桜梨は不思議なほどに気持ちよかった。
体が軽く、何かに満たされている。バレーを始めた頃の……。
——ううん、違う。
もっと別の、別の部分から来ている……よろこび。
やがて、あたりの暗さにボールが見えにくくなって、花桜梨は戻ってきたそれをそのまま受け取った。
向こうから俊太が笑顔で駆けてくる。
「ありがとう、八重さん」
言いながら俊太がそばまで来たとき、花桜梨の胸がまた小さく弾む。
「べ、べつに……」
それでも表に出る顔は普段と変わらない。

「あ、ちょっと座ろうか？」
そう俊太が言って、二人は前と同じベンチに腰かけた。
もうすっかり暗い。広がる芝生の向こうに、灯り（あか）がぽつぽつと光の玉のように浮いている。草陰（くさかげ）に隠れているコオロギの声が、近くからひとつだけ聞こえていた。
「あの、八重さん」
ぎこちない呼びかけに振り向くと、遠巻き（とおま）きの灯りに少しかすんだ俊太がいる。
「今日は……ありがとう」
「ううん……」
花桜梨もぎこちなく応えて、自分の膝を見つめた。
もし誰かが通りかかったら、その人は自分たちを恋人同士と見るのだろうか。たしかに、これはデートなのだ。
「………」
花桜梨は今さらながら恥ずかしくなる。周りがもう少しだけ明るかったなら、俊太はうつむく花桜梨の横顔にいつもと違う色を見つけただろう。
「オレさ、スパイク拾いたいんだ」
ふいに俊太が言ってきた。花桜梨が見たとき、俊太は前を向いたまま続ける。
「憧れのリベロの選手が言ってたんだ。敵のスパイクを拾うプレーはリベロの中で唯一華（ゆいいつはな）やか

なプレーで、それは味方にすごい勇気を与えるって。一気に試合の流れが変わることもあるって……」

花桜梨はじっと、俊太の横顔を見つめている。

「でもそれは、一セットに一度できればファインプレーっていうくらい難しいとも言ってた」

男子においてはそうだろう、と花桜梨は思う。

男女のバレーの違いは素人目からでもわかる。女子が拾ってつなぐのが主なのに比べ、男子はまるで大砲を撃ち合っているかのような展開だ。

そういう試合でのスパイクレシーブは、サッカーで言うＰＫ戦のゴールキーパーと同じ。取れなくてあたりまえ。

「それってさ……」

俊太が照れくさそうに頭をかく。

「なんか、ちょっとした奇跡だなって思うんだ」

言ってから、俊太がちょっと目をふせる。くさい言葉だと自分でわかっているふうに。

「ほんとに、そう思うんだ」

「…………」

花桜梨は言葉もなく、二つの瞳に俊太を映している。最近頻繁に訪れるようになった胸の鼓動を感じながら、彼はこういう人なんだとあらためて思っている。

そのとき、瞳の中の俊太が振り向いてきた。
花桜梨の胸が、いっそう高鳴った。くすぐったいようなうずきが全身を巡る。
「今度の文化祭の代休に、大会の予選があるんだ。正義学園っていう強豪と当たった」
「……うん」
花桜梨は静かに返す。ぼうっと、まるで熱にでもかかっているような意識。
「オレ、そこでぜったい一本拾うから。スパイク、上げるから」
「……うん」
「だから……見に来てくれないかな？」
俊太の眼差しは夕闇の中、よけいに強い光を宿している。あいかわらずまっすぐで、きれいで、自分を見つめている——。
「うん……がんばって」
瞳を潤ませながら、花桜梨は空気に溶けるような響きで言う。
——もう少しで私、笑えるかもしれない……。
この人の前で、笑えるかもしれない……。
あの日にここで聞いた鐘の音が伝説の鐘だったらいいと、花桜梨は心の奥で思った。
コオロギが、鳴いている。

三章……屋上の喫茶店

1

朝はもう、すっかり冷える。
花桜梨は大勢の生徒たちに混じって長い坂道を上り、ひびきの高校の門をくぐった。そびえる校舎、広がるグラウンド。一見いつもと変わらない光景ながら、そこには漠然とした慌ただしさが漂っている。よくよく気をつけてみれば、遠くに『たこ焼き』などと書かれた塗りかけの看板が立てかけられたりしていた。
もうすぐ、文化祭だった。
花桜梨は校舎に入り、朝のざわめきに包まれる下駄箱で靴を履きかえる。なんということのない朝。大勢の生徒たちが作り上げる雑音に、花桜梨は少しぼんやりとさせられている。
「八重さん！」
その声に、花桜梨の心がぴくん、と反応した。
落ち着くためにひと呼吸してから振り向くと、そこには俊太がいつもの笑顔で立っている。
「おはよ」
「……お、おはよう」
近づいてくる俊太に、花桜梨は目をそらすようにして応える。

すり抜けていく俊太が起こす風が花桜梨の頬にふれる。微かな熱の波。朝練をしてきたのだろう。まどろんでいた花桜梨の意識は、彼の存在を確かめた瞬間からひどく敏感になっていた。

「朝練だったんだ」

靴箱を開けながら、俊太が思ったとおりのことを言う。

「そう……」

濡れて朝の光を照り返している花桜梨の瞳。薄めの唇は心持ち引き締められている。その視野はとても狭まっていて、靴を履きかえる俊太の横顔だけを映していた。

そのとき、靴を履きかえた俊太がこちらを見てきて、花桜梨の胸がどきりと鳴ってしまう。

「どうしたの、八重さん？」

訊かれて、花桜梨は俊太を見つめたまま自分の動きが止まっていたことに気がついた。

「……べつに」

なにげなさを装いながら、内心あわてて上履きをはく。すると——

「じゃ、行こうか？」

俊太がごく自然な態度で言ってくる。教室まで一緒に行こうと。

言ったのはこれが初めてなのだと、俊太は自覚していないようだった。

「うん……」

花桜梨がわずかの間を置いて応えると、俊太が歩み寄ってくる。横まで来たとき花桜梨はそっと体の向きを変えて、一緒に並んで歩きだした。

………………。

俊太と歩きながら、花桜梨はまるで自分が鈴になったような気持ちがした。

ぴんと張りつめていて、横にいる彼がふと向けてくる視線、声、ささやかな気配。そんなすべてにしゃらん、しゃらん、と鳴ってしまうのだ。

「――っていうオチだったんだ」

「そうなんだ」

『もうひとつの場所』にいる心地がした。

今の花桜梨にとって、すべての場所は大きく二つに分けられている。

俊太がいる場所と、いない場所。

二つの違いを、花桜梨は心と体でたしかに感じていた。

「おい、鳥越！」

向かいから長身の男子生徒がやってくる。同じバレー部の、俊太と親しいクラスメイトだ。

「なんだ？」

俊太が応じたとき、友人がちらりとだけ花桜梨のほうを見てきた。

「監督が呼んでたぞ」

「監督が？」
「おまえ今日、片づけの当番だったよな？　また、やり直せとか言うんじゃねーの？　おまえ、そういうの雑だからなあ。……監督も細かいけど」
「あっ」
俊太は思い当たった顔をして、
「ごめん、八重さん！」
と、一目散（いちもくさん）に駆（か）けていった。
俊太の友人はもう一度花桜梨に目を向けてから、自分の靴箱へ向かう。
「…………」
そして花桜梨は、そのままひとりで教室へと歩き始める。
いつもどおりのことなのに、ひどくさびしいように感じた。
だが花桜梨はまだ、俊太への感情を表すたったひとつの形容を自覚しないでいる。それを受け入れることが、あと一歩のところでできずにいる。
なぜなら、その言葉（ことば）は後戻りのできないものだから。
信じる、という覚悟を求められるものだから——。
「ねー、みほぴょん」

「なんですか？」
昼休み、二人組の女の子が廊下（ろうか）を歩いている。
「あのさ～、演劇部は今年の文化祭何やるの？」
一方の、仮にどんな不幸に遭（あ）っても大丈夫（だいじょうぶ）そうな元気いっぱいの女の子が訊（たず）ねる。
「シンジテラをやるんですよ」
みほぴょんと呼ばれたもう一方のおとなしそうな少女がにこやかに答えた。
「そうなんだ～。なんか、みほぴょんらしーね」
「そうですか？」
「うん。いかにもって感じ」
「でもそのままだと面白（おもしろ）くないと部長が言って、ラストの展開を変えることになったんです。それで今、シナリオをどうしようか悩（なや）んでるんですけど……」
言って、みほぴょんが思案顔（しあんがお）になる。
「なんか大変そ～だね……」
元気いっぱいの女の子も彼女なりに困った様子（ようす）で見守っていたが、突然（とつぜん）何かを思いついたようにぱっと表情（ひょうじょう）を明るくした。
「ねーねー、みほぴょん！　あのさ、こういうのはどうかな～？」
そんなふうに話しつつ二人組は、教室へ戻る途中の花桜梨とすれ違っていった。

校内はすっかり、文化祭一色に染まっていた。
ひびきの高校ではクラブ単位で出し物をすることになっており、「文化祭」の名にふさわしく文化系クラブの発表がメイン。ただ、運動系クラブも露店などを出していた。
本番の迫ってきた今、昼休みともなれば少しでも完成に近づけようとあちこちで作業している姿が見られる。そういう人の作りだす活気というものが花桜梨はあいかわらず苦手だったが、以前ほどの拒絶反応はなかった。自覚のないことではあったが。
そのとき、角の向こうに立つ俊太の姿が目に入った。
「………」
花桜梨の歩調がぎこちないものになる。ためらうような、急くような。
「おまえさー、最近よく八重さんに話しかけたりしてるよな」
という声が聞こえて、花桜梨は思わず立ち止まった。
俊太の向かいに、朝、下駄箱で会った彼の友人がいる。トイレから出てきたところのようで、男子にしてはめずらしくハンカチで手を拭いていた。
「まあ、な」
俊太がちょっとはにかむ。
「で、それがどうした？」
「なんでまた急に？」

友人が訊ねた。
「なんでって……」
……………。
花桜梨はじっと耳を傾ける。
俊太はごまかすような笑みを浮かべた。
「べつにいいだろ？」
その答えに花桜梨が微かな落胆(らくたん)を覚(おぼ)えたとき、
「やめといたほうがいいぜ？」
友人が冗談(じょうだん)とも本気ともつかない調子で言った。
「そんなことしてると、委員長から浮気したって思われるから」
委員長というのは、小夜(さよ)のあだ名である。
「あのなあ。オレとあいつはただの……」
言おうとする俊太に、友人は「わかった、わかった」と言いたげな軽いため息をつく。
「もういいって。おまえたちがそういう仲だってのは見え見えなんだからさ。今どき中坊(ちゅうぼう)だってもう少し堂々としてるぜ？」
「だから——」
「まあ、聞けよ。友人としての忠告(ちゅうこく)ってやつだ」

言って頭をかく。相手を本音でほめるときにするやりにくそうな表情で。
「おまえの性格だから、八重さんみたいな孤立してるのほっとけないってのはわかるけどな……」
その声が、花桜梨の意識に一瞬で焼きつけられた。
「もうちょっと委員長の気持ちも考えてやれよ。そりゃ、おまえのいいとこだとは思うけどさ。それは。でもな……」
俊太は伏し目がちに友人の言葉を聞いている。
「無理すると、あとがキツイぜ」
「…………」
「ま、そーいうこった」
友人がそう締めくくった。
しばらくの間があく。友人と、そして花桜梨は黙って彼が返す言葉を待っていた。
やがて俊太がすっと友人を見返し、
「そんなんじゃない……」
花桜梨がかろうじて聞き取れるくらいの小さな声で言った。
「そーですか」
友人はやれやれと苦笑する。

「ま、いいさ。んじゃ、教室戻ろうぜ」
あっさりとした友人にうなずき、俊太は彼とともに花桜梨の視界から消えていった。
「…………」
おまえの性格だから、八重さんみたいな孤立してるのほっとけないってのはわかるけどな。
無理すると、あとがキツイぜ。
花桜梨の脳裏に声が強く反響する。
チャイムが、どこかよそよそしい音で鳴った。

2

思えば理由がなかった。
どうして俊太は自分に話しかけてきたんだろう。
ひとりでいたいと周りを拒絶して、ろくに口も聞かない自分に……。
放課後、花桜梨はカバンに荷物を詰めることも忘れてそのことばかりをずっと考えている。
授業中ちらりと彼を見たとき、そこに思い詰めたような暗い表情がかすめていたのは気のせ

いだったのだろうか。

「…………」

花桜梨はじっと窓の外を見ている。

そこに薄く映っているのは、見慣れた無表情。

自分が女の子として、特に魅力的だとも思えない。一緒にいたいタイプでもないだろう。

——どうして……？

孤立している自分を放っておけなかったから、無理をして。

それは、とても説得力のある事実に思えた。

そして小夜のこと。彼は「姉のようなもの」だと言っていたが、はたしてほんとうなのだろうか。

『そんなんじゃない』と友人に答えていた俊太。

——でも……。

疑ってしまう。どうしようもなく、疑ってしまう……。

「八重さん」

はっと振り向くと、目の前に俊太が立っていた。

「…………」

彼の声に、顔に、そこにいるということに、花桜梨は一瞬前の悩みを忘れ、心を軽くする。

「ちょっと、いいかな……？」
だがそう訊かれたとき、彼の横にうかない表情で立つ小夜に気がついた。
「……何？」
花桜梨がやや強張った声で訊ねると、俊太は軽く頭をかきながら切りだす。
「実はさ、今度の文化祭こいつんとこの女子バレー部が店を出すんだけど、急に欠員が出ることになったらしいんだ。申請の関係でどうしてもそれを埋めなくちゃいけないらしくて……」
「………」
「だから八重さん、力になって――」
「やっぱりいいって、俊太」
小夜が気まずそうに口をはさんでくる。
「急に頼まれたって、八重さん迷惑よ。大丈夫、何とかあたってみるから」
すると、俊太がめずらしく真顔になった。
「でもおまえ、もう全部のツテ回ったんだろ？　それで困ってるって言ってたんじゃないか」
「実行委員に掛け合ってみるわよ」
「それも駄目だったって言ってたじゃないか」
「……だから、もういいって」
「よくないだろ」

鋭い俊太の声に、小夜はむっとした表情になった。
「やめてよ！　なんであたしがあんたに世話かけられるのよ？　それっておかし――」
「つまんない意地張るなよ！」
怒った声と眼差し。それを受けて、小夜は驚いたように口を開けたままにしている。
………………。
自分には一度も向けられたことのない激しい感情。それが怒りというものであるのに、自分には一度もなく、小夜には向けられたということに、花桜梨は言い知れないせつなさを感じた。
「八重さん、駄目かな……？」
俊太が一転して、やわらかな調子で訊ねてくる。
「……いいよ」
花桜梨は承諾した。
「ほんと？　ありがとう、八重さん！」
俊太がぱっと顔を明るくした。
「……ごめんね、八重さん」
小夜が申し訳なさそうに、口元で小さな笑みを作る。
「ううん……」
花桜梨は特に表情もなく応えた。断るという選択肢はなかった。

俊太のがっかりした顔を見たくなかったし、ここで断るとなぜか、自分がひどく心が狭くて、いやな人間になってしまう気がしたから。

「今回手伝ってくれることになった、あたしのクラスメイトの八重さんです」

キャプテンである小夜がそう花桜梨を紹介したとたん、長机にかけている六人の部員たちが拍手したり、「よかったー」と安堵したりする。

女子バレー部の部室は講堂内の一室で、打ちだしのコンクリートがむきだしになっている長細い空間だった。

「…………」

花桜梨は静かに眺めている。自分がかつていた部室とはまるで違っていたが、やはり雰囲気は共通していて、さりげなく置かれているバレー用具に当時の気分があざやかによみがえってきた。

こんな形で、またこういう場所に足を踏み入れることになるとは……。

「よろしく。ユッカって呼んで」

一番手前に座る少女が気さくに手を差しのべてくる。さっぱりした短髪のボーイッシュな女の子。高い背や雰囲気から、エーススパイカーだろうと花桜梨は思った。

「…………」

伸ばされた手をただ戸惑(とまど)いながら見ていると、ユッカと名乗(なの)った少女は気にしないというふうに軽く苦笑(にがわら)いをして引っ込めた。
「ほんと助かったよー。あ、私はしのぶ。八重さん、だったよね？　ありがとー感謝」
ユッカの向かいの少女が、ぽんぽんと軽快な口調(くちょう)で言ってくる。ポニーテールをした愛嬌(あいきょう)のある女の子。動きが機敏(きびん)そうで、たぶんセンターだろうと花桜梨は予想した。
ユッカとしのぶ。どちらも観葉(かんよう)植物の名前だと、花桜梨はどうでもいいことに気がついた。
「よかったよかった。せっかくのいい企画がポシャッちゃうところだったもんねー」
しのぶがうんうんとうなずきながら言う。
そういえば――。
「……何を、するの？　文化祭」
花桜梨が訊いたとき、小夜はなぜかちょっとはにかんで、
「喫茶店(カフェテラス)をね」
と答えた。
「場所が変わっててさ、屋上でやるんだよ。『青空のオープンカフェ、これは当たるわ！』って小夜がはしゃいでね」
「はしゃいでなんかないでしょ」
ユッカの口添(くちぞ)えに小夜が照れくさそうに返す。

「屋上で……？」
つぶやいた花桜梨に、小夜が振り向いてきた。
「ああいうところでお茶なんか飲んだら、おいしいだろうなあって思ったの。けっこう新しい試みだと思うし、お客さんも興味持って来てくれるんじゃないかってね」
言いながら、小夜が思い描くように目を細めている。
たしかに、あそこでコーヒーを飲んだらおいしいかもしれないと花桜梨は思った。そういう店があれば、ちょっと寄ってみようかという気持ちになるだろうと。
「雨が降ったらパーだけどな」
ユッカが、からかう調子で横やりを入れた。
「大丈夫よ。予報では快晴だから」
「とか言って、この前大雨になったけど」
「何、ユッカ？　降ってほしいわけ？」
小夜がじとっとにらむ。
「まーまー。そのときの場所、ちゃんと確保してんだから」
しのぶが仲裁に入った。
「けどさ、あんなはじっこじゃあんま人来ないと思うけどな」
つぶやくユッカに、小夜は「心配ご無用」というように胸を張る。

「雨が降ったら寒いんだから、みんなコーヒー飲みたくなるわよ。それに、宣伝にも回れるようにユニフォームもばっちり効果的なの手配したでしょ？」
「あー、あれねぇ……」
ユッカは半分呆れた口調で宙に視線をさまよわせた。
「何よ、みんなだって『いい』って言ったくせに。こういうのはインパクトが大事なの」
「なんか、あれだと男ばっか寄りつきそうだけど……」
「それでいいの。女の子のほうは女子部がやってるって時点である程度安心して来るんだから。あ、そうだ。なんならユッカ男装してみる？　いいかも」
「遠慮しとく……けど小夜ってほんと、よくそういうの考えるよな」
「あたしはいつだってお客様の視点に立ってるわよ」
小夜は開き直った様子で胸を張る。
「………」
クラスでも会議で行き詰まったりしたとき、彼女はいつもこんなふうに学級委員として率先して動き、決定して、問題を解決してしまう。
自分とはまったくの対極にいる小夜。花桜梨には今、そんな彼女が少しまぶしく映った。複雑な思いとともに。
「ねー、ちょっと一息入れようよ？」

ふいにしのぶが言ってきた。
「あ、そうね。恵理香もそろそろ戻ってくるだろうし」
　小夜が応じると、それを合図にしたかのように部員たちが立ち上がり、わらわらと動きだす。
　そして机に置かれる部員のマグカップ、花桜梨のために用意された紙コップ、コーヒーメーカー……。
　部員のかげに隠れていた棚には、他にもコーヒーを淹れるための何種類かの器具があった。
「みんなで持ち寄って研究したの」
　訊ねる花桜梨の視線に気づいて小夜が説明してくる。
「ドリップとかだと技術もいるし、人数にも対応できないから、結局メーカー集めてってことになったんだけど」
「けど研究なんて建前で、単に面白そうだからやったって感じだよな」
　コーヒーメーカーのスイッチを入れて、ユッカが言った。
「そーよね。ここで飲むコーヒーって、妙においしかったりする」
　しのぶがくすりと笑って同意する。学校という場所でみんなして作るのは楽しくて、できたものは家では簡単に食べられるものでも不思議なほどにおいしい。
　そのとき、かちゃり……と遠慮がちにドアが開かれた。
「し、失礼します……」

入ってきた女生徒は、おかっぱに近い髪型をした、いかにも後輩というオーラを出す少女だった。
「どうしたの、恵理香？」
小夜が訊くと、恵理香と呼ばれた女の子は深刻そうな顔でうつむき——
「す、すいません……！」
いきなり頭を下げた。
「だから、どうしたの？」
「……三階の準備室、使えなくなっちゃったんです」
その瞬間、花桜梨をのぞく全員に動揺が走った。
「どうして？　ちゃんと確保しといたんでしょ……？」
小夜の問いかけに、恵理香は頭を下げたまま小刻みに震えている。
「……してなかったの？」
「すいませんっ！」
体をさらに直角まで曲げた恵理香に対し、小夜は額に手をあて重いため息をついた。
「あそこが使えないとなると……どこでコーヒー淹れるの？」
しのぶが誰にともなく訊ねた。小夜はあごに指をあてて思案を始める。
「三階は他の部屋、ふさがってたわよね……。二階からだと疲れるし、時間がかかるし……」

「だったら屋上で直接──」
「コンセントがないでしょ」
小夜の指摘に、ユッカは「そうだった」と頭をかく。
「……やっぱり、携帯のガスコンロで湯を沸かして屋上でドリップ……」
「でも小夜、私たち、ちゃんとできなかったじゃない。妙に薄かったり、苦かったりさー……」
しのぶが思いだしたように眉をひそめる。
「……すいません、すいません……」
「いいって恵理香。今さら言ってもしょうがないわよ……」
泣きそうな恵理香を小夜がなだめている。部室は重苦しい空気に包まれた。
「……あの」
しばらくして、花桜梨はためらいがちに口を開いた。
「簡単に淹れられる方法なら、あるけど」
「え……？」
全員の視線が集中したとき、花桜梨は言いだしたことをちょっと後悔したが、今さら黙るわけにもいかない。
「……誰にでもできて、しかも一番いいやり方だって言われてる方法があるの」

「……ほんと、八重さん？」
　小夜が訊くと、花桜梨は棚まで歩いていき、そこからガラス製の筒を取って机に置いた。金属のフタから細い棒が伸びていて、その先が筒の中を上下するフィルターになっている。メリオールという器具だった。
「これを使うの」
「え？　けどそれってたしか、紅茶をやるやつじゃなかった？」
　ユッカがきょとんとなる。
「コーヒーを淹れる道具でもあるの。……豆、使っていいかな？」
　ちらりとしのぶに鋭い視線をやる。花桜梨はまた、本気になりつつあった。
「は、はい。どーぞ」
　しのぶが缶を渡してきた。受け取って、花桜梨はフタを開ける。中挽き（ちゅうび）のものだった。粗挽き（あらび）を使うのが本来だが、それは抽出（ちゅうしゅつ）の時間を短かめにして対応することにした。
「……とりあえず、二人分作る」
　小夜たちがぽかんと見つめる中、花桜梨は慣れた手つきでスプーンを使いメリオールに挽き粉を入れる。ひとり分が一〇グラムで二回。
　そして、沸いていたコーヒーメーカーのお湯を取りだして注（そそ）いでいく。湯気（ゆげ）が立ち、ガラスの中で粉が躍（おど）った。ぴたりと止めた。二人分で三六〇cc。量は目で覚えている。

花桜梨はフタをした。
「……あとは抽出を待って、フィルターで分離（ぶんり）させるだけ」
「え、それだけ……？」
「そう」
あっけにとられた小夜たちに花桜梨は説明する。
「コーヒープレスっていうやり方。布（ぬの）や紙に微妙（びみょう）な風味（ふうみ）を取られない分、ドリップよりもいいって言う人も多い」
頃合（ころあ）いを見計（みはか）らい、花桜梨はメリオールのフィルターを下ろして豆とコーヒーを分離させた。そして置かれたマグカップに均等に注ぐ。
終わると、ユッカがすぐに自分のカップを取り、ひと口すすった。
「へえ。ほんとだ、ちゃんとできてる」
あっけらかんと言う。すると、他の部員たちも次々にカップを手にしてコーヒーを飲む。
「これって、メーカーで作ったよりずっとおいしいよ」
しのぶがぱっとした顔で言うと、
「微妙に違いますよね」
恵理香もうなずく。こういうときの味の違いはたいてい微妙なものだが、たしかにそれは存在して、大きなものだ。

「これでいけるんじゃない、小夜？」
ユッカが振り向くと、小夜はカップをじっと見つめながらつぶやく。
「そうね。みんなの家から携帯コンロを集めて、あとこの器具もいくつか買って……見た目もおしゃれだし……うん、いけそう」
うなずいたあと、小夜は花桜梨に向かってにこり、と微笑みかけてきた。
「ありがとう、八重さん」
「……べつに」
「ほんと、八重さんが来てくれてよかったよ」
ユッカが実感のこもった声と表情で言ってきた。
「うん、いてくれてよかったよねー。あらためて大感謝だよ」
しのぶも、うんうんと同意する。
「私、どうしようかと……八重さんのおかげで助かりました。ありがとうございます！」
恵理香がほっとした笑みで言って、ぺこりと頭を下げてきた。
「………………」
まるで知らない場所に出てきてしまったような顔をして、花桜梨は周りを見ている。
囲んでいる笑顔。自分がいて、よかったと言っている。
こんな言葉をかけられたのは、こんな空気に包まれたのは、ずいぶんと久しぶりのことだっ

た。それは、あの事件以来ずっと避けてきたもの――。
「ねーねー、やっぱり家で淹れたりしてるんだ？」
「……うん」
戸惑う。
「すごーい。そういうのっておしゃれだね！」
「そんなこと……私も、今みたいにやってるだけだから」
でも、それだけ。
これまではあたたかく接してこられるほど、その裏にある何かが感じられる気がして苦しくなったというのに、気がつくと今、この空気の中で息ができている自分がいる。
――どうしてだろう……。
花桜梨が思ったとき、とんとんとノックが響いた。
「はい」
小夜が応えると、ドアが開けられた。
「ごめん、いいか？」
俊太だった。
「あ、コーヒー飲んでたの？」
入ってきたとたん俊太が訊くと、顔なじみなのだろう、ユッカが答える。

「ああ。八重さんに頼んでくれたの、鳥越君なんだってね？　ありがと」
「もー、八重さん大活躍だよ！」
「え？」
俊太が聞き返すと、しのぶは弾んだ声で続ける。
「トラブルでまたしても開店の危機が訪れたところを、ほら、このコーヒーの淹れ方で見事解決してくれたの！」
「…………」
花桜梨は俊太を見つめていた。
何と言うのだろう。いつものように「そうなんだ」と明るく笑ってくれるのだろうか——そのとき、彼と目が合う。
とたん、俊太は眉をひそめ、顔を背けた。
——え。
「あっ、小夜」
そして逃げるように小夜の元へ寄っていく。
「何、俊太？」
「店の準備、屋上まで机とか持ってくの大変だろ？　当日、助っ人してやるよ」
「え……い、いいわよ。私たちでできるから」

なしだ」
「実はもう部のメンバーにも何人か頼んで協力してくれることになったから、今さら断るのは
「無理すんな」
「してない」
小夜がかたくなに返すと、俊太はどこか勝ち誇ったように胸を張る。
「実はもう部のメンバーにも何人か頼んで協力してくれることになったから、今さら断るのはなしだ」
「………」
「どうした?」
「……なんか、こんなのっておかしいわよ。八重さんのことといい、あんたがこんな……」
「なんだよ?」
俊太の問いに小夜は黙り込む。そして照れたように目をそらし、
「……ありがと」
ぽつりと小さな声で言った。
「よし」
俊太はいつものように明るく笑う。
(ねー、あの二人ってさ、もうできあがっちゃってる感じだよね)
しのぶが小声で囁(ささや)くと、
(そうですよね。ぜったいそうですよね)

恵理香たち部員がうんうんとうなずく。そして――
（夫婦決定だな）
ユッカがそう締めくくった。
「…………」
花桜梨はそんな彼女たちのやりとりを聞き流すことができないまま、せつない眼差しで小夜に向けられた俊太の笑顔を見つめていた。

3

屋上に、向かい合わせとなった机がずらりと置かれている。
「こんなもんかー？」
机を動かしてから、ユッカが遠くに立つしのぶに訊ねた。
「うーん、もうちょっとそっち向きで右。――あ、恵理香は手前」
「は、はいっ」
「あー八重さん、そこでストップ。オッケー」
言ってから、しのぶは両手を腰にあてて全体を眺める。
「――うん、こんなもんでしょ。おつかれー」

席の配置を終えて、花桜梨と部員たちはしのぶのそばに集まって同じようにチェックした。
「さて、あとは明日、この席がどれくらい埋まるかだな」
ユッカがよく通る声でつぶやく。
「でも、男子に手伝ってもらってほんとによかったですよね」
恵理香の言葉にみなもっともだと同意した。
「今思えば、それなしでやろうとしたことが怖(こわ)いわ。やっぱり男は利用しないとね」
にっこり笑うしのぶに、ユッカはおいおいと言いたげな視線を送る。
「ま、なんにせよ鳥越君にお礼言わないとな」
「…………」
俊太の名を聞いて、花桜梨は自分の憂鬱(ゆううつ)な気分を思いだしてしまう。
最近、俊太に避けられている気がした。
前に顔を背けられたときから。あれ以来そんなそぶりは見せないが、さりげなく自分と接触しなくていい位置に動いているように感じる。
気のせい、なのかもしれない。ただ意識が過剰(かじょう)になっていると思えばそれで納得(なっとく)できるほどのささやかなものだ。
――でも、もしかしたら……。
花桜梨の頭はこのごろ、彼のことばかり考えている。

そのとき、きぃ、と戸を開けて小夜がやってきた。
「終わった?」
「まーね。見てよ、私のセンス」
しのぶが誇らしげに指し示すと、小夜は一通り眺めて「ふーん」とつぶやいた。
「いいわね。じゃあ、あとは明日。で、話は変わるけど、たった今衣装が届いたわよ」
「ほんと?」
しのぶに続いて、部員たちから「わぁ」と小さな歓声が上がる。
「ええ。部室に置いてあるから、今から試着しといて」
「小夜は?」
ユッカが訊く。
「最後の手続きあるから。手伝ってくれた男子にもお礼言いにいかなきゃいけないし。——あ、そうだ」
「どうした?」
「ピザ取っといたから、あとで景気づけしましょ」
小夜が言うと、また部員たちから歓声が上がった。
「ずいぶん気前がいいな」
「何言ってんの、部費よ」

「……ワリカンか」
ユッカが渋面になる。
「ちゃんと半額のとこに頼んどいたから。それと、三つのうちひとつは男子へのお礼の分だから、私が帰る前に届いたら持っていっといて」
「りょーかい」
「よろしい。じゃ、行きましょうか」
花桜梨たちは屋上をあとにし、それから小夜と別れて部室に入った。
「…………」
机の上に置かれた衣装に、花桜梨はぽかんとなる。
それは、『エプロンドレス』とか『メイド服』とか言われるものだった。
「あらためて見ると……すごいな」
ユッカが戦慄したように言う。
「ねー、早く着てみようよ！」
しのぶが待ちきれないというふうに服を手にした。そして他の部員たちもわくわくしたうれしそうな表情をにじませて各々取っていく。
「何してんの？　ほら、八重さんも」
「……でも」

「抜けがけしようたって、そうはいかない。あたしたちは仲間なんだから、一蓮托生（いちれんたくしょう）」

ユッカがいたずらっぽい笑みとともに、衣装を渡してくる。

「……………」

花桜梨は無言で受け取った。

そして部屋の中にきゃあきゃあとはしゃぐ声を満たしながら、女の子たちはエプロンドレスに着替えていく。

「あっはっは！　ユッカぜんぜん似合（にあ）ってないー」

しのぶが指さして遠慮なく笑う。

「やっぱり男装したほうがいいんじゃない？」

「う、うるさいな。しのぶだって完全に衣装負けしてるじゃないか」

「何よー、恵理香よりははるかにマシよ」

「そ、そんな……私、ダメですか……？」

「あーうそうそ。大丈夫、イケてるって」

泣きそうになった恵理香を、しのぶがなだめる。

「……………」

そんなにぎやかな会話の傍（かたわ）らで、花桜梨は恥ずかしい思いを堪（こら）え黙々（もくもく）と着替えていた。

しゅう。袖（そで）に腕を通す。新しい布の感触（かんしょく）。もともと仕事着だけあって、気が引き締まる思い

がする。ふわり。スカートの軽やかな広がりとフリルは、とてもおしゃれをしているような、はなやいだ気分を誘ってくる。花桜梨は知らずしらず、心が浮き立つのを感じていた。服というのは、そんなふうにして人の心に働きかけてくるものだ。

と、花桜梨は自分に集まってる部員たちの視線に気づく。

「……何？」

花桜梨が訊いたのを合図にしたように——

「八重さんすごい！　似合ってる!!」

しのぶが感激したように声を上げた。

「え……」

「いや、なんて言うか……変わるもんだなあ。雰囲気まで違うよ」

ユッカがしげしげと見つめてくる。

「…………」

花桜梨はあっけにとられた表情で沈黙していた。

純白と濃紺のあざやかな対比、スマートでそれでいて優雅なシルエット、エプロンのポケットやフリル、ちょこんと頭につけた飾りの可愛らしさ。そういったものが花桜梨の整った目鼻立ちと調和して、引き立てている。服装というのは当人が思うほど劇的にはその人の印象を変えていないことが多いが、今の花桜梨は数少ない例外と言えた。

気持ちの変化が覆う雪を解かし、下に眠っている小さな花を垣間見せた――そういうことのせいかもしれない。
「八重先輩、すごくいいです！　ほんとに素敵です」
恵理香ら他の部員たちも口をそろえて花桜梨をほめる。
「……そんなこと……」
言いながら、顔が熱くなってくるのを感じる。すっかり赤くなってしまったとき、花桜梨ははっと気がついた。
――私、照れてる……。
そのことに。
――うれしい、の……？
花桜梨にとって、それは驚くべきことだった。
なぜなら、うれしいということは、彼女たちの言葉を疑わずに受け入れているということなのだから――。
「いいよ。いい！　可愛い！」
「……あ、ありがとう……」
前に感じたこと。ここで、呼吸ができているということ。
例えば、小さい頃溺れたことがあって泳げないと思っていたのに、ある日また水に入ってみ

るとわりあいすんなり泳げた、という体験。泳げるようになったのは、変化があったからだ。

自分自身に。

——私……。

花桜梨はいつの間にか起こっていた変化を自覚した。それをもたらしたのは、きっと……。

——彼……。

花桜梨は俊太のことを思い浮かべる。これまであったひとつひとつのことに、なんだか胸があたたかくなるのを感じる。

「これならばっちりだな。明日の本番、がんばろうな」

言って、ユッカが以前そうしたように手を差しだしてくる。どうやらクセらしい。

花桜梨は見つめて——

手を伸ばし、振れるほどの力で握(にぎ)り返した。

——彼のおかげ……。

そのとき、申し訳程度のノックがしてばたんとドアが開かれた。

「ちわーっす。『Ｐｉｚｚａ　Ｃｏｔ』でーす」

ピザの箱を片手に入ってきたのは、生命力(せいめいりょく)みなぎるグラマーな女性だった。

「ご注文のピザ、お届けに来ましたー」

モデルと言ってもとおりそうなほどの美人だが、とりすました服よりも今の仕事着の方が彼

女の魅力を引きだしているように見える。
「ん……？」
宅配員は、花桜梨たちの服装を見て目を点にした。
「何？　あんたたち、どうしたのん、その格好？」
いきなり、宅配員がずっと前からの知り合いであるかのような気さくな調子で訊いてきた。
発散されるエネルギーが、大波のようにうち寄せてくる。
「明日の文化祭で喫茶店をやるんでー……そのユニフォームです」
しのぶが圧倒されたように答えた。
「ああ、なるほどねー」
宅配員が大きな声を出し、ひとりうんうんとうなずく。
「そういや、そんな時期だわ。いや、実はお姉さんもここの卒業生でねん。懐かしいなーって思いながら来たのよん」
「はぁー……」
「文化祭かー。当日こっそり抜けだしてバイトに行ったもんだわー。働くことがお姉さんの青春だったのよん。今も同じだけど」
「そーですか……」
宅配員はしきりと感慨に耽っていたが、ふいに我に返った。

「おっといけない、急いでるんだった。ピザここに置いとくねん。お姉さん応援するから、がんばって働くのよん。じゃ、毎度ありーっ」
さわやかな営業スマイルを残し、宅配員は嵐のように去っていった。
ふと、ユッカが何かに気づいた顔をした。
「……あれ？　お金、払った？」
とたん、他の部員たちも「あっ」となる。
「恵理香、追いかけて払ってきてっ！」
「は、はいっ……！」
しのぶからお札を受け取り、恵理香はあわただしく出ていった。
「――さて。一コ男子のところに持ってかなきゃいけないけど、誰が行く？」
ユッカが積まれた箱を見ながら訊ねた。
「ちなみにあたしは遠慮したい。……このかっこでは」
「……あの」
花桜梨がおずおずと口を開く。
「よかったら……私が行く」
ユッカはちょっと意外そうに花桜梨に振り向いたが、
「じゃあ、お願い」

と、すぐに箱を渡してきた。
「うん。……じゃ、行ってくる」
花桜梨は部室を出る。スカートの裾がひらりと、軽く揺れた。
通路を歩く花桜梨の足はほんのわずか早くて、胸の音はそれより早く弾んでいる。
「…………」
抱えた箱のあたりを見つめる瞳には、まるで覚えたての習い事を披露するときの子どもに似た緊張と期待が含まれている。
似合うと言われた服。いつもと雰囲気が違っていると、素敵だとほめられた今の姿。もし、それがほんとうなら……。
彼に、見てほしい――。
花桜梨の胸には、かなり素直にその気持ちがあった。
男子の部室前で花桜梨は立ち止まった。それからそっとノブを回して、ドアを開けていく。
「だったら、八重さんに正直に話せばいいじゃない」
小夜の声が聞こえて、花桜梨は手を止めた。
見ると、小夜と俊太が机にかけて向き合っている。二人はこちらに気づかない。むっと、重い空気が肌にふれてきた。

「そのままいくのって、よくないわよ……？」
「……でも、やっぱりオレ言えないよ。今さらそんなこと」
俊太は沈痛な表情でうつむいている。
——何を、言えないの……？
花桜梨は突然いやな予感がしてきた。
「あたしも前からおかしいとは思ってたけど……。でもね俊太、黙ってるのって八重さんに対して失礼だと思うよ」
小夜は、いつになく優しい声で俊太に語りかける。
………。
高鳴る花桜梨の鼓動が、もはやまったく意味の違うものとなっている。
俊太は鉛を含んだようなため息をついた。
「八重さんといるとつらいよ……もう限界だよ、オレ」
その瞬間、花桜梨は白くなった。
「最近になってどんどんきつくなってきてさ、顔見るだけで……。ほんと、会わずにすむんならそうしたいよ」
ばさっ……。
花桜梨の手からピザの箱が滑り落ちた。

……………。
ばかみたいだ。下手な芝居みたいだ。
俊太と小夜がこちらに振り向き、強張る。
鉛のように重い空気は、同じような冷たさへと変わった――少なくとも花桜梨にとっては。
「あ、どうしたの八重さんっ？」
俊太が取りつくろう笑みで訊ねてくる。聞かれていないとでも思っているのだろうか。
「……無理しなくていい」
それだけを言い、花桜梨はきびすを返した。
「八重さん！」
ばたばたと騒がしい音を立てながら俊太が前に回り込んできた。
花桜梨は立ち止まり、俊太を見る。凍るような瞳で。
「私がひとりぼっちで可哀想だから、無理に声かけてきてたんでしょ？」
「違う！」
「だったらさっきの言葉は何……？」
「…………」
――何とか言って。
俊太は口を開けたまま、何も返してこない。

「…………」

花桜梨の瞳が、震えた。

そして俊太のわきを通り抜け抜けようとする。

「！　八重さ――」

「来ないで」

突き刺すような声だった。

すりぬけ、花桜梨は歩いていく。

歩いていく。

後ろからは、何も聞こえてこなかった。

4

やはりそうなのだ。

裏切（うらぎ）られるのだ。

ひとりで生きていくしかないのだ。

花桜梨は自室のベッドでうつぶせになっていた。倒れ込んだときのまま、ぴくりとも動かない。

窓からはカーテンごしにオレンジの光がうるさく入ってきている。
じれったい。早く暗くなればいいのに。
「…………」
視界には、よれたシーツだけが映っている。
——ぜんぶ嘘だった。
一緒に行きたいんだと誘ってきたことも、そばにいるだけでうれしい気持ちになると言ってくれたことも。
全部、全部、全部。
——嘘だった……。
彼はただ、クラスで孤立していた自分を哀れんでかまっていただけだったのだ。
そして、それがだんだん苦痛になった。
——偽善。
偽善だ。中途半端な、いい子ぶりっこ。
今の自分の気持ちを何と言い表すのだろう。
怒りはない。絶望と言うほどの気力もない。
かなしみ。
……もし感じたとしても、花桜梨はそれを確かめる涙を流さない。我慢などをするわけでは

なく、単にそういう体質だった。
苦笑を浮かべるほうでもない。笑うことはもうないだろう。怒ることも、たぶんない。
――これから私はどうなるんだろう。
泣きもしない、笑いもしない。ずっと独り(ひと)りで、感情を表すことのない人間になってしまうのだろうか。
「…………」
リビングから電話のコールが聞こえてきた。
八回鳴って、途切(とぎ)れた。
部屋の中が少し暗くなった頃、また鳴った。
五回目で、花桜梨は立ち上がった。どちらかというと、電話を黙らせるために。
「……はい」
『あ、八重さん？　私、楓子(かえでこ)です』
その明るい声は、まるで別の世界から届いてきているようだった。
『えへ。特に用事はないんだけど、どうしてるかなって』
「……ごめん」
それだけ言って受話器(じゅわき)を下(お)ろす。花桜梨の顔は白く、紙のようだった。

どのぐらい経ったかわからない。ただ、部屋が真っ暗になってからかなりの時間が過ぎていることは確かだ。
そのとき、リビングでインターホンの音が響いた。
花桜梨は動かない。
セールスなどでないことはわかっていた。このマンションはロビーのところにロックされたドアがあり、住人が部屋のボタンを押さないと中に進めないシステムになっているからだ。
チャイムはゆっくりと、ほぼ等間隔にくり返される。
「…………」
自分によほどの用事がある人間らしい。
まったく止む気配がないことを悟り、花桜梨はまたベッドから起き上がった。どうしてこんなときに限って次から次へと煩わされるのだろう。
誰なのか。
浮かべたくない俊太のことが浮かんだ。彼はここを知らないはずだ。だが、学生簿で住所を調べれば来れないこともない……。
花桜梨は壁に取り付けられたインターホンを取り、ためらったあと、耳にあてた。
「……はい」
『あ、八重さん』

「え……」
その意外な声に、花桜梨は耳を疑った。
『今、下にいるんだ』
へへ、と笑う。はにかんだ可愛らしい声。
「……佐倉さん……」
花桜梨は時計を見た。八時。電話が来たのは、おそらく四時過ぎだっただろう。
「どう、して……?」
『心配になっちゃったから』
楓子はなにげないふうに言った。まるで、隣の家から歩いてやってきたかのように。
『電話の声、いつもと違ってたから……』
「…………」
楓子が引っ越した町は、ここから地方をひとつ飛び越えた場所にある。特急を乗り継いで三時間かかる場所だ。
『会って、お話ししない?』
そっと訊ねてくる。
花桜梨の目の前に、ボタンがある。ロビーのドアを開けるボタンだ。これを押さない限り、楓子はここへはやってこない。

「…………」

ひとりでいたいと、花桜梨は望んだ。

楓子が隣の家から来たのだったら、きっとボタンは押さなかっただろう。

沸騰の直前で火から下ろし、花桜梨はヤカンのお湯をメリオールに注いだ。

「ごめんね、おしかけちゃって」

背中に、テーブルに座る楓子の声が届いてくる。電線を通していない、クリアな音。

花桜梨はメリオールをテーブルに置いて、楓子の向かいに座った。

楓子は口元に微笑みのようなものを浮かべて、じっとガラスの中で色づいていくお湯を見つめている。

心なしかやせたような気がしたが、変わっていない。まだ引っ越してから二ヶ月と少ししか経っていないのだから、当然といえば当然だった。

「…………」

同じ静かでも、ひとりと二人ではずいぶんと質が異なる。ひとりだと静寂、二人だと沈黙。

ほろ苦い芳香が漂ってきたとき花桜梨はコーヒーと豆を分離させ、温めておいたカップに楓子、自分の順に注いだ。終わって、またリビングから音が消える。

秋深い夜、のぼる湯気は濃い。

「……何か、あったの?」
ぽつり、と楓子が訊ねてきた。
その余韻が二人でももてあます広い空間にほどけた頃、
「……もう、いいの」
花桜梨は案外迷いもせずに口を開いた。
それから堰を切ったように、だが冷静な口調でこれまでのことを話し始めた。不思議なほどに理路整然と、ありのままを。
俊太と保健室で会話したときのこと、デートの約束、それに行かなかったこと、彼が熱を出したこと、あらためてデートしたこと、あったことのすべて、自分が感じた心までも、客観的に、淡々と語った。
楓子は相づちのように時折うなずいて、じっと耳を傾けていた。
「……彼は、ただ私が可哀想だからかまっていたに過ぎなかったの」
花桜梨はそう結んだ。コーヒーは冷めて、濁った色になっている。
「前にもあった。こういう経験。信じて、裏切られた……」
花桜梨は目を閉じる。闇が広がった。今はそれが心地よい。何も見たくない。
「もう、私はもう、ひとりで生きていこうと思う……」
楓子は痛ましそうな表情で花桜梨を見つめている。

「……八重さん、鳥越君は――」
「やめて」
まぶたを閉ざしたまま、花桜梨は遮(さえぎ)った。
「もう、彼のことはどうでもいい」
「どうでもいいの？」
「そう。どうでもいい……ぜんぶ……」
息絶(た)えたかのような響きが、リビングの端までを浸食(しんしょく)した。
楓子はカップを少し指でさわってから、花桜梨に静かな眼差しを向ける。それから、微笑みを浮かべた。
「なら八重さん、どうしてそんなに落ち込んでるの？」
――。
花桜梨が目を開けると、楓子は微笑みのまま、
「落ち込んでるよ」
と、くり返した。
「………」
楓子の言ってることがわからない。ただしばらくしたとき、反論を口にしていない自分に気がついた。

「この話、内緒（ないしょ）にしてね」
ふいに前置（まえお）きして、楓子は話を始めた。
「鳥越君ね、保健室に来るたび私に八重さんのことすごく訊いてきてね、私、冗談半分に言ってみたの。『八重さんのこと好きなんだ？』って」
花桜梨はいつの間にか楓子の言葉に集中している。
「そしたら鳥越君、顔真っ赤にしてすごくあせったんだよ」
「………」
そのときを思いだしたのか、楓子がくすりと笑う。
「私は『ああ、鳥越君って八重さんのこと好きだったんだ』って、そう思ったな」
花桜梨の心に、大きな波紋が広がっていた。
ゆらゆら揺れて、水面（みなも）は何の像も結べずにいる。
「あのね、ごめんね」
楓子が言って、花桜梨は我に返った。
「鳥越君がそう言ったのには、何か違う理由があるんじゃないかな……？」
「違う、理由……？」
花桜梨は聞き返す。怪訝（けげん）そうに。
あの言葉に、他にどんな理由があるというのだろうか。

「……そんなの、あるわけない」
「でもね、八重さん」
楓子は、しっかりとした声で返してくる。
「鳥越君はそんな気持ちで八重さんと接する人じゃないって思う。私はそう、信じてる」
さりげなく言った楓子の言葉が、花桜梨の中に大きく反響した。
――信じてる……？
「八重さん」
瞳をふせた花桜梨に、楓子が真顔を向けてきた。
「鳥越君のこと……信じてあげてみて」
願うように強く、言ってきた。込められた願いは俊太をかばうというものではなく、自分にかけられているものだという気がした。
…………。
花桜梨はじっと、コーヒーに映った自分の顔を見つめている。心は忙しすぎて、何も具体的な形を見せてくれない。
だがなんとなく、違う方向へ行こうとしているという感触はあった。
「……もう帰らなきゃ」
その言葉に花桜梨は楓子を見返す。

「今ぐらいで、ちょうど向こうに着いたときの最終電車なの」
言って、楓子がゆっくり立ち上がった。
「…………」
そうだった。忘れていた。楓子はひびきの市に住んでいるわけではないのだ。
花桜梨は時計を見る。まだ来てから一時間ほどしか経っていない。なのに、これからまた三時間かけて帰らなければならないのだ。
「……佐倉さん……」
心配だからと、何かあったんじゃないかと思って駆けつけてきて、自分の――愉快でもない話を聞いて、深夜までかけて帰るのだ。
――私のために……。
それだけの。
――たった、それだけのために……。
花桜梨の思いに気づいたかのように楓子はほがらかに笑う。そして――
「友達だモン」
そう、愛らしく言った。
「…………」
しんしんと胸にしみてくる、目の前にいる楓子のあたたかな存在感。それはきっと、電話で

は伝わってこないだろうと花桜梨は思った。
『八重さんならきっと大丈夫。私、信じてるから』
駅での別れ際、楓子はそう言って改札を抜けていった。そして、ふいに振り返って「ファイト」と小さな握りこぶしを作って笑った。
帰りの夜道を歩きつつ、花桜梨はたしかに自分は落ち込んでいるかもしれない、と思った。
何もかもがどうでもいい……。
そういうわけではない、と思った。

5

予報どおりの快晴で、ひびきの高校文化祭は大いににぎわっていた。
校庭には普段は見られない私服の大人や子どもたちがあふれていて、いかにも祭なのだというはなやいだ空気を醸していている。科学部の巨大ロボットが暴走したり、時代劇でいきなりガトリングガンが発砲されたり、最近ひびきの高校の文化祭はとてもユニークになったことが知られており、近年はとみに盛況だった。
文化祭という催しには毎年必ず、内外から「成功」と振り返られる出し物が現れる。

おそらくそのひとつとなるであろうそれは、地上の喧噪(けんそう)から離(はな)れた校舎の高みにあった。
「はい、コーヒーとクッキーを二つずつですね？」
「申し訳ありません、キャロットケーキは切らしてしまって……消しとかなきゃ」
「オーダー入りまーす！」
くっつけた学生机にクロスをかけたテーブルの合間を、エプロンドレスを纏(まと)ったバレー部員が忙しく駆け回っている。その切り取られた空間のにぎわいは、空中庭園とも呼べる趣(おもむき)のあるものだった。
隅(すみ)のカウンターでは、率先して裏方に回ったユッカがせっせとコーヒーの準備を続けている。用意したメニューはコーヒーと紅茶、手分けして焼いたクッキー、恵理香が趣味で作ったキャロットケーキの四つだった。
だが五本しかなかったキャロットケーキは早々に売切れ、クッキーも残りわずか。コーヒーもこのままだと豆の買い出しに行かなくてはならないだろう。
「ユッカ、八番のオーダー用意できた？」
戻ってきた小夜があわただしく訊いてくる。
屋上の喫茶店(カフェテラス)という趣向は当たり、エプロンドレスでの宣伝活動も功を奏(そう)したのか、客足はじわじわと増え始め、今や常に満席状態(まんせきじょうたい)だった。
「はー、しんどー！」

「あたしもだよ！　はいこれ五番っ」
ユッカにメリオールとカップの乗ったトレイを渡され、しのぶはふらふらとトンボ返りしていく。
「八重さんはこれ、三番に」
「うん」
花桜梨はトレイを受け取ってテーブルへと向かった。
感情の整理がつかないまま、こうして働いている。家でじっとしているのは、いやだと思った。
「お待たせしました」
澄ました声で言って、花桜梨はテーブルにカップを置き、紅茶を注いでいく。
座っている三人の客のうち、二人に見覚えがあった。
ひとりは長い髪をした和風美人で、いつか屋上ではち合わせたことがある。もうひとりも、同じ日に階段ですれ違った男子生徒だ。
あとのひとりは、泣きぼくろが特徴の少女。初めて会ったとき大半の人が「あ、この人とは仲良くなれそうだ」という直感を抱く、快活そうな女の子だった。
「ねえ、健君」
花桜梨が立ち去ったあと、泣きぼくろの少女が向かいの男子生徒に呼びかけた。

健と呼ばれた少年はぼんやりと、遠ざかる花桜梨の姿を追っている。
「健君」
「！　え、ど、どうした光？」
健がはっとなって振り向くと、光と呼ばれた泣きぼくろの少女は、彼が見ていた先に目をやった。
「ふ〜ん、今のウエイトレスさん見てたんだあ」
ちょっぴり険のある声でつぶやく。
「見てないって」
「見てた〜」
そう言って、光はすねた表情を作る。
「きれいだよね、あのウエイトレスさん」
「怒るなよ……」
「べつに、怒ってないよ」
「……訊きたいんだけど」
間にはさまった形の和風美人が、こほんとせき払いをした。
「なんで私がここにいる必要があるの？　しかもよりによってこんな……」
少女はまるで敵を見るような目でカップの紅茶を見つめる。

「い、いいじゃない琴子！　たまにはさあ」
「そうそう。それに聞いたんだけど、紅茶って日本茶と同じ葉っぱらし――」
琴子と呼ばれた少女ににらまれ、健は口をつぐむ。
「まったく……あなたたちにあてられる、こっちの身にもなってほしいものね」
「あ、もうじき純も来るはずだから」
「え？」
琴子が驚いて健を見返す。
「どうして、穂刈君が……？」
その表情には、微かな動揺がのぞいていた。
「だって琴子たちったら、あれからちっとも……」
「何、光？」
「あ、ううん！　なんでもない！」
光はあわててごまかす。
「せっかくの文化祭なんだからさあ、四人で楽しくやろうよ！　修学旅行のときみたいに！」
「………」
琴子はやれやれと深いため息をついた。
そんなふうにして、各テーブルではそれぞれの客たちが楽しそうに話している。

客足とオーダーがちょうど谷間に入り、花桜梨はカウンターから少し離れた場所に立ってぼんやりとしていた。
「八重さん」
振り向くと、小夜がいた。
「……何？」
花桜梨は低くぎこちない声で訊ねる。向き合いたくなくて、学校に来てからもできるだけ避けていた。
「……あのね」
小夜はうつむきかげんになりながら、言いづらそうに切りだす。
「あのときのこと……」
そこで、小夜が言葉を止めた。
——あのとき……？
見つめる先で、小夜は眉間にしわを寄せている。それからふいに顔を上げて、
「ごめんなさい、なんでもないの」
中途半端な笑顔を作った。
「じゃ、最後までがんばりましょうね」
そう言って小夜がカウンターに戻ろうとしたとき、乾いた音を立てて屋上の戸が開かれた。

――――！

出てきたのは、俊太だった。

俊太はきょろきょろとして、すぐに花桜梨を見つける。そして、思い詰めたかのような表情でまっすぐ歩いてきた。どんどん近づいてくる。

はじかれたように踏みだし、花桜梨は逃げだした。

テーブルの合間を早足で抜けていく。俊太から遠ざかろうと。

「八重さん！」

かまわず歩く。客たちがなにごとかと振り向いてくる。

そして、行き止まりのフェンスで立ち止まった。

「……オレ」

俊太の声が背中に当たる。ためらいの感触がした。

「オレ今度の試合、メンバーから外されたんだ!!」

塊となって、激しくぶつかってきた。

「だからつらかった。八重さんと顔合わせるの……あのときは、小夜にそのことをグチってて……」

「…………」

花桜梨は振り向かないまま、秋の空を眺めている。

「あの朝練のあと、監督に呼ばれて言われたんだ。せっかく八重さんに教えてもらって、あんなにえらそうなことも言ったのに……。だからオレ――」

「嘘……」

花桜梨は遮った。

「そんなの、信じられるわけない……」

吹いた風にエプロンをはためかせ、淡々と続ける。

「それぐらいのことであんな態度取るわけない。そんな、たいしたことのない理由――」

「八重さんにだけは知られたくなかったんだ!!」

わあん、と俊太の叫び(さけ)が周囲(しゅうい)に広がった。

「……知られたく、なかったんだよ……」

嗚咽(おえつ)のような俊太のつぶやきが聞こえてくる。彼のそんな詰まらせた声を聞くのは、これが初めてのことだった。

「オレ……八重さんにだけはカッコ悪いとこ見せたくないんだよ。八重さんにだけは、なさけないやつだって思われたくないんだよ……」

…………。

震える俊太の声が、花桜梨の心を震わせてくる。

そして心の震えは肩に、こぶしに、全身に、にじみ出てきた。

今までで一番の、引き裂かれるような苦しみを花桜梨は感じていた。

ゆっくりと俊太に振り返る。無表情。

「……それが嘘じゃないって、どうしたら信じられるの？」

けれど、瞳のきらめきはふるふると、すがるように揺れている。

「あなたを、疑わずにいられるようになるの……？」

答えてほしかった。

自分を納得させてほしかった。

「わからないよ……」

俊太があっさり言った。

「オレの心を八重さんに見てもらうことはできないから」

「……………」

愕然（がくぜん）とする花桜梨に、だが俊太はこう続けた。

「でもオレが八重さんに真剣な気持ちで接してるって……八重さんのこと、すごく信じてるって証明することはできるよ」

花桜梨の目の前で俊太は隅まで歩いていき、ひょいと室外機（しつがいき）の上に乗る。そしてさらに進んで、空を背に振り返った。

風が俊太の髪をなびかせた。すぐ後ろには、はるか下の地面がある。

「これから後ろに倒れるから、八重さん止めてくれるかな？」
俊太のあっけらかんとした表情に、花桜梨はとっさに意味を把握できなかった。
「俊太！　バカな冗談やめなさい！」
言って、小夜がつかつかと歩いてくる。
「来るな!!」
鋭い声に、小夜がはっと強張った。その激しい響きには彼がまぎれもなく本気なのだという気配が含まれていて、周囲が一気にどよめく。
「八重さん」
俊太が穏やかな顔を向けてくる。
「三つ数えたあとに倒れるから」
「…………」
花桜梨はじっと俊太を見返したまま、微動だにしない。
――やるわけがない。
花桜梨は思った。ほんとうにそんな危険なこと、やるわけがない。
「八重さん」
再び俊太が呼びかけてきた。
「オレは八重さんと話せるようになりたいって、ずっと思ってた。今年の春、中央公園で桜を

見ながら笑ってる八重さんを見てから、ずっと……」
…………。
俊太はにこりと笑う。そして両腕を前に差しだし、
「さん」
と、数え始めた。
——するはずない。
「に」
——嘘でしょ？
花桜梨は一歩、足を前に踏みだす。
「いち」
数える俊太はまったくためらいを見せない。
花桜梨は、駆けだした。
「ぜろ」
俊太はふらり、と後ろへ倒れ込んだ。
花桜梨は柵に足をかけ、跳躍（ちょうやく）した。
俊太が倒れていく。
室外機の上に着地した。

俊太のあごが見えた。
手を伸ばした。
そして——俊太の手をつかんだ。
遠くの地面が見えて、足もとからぞくりと震えがせり上がる。脱力しそうになるのを堪え、花桜梨は無我夢中で俊太の手を引っぱった。
勢いでバランスを崩し、花桜梨はよろけたあと、俊太もろともばたん！ と横へ並ぶ室外機の上に倒れ込んだ。
「……、……、……」
心臓がけたたましく脈打ち、喉が過呼吸気味にぜえぜえと鳴る。
一面の空。少し斜めを向くと、俊太と目が合った。
笑っていた。
「怖かったよ」
ちっともそうでなさそうに言う。
落ちたりしないと、自分が助けると、心から信じていたように。
と、花桜梨は覆いかぶさる俊太の体の重さと、胸に乗せられた彼の手のひらの感触に気がついた。
「！ ごめん!!」

俊太が投げ飛ばされたかのように身を反転させた。
「……べ、べつに……」
ぎこちなく応えて身を起こす。心臓は、あいかわらずどきどきしている。
そのとき、向こうの室外機の上に小夜がのぼってきた。厳しい表情をして歩み寄ってくる。
そして起き上がった俊太の前にひざまずき、
ばちん、と頬をぶった。
「な、なんだよ小夜っ」
「わかんないの!? まちがったら八重さんまで落ちてたとこだったのよ!?」
とたん、俊太がはっとなり、深くうなだれた。
「……ごめん八重さん。オレ……」
「あやまってすむ問題じゃ――」
「やめて、月村さん」
さらに責めようとする小夜を、花桜梨が止めた。
「いいの」
「でも……」
「いいの」
もう一度言う。「八重さん……」

俊太の呼びかけに、花桜梨はそっと振り向く。その口元は光の加減による錯覚（さっかく）と思えるほど微かに、ほころんでいる。
「…………」
何の言葉も出なかった。
俊太も、目を細めているだけで何も言ってこない。
どうやら、それが必要な雰囲気ではなかった。

6

『えー、つーわけで出し物の表彰は終わりだ』
グラウンドに設けられた小ステージの上で、ガキ大将がそのまま成長したような風貌（ふうぼう）の小柄（こがら）な少女——生徒会長の赤井（あかい）ほむらが司会をしている。
文化祭はつつがなく終了し、全校生徒集めての締めくくりの会が行われているところだった。
『では以上で——え？　——あ、ワリィ、ワリィ。続いて〝ベストドレッサー賞〟の発表だ』
係の生徒から耳打ちされ、ほむらは渡されたメモを読む。
『この賞は、来客による投票をもとに実行委員がげんせいなる……あー、めんどくせぇ！　よーするに今日一番目立ってたやつが誰かってことだ』

ぶっきらぼうに言って、ほむらはメモを裏返した。
『えー、見事(みごと)選ばれたのは〝屋上の喫茶店で働いていたショートヘアのウエイトレス〟。誰か調べたところ、二年F組の八重花桜梨！　そういうわけで、ステージまで来てくれ』
　拍手が起こる中、係の生徒に急(せ)かされる形で花桜梨が上がってきた。
　戸惑ったように顔を強張らせている。エプロンドレスを着た花桜梨はやはり華(はな)やかで、ステージに立った姿はまさしく学園祭で生まれたアイドルという感じだった。
『じゃあ、受賞についてひと言頼む』
『あ、ありがとう……』
　ほむらにマイクを向けられて花桜梨が言うと、生徒たちからあらためて拍手と歓声が上がった。
『よし。んじゃ同じくF組の鳥越俊太！　とっとと出てきやがれ！』
　なんだか違う態度でほむらが呼ぶと、まもなく俊太がひょこひょことお笑い芸人のようなそぶりでステージにやってきた。そして来るなりほむらのマイクに向かってしゃべる。
『いやー、このたびはベストドレッサー賞に選んでいただき……』
『おめーは違う！』
　すかさずほむらが言った。
『ここで騒ぎを起こした反省をしてもらう。屋上から飛び降りようとしたらしいじゃねえか』

『まあ……』
『なんで、んなことしたんだ？』
俊太は一瞬だけはにかんだあと、ぱっとおどけた表情になって、
『そういう年頃（としごろ）なんです！』
『うるせえ！』
ほむらに蹴（け）っ飛（と）ばされた。
生徒たちから笑いが起こる。
『ったくよー……ん、なんだ？　なになに……』
ほむらは新しく渡されたメモに目を通す。
『原因は〝二人の痴話（ちわ）ゲンカ〟だあ？』
呆れ顔で声を上げ、二人を見た。
『てめえら、そういう関係かよ』
とたん、生徒たちからさっきの歓声よりずっと大きな笑いとひやかしが起こった。
花桜梨が、頬を真っ赤にしてじっとうつむいている。
それを見て俊太も同じように赤くなり、そのあと、
『いやー、まいったなあ。はっはっは』
『笑うなっ！』

また蹴飛ばされた。
「…………」
そのステージの様子を、小夜は黙って見つめている。
せつない眼差しで――。
「へえ、予想外だな」
「でも、こうして見てるとまちがいなくそんな感じですよね」
ユッカと恵理香がどこか感慨深げにステージを眺めている。
「私は、鳥越君はぜったい小夜とだと思ってたのになー」
「だから違うって言ったでしょ？」
しのぶに向かって、小夜はなにげないふりをして苦笑いした。
「うーん」
「ごめん、あたしちょっと……」
何をしに行く、とは言わずに小夜はその場を離れた。
生徒たちの間を通り抜け、しのぶたちと十分な距離ができたとき――小夜はようやく沈んだ表情になることができた。
…………。
自分の愚かさが、ただただ悔しかった。

――なんで、もっと早く認めなかったんだろ……。
自分の気持ちを。
これまで重ねてきた長い時間が、小夜の心に浮かび上がってくる。
病弱だった俊太――
さびしそうだった俊太。いつもそばにいてあげた。面倒を見てあげなくてはいけなかった俊太。自分がいてあげなくてはいけなかった俊太。暗い俊太。花桜梨は知らない俊太。自分だけが知っている俊太。バレーがやりたいと言った俊太。だから代わりにバレーを始めた。笑顔だけは変わらず明るかった俊太。元気になった俊太。自分より大きくなっていた俊太。男の子らしくなっていた俊太。初めて花桜梨のことを話してきた俊太。うずいた胸……。
こんなにも、憶えている。
ひとつ、ひとつ。
見つめていた自分にはいつからかもわからない、共通した感情がさりげなくあったのだと、今はわかる。
どうしてもっと早く、認めなかったんだろう？
何に対して抵抗があったのだろう？
いったい、何を恐れていたのだろう？
ただ、素直になればよかったのに……。

過去の思い出が、執拗(しつよう)に環(わ)を描いている。
もうそれは帰れない、取り戻せないものなのだと冷たく告(つ)げているかのように。
――そう。もう、遅い……。
彼女はきれいだし、あの二人は悔しいけれど、お似合いだ。
何より、俊太が彼女のことを好きだというのなら、自分はこのまま引き下がるべきなのだ……。無口なまま。
「…………」
歩きながら、小夜はそろそろ泣こうかと思った。
だがそのとき、視界の端にまだ残っている来訪者の影がかすめる。
――もうちょっと。
あともうちょっと、我慢しなくてはいけない。
「なあ、あいつだったよな？　うちの学校で部費パクって退学(たいがく)になったの？」
「八重って言ってたし、まちがいないだろ。おとなしそうな顔して、半端な額じゃなかったよな。まさか、こっちの学校に入り直してたとはねぇ……」
小夜は立ち止まり、話をしている二人の少年の元へ向かう。
「……あの、すいません」
そして、花桜梨が犯人とされる過去の事件を知った。

夕闇迫る空。
俊太は花桜梨と別れ、校門を通り過ぎようとした。
「……俊太」
門の影に小夜が立っていた。
「あ、小夜。……そうだ、もう暗いし一緒に帰るか？」
「……あのね、俊太」
「何？」
「……話したいことが、あるの」

7

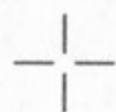
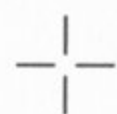
なにげなく終わろうとしている今日という日は、自分にとってとても大切な一日になったのではないかと——花桜梨は自室で思っていた。
隣の音ももれてこないマンションの部屋には、あいかわらず浄化フィルターの通気音だけが横たわっている。
いつもなら広くからっぽに感じられる空間も、今は何か心地よい微粒子に満たされている

ような、そんな気がしていた。
――鳥越君。
ベッドにかけ、脈絡もなく彼の名を心の中でつぶやいたりする。
そのたびに、幸せな気持ちになれるからだ。
――鳥越君。
もう一度。
もう一度……。
そんなことを飽きもせずにくり返していたとき、ふとインターホンの音が聞こえた。
誰だろう、と思う間もなく花桜梨は立ち上がり、ためらいもなくインターホンを耳にあてた。
「はい……？」
『……夜分に申し訳ありません。八重さんのお宅でしょうか？』
こういう形では初めて聞く声だったから、一瞬誰かわからなかった。
「月村さん……？」
『ええ。……ちょっと話があるの。会って、話したいの』
「……うん。じゃ、上がってきてくれるかな」
花桜梨がボタンを押してからほどなくして、チャイムが鳴った。
玄関まで行ってがちゃりとドアを開けると、そこに小夜がうつむきかげんに立っている。

「じゃ、上がって」
「ここでいい」
「え？」
花桜梨が聞き返すと同時に、小夜がひとつの学校名を口にしていた。
「…………」
前に通っていた高校の名前を聞かされ、花桜梨は茫然となった。
「……今日、そこの生徒が来てたの。……それで、ぐうぜん聞いた」
「……え……」
「あなたがバレー部の部費を盗んで、退学したってこと」
「！　月村さん違うの、それは――」
「俊太にも話したわ」
――！
言いかけた表情のまま、花桜梨は沈黙した。
「俊太……」
間を置かず小夜が口を開く。そこから、凍る吐息がもれたかのようだった。
「がっかりだって。『なんでそんな人のこと好きだなんて思ったんだろう』って……すごく、落ち込んでたわ……」

壁に叩きつけられたような気持ちがした。
受けた衝撃に危険を感じ、体がけたたましい警鐘を鳴らし始める。
そのとき、小夜がようやく顔を上げて花桜梨を見つめてきた。
紅く、熱のない火のような、じりじりと痛みを与える瞳で。
「私も、あなたみたいな人に俊太とつき合ってほしくない……」
沈黙のうちに、衝撃が背後へと過ぎ去っていった。
「──私は」
花桜梨は、自分の心が奇妙なほど冷静になっていくのを感じていた。

カバンから、白い封筒を取りだした。
それは、ずっと忘れていた退学願。
花桜梨はじっと見つめる。何かを深く思う瞳で。
そのまま彫像のように固まってしまうかと思われたとき、ふいに立ち上がってリビングへと向かう。
そして、花桜梨は静かに受話器を上げた。

四章……あなたを信じてる

1

そこにはのどかな風が吹いていた。

朝の澄んだ空の下、大きな田園地帯が広がっている。四角く区切られた緑は微妙に異なるやわらかさで、まるでタイルの描くモザイク模様に見えた。だがあちこちでは都市計画が進行している気配があり、何年かすればここは見違える景色になるだろう。

そこに新興の住宅地が島のごとく浮かんでいる。おしゃれな最新型の建て売り住宅が整然と並んでいて、その右から二番目の家には『佐倉』という表札がかかっていた。

「ねーちゃん、どっか行くのか？」

玄関で靴を履いていると、後ろから変声期を終え、低く落ち着きつつある声がかかってきた。

楓子は振り返った。空気が動いて、忘れていた新しい家独特の匂いを意識する。

「うん。ひょっとしたら遅くなるかもしれないから、お母さんが帰ってきたら伝えといて」

「ふーん……？」

母が焼いたパウンドケーキをもしゃもしゃ食べながら、弟がどこか小馬鹿にしたような目で見てくる。最近、自分の背を追い抜いて、ちょっと態度がでかい。

「どうしたの？」

訊（き）きながら、視線（しせん）はつい弟が食べているおいしそうなケーキに行ってしまう。そりゃ食（た）べ盛（ざか）りなのかもしれないが、こっちがダイエット中なのを知ってるんだから、もう少し気を遣（つか）ってほしいと楓子は思う。
「ひょっとして、あの飯塚（いいづか）ってキザヤローとデートか？」
「違う」
「じゃあ、最近電話してきたひびきの高の野球部のほうか？」
「違うってば！」
あとのほうを返したとき、楓子はちょっとばかり頬（ほほ）を赤くした。
飯塚というのは、今マネージャーをしている大門（だいもん）高校野球部のエース、そして、ひびきの高校の野球部員というのは……とてもひたむきにがんばっている人のことだ。
何も言えないまま転校してきてしまったのに、どこで調べたのか急に電話してきてくれて、ものすごく驚（おどろ）いたけど……とてもうれしかった。
「そうか」
ふいに弟が納得顔（なっとくがお）をした。
「わかってくれた？」
「両方いっぺんか」
「なんでそうなるの!?」

楓子の抗議を無視し、弟がいっちょ前に肩をすくめる。
「ったく、ねーちゃんもとんでもねーよな。男がいねーと思ってたら、いきなりフタマタだもんな」
「そんなんじゃないモン」
ぷんすか言って立ち上がり、楓子はドアノブに手を伸ばした。
「お友達と会うの。この前電話してきたでしょ？　八重さんって女の人」
「ああ……」
弟が「なーんだ」という顔になる。
「じゃ、行ってくるから。お留守番よろしくね」
そして楓子はドアを開け家を出た。
とたん、ひんやりした空気が首筋に入ってきて、楓子は巻いているマフラーを整えた。ここはひびきの市よりずっと寒く、一一月が始まったばかりだというのに、もう冬の気候だった。
——八重さん、どうしたんだろう……？
身を縮こまらせて歩きつつ、楓子はふと不安になる。
昨晩、突然『会いに行きたい』と電話があった。その声は変わりないものに聞こえたが、楓子は何かしら違う気配を感じたのだ。
——また、何かあったのかな……？

それでわざわざ遠くから来るのだとしたら――そう思ったとき、楓子は少し怖くなる。もしそうだとしたら、よほどのことがあったのだろうから。とても落ち込んでいるだろうから。いつも花桜梨の話を聞くとき、楓子はどうしよう、どうしようと内心あわてて、それでも何とかしたい一心でこれでいいかと怖がりながら、必死で言葉をかけている。

――もし、落ち込んでたとしたら……。

元気になってもらえるよう、自分にできるせいいっぱいでがんばろう。

楓子にとって、それはあたりまえのことだった。

ワインレッドのブラウスに、ほんのり桜色がかったシャツジャケット。階段を下りてくる少女が花桜梨であることはすぐにわかった。

花桜梨がこちらに気づいて改札を抜けてくる。楓子は一度呼吸を整えた。

そして花桜梨がほんの手前まで歩いてきたとき、楓子は待っている間に決めたとおり、まず小さく笑ってこう言った。

「いらっしゃい」

「うん……」

短く返してきた。見る限り、花桜梨は普段どおりだ。

ただ単に会いに来てくれたんだろうか。そんな考えが浮かんでくる。

「急だから、びっくりしちゃった」
そう言って、様子をうかがってみる。
「ごめんなさい……」
「あ、ううん、来てくれてほんとうれしいよ」
ちょっと失敗だったか。
「……佐倉さんに会いたかったの。どうしても」
「え？」
訊き返すと、花桜梨が静かに見つめてくる。花桜梨が何を思っているか、楓子はいつもわからない。ときどきこうかな、と感じられる瞬間があるだけで。でも、それは誰に関しても同じことだろう。
「近くにゆっくり話せる場所……あるかな？」
花桜梨が訊ねてきた。
——話、あるんだ……。
やはり何かあったようだ。楓子は何も訊かずに少し考え、ひとつの場所を思い浮かべた。
「あ、うん。この近くに噴水のきれいなところがあるんだ。行こ？」
言って、楓子は花桜梨と並んで駅を出た。
このあたりはもうすっかり整備が終わっていて、大都市にもめったにない洗練された空間に

なっていた。今二人が歩いている遊歩道も優しい彩りに舗装されていて、趣向のある配置の緑や現代彫刻が目を楽しませてくれる。

右隣を一五センチほど見上げると、花桜梨は周囲をぼんやり眺めているふうだった。

「……ここに、住んでるんだ」

花桜梨がぽつりと言ってきた。

「うん。でもね、こういうのはこのへんだけで、ちょっと離れたら畑ばっかりなの」

「そうなんだ……」

「私は、けっこう気に入ってるんだ。のどかでいいなって」

「そうだね……」

それからまた黙って歩き続けると、まもなく噴水が見えてきた。

その広いスペースには噴水だけでなく、子どもの膝くらいまでのプールもある。貯水池の水を利用して造った憩いの広場だった。

一組の若い母子が噴水のそばで鳩にエサをやっている。まだ少ない人口と、中途半端な時間帯のせいだろう。他に人影はなかった。

楓子と花桜梨は、その母子から離れた浅いプールのそばで立ち止まった。

「ここでいい？」

「うん……」

応えて、花桜梨が水面に視線を落とす。こんなふうに彼女はいつも何かを見つめていて、それは水であることが多いような気が楓子はした。

彼女は水のように静かで、透明で、どこかかなしい。笑えばきっと素敵だろうなと、楓子は横顔を見ながらよく思う。

「それで、話って何？」

できるだけさりげなく訊ねると、花桜梨が微かに届く噴水の音に乗せ、

「……私、一度退学したことがあるの」

と言ってきた。

——え？

あまりに唐突な内容に驚くと、花桜梨がいつかのようによどみない口調で話してくる。

バレー部で起こった部費の盗難事件、自ら罪をかぶったこと、裏切り、そして退学……。

「……だから、盗んだのは私ってことになってる」

そこで花桜梨の話は途切れた。

「そうだったんだ……」

黙っているのはよくない気がして、楓子は声に出して応えた。

——だから八重さんは……。

みんなとの接触を拒んでいたのだ。

親友だと思っていた人にそんなふうにされたら、自分だったらどうなるだろう……花桜梨のつらさを思って、楓子は胸が痛くなる。

「昨日の夜、家に月村さんが来たの」

花桜梨が急に話を再開した。

「え……？」

話のつながりがわからず、楓子は訊き返す。

学級委員の月村小夜。いつもクラスを引っぱっていたすごい人だ。俊太の幼なじみ。クラスメイトたちはよくあの二人の関係を噂していたが、楓子は俊太の気持ちを知っていたから、そうだとは思わなかった。

「私の、前の学校でのこと聞いたらしいの。……それで、鳥越君にも話したって」

楓子はいやな予感がした。

視線の先で、花桜梨がまったく変わらない表情と声のまま言う。

「彼は、落ち込んだって。『なんでそんな人のこと好きになったんだろう』って……」

「…………」

——どうしよう。

楓子は考える。

——どうすればいい？

花桜梨を見つめ、かなしげに唇（くちびる）を結びながら考える。
——なんて言えば、八重さんを元気づけられるの……？
必死で考え続ける。
誤解（ごかい）をとけばいい——と言えばいいのだろうか。でも彼女は二年前のことからずっと、自分では想像もできないほどのつらい思いをしてきているのだ。そして今また、こんなにも傷ついている……。そんな重さを、取り除（とのぞ）ける気はしなかった。問題はもっと、深い部分にあるのだ。
どうすれば、どうすれば、目の前で苦しんでいる友達を救えるのだろうか……。
——？
楓子は、ぱちりとまばたきした。
今、花桜梨が笑ったように見えたのだ。
——気の、せい……？
「それで、私はこう言ったの」
ふいに花桜梨が口を開く。そのとき、後ろからはしゃいだ子どもの声が届いてきた。
「……『鳥越君はそんなこと言わない。私に確かめないうちから言ったりしないわ』って」
母子の笑い声。
「…………」

目の前で何かが起ころうとしているのを、楓子は感じた。
花桜梨が頭を心もち下げて瞳を閉じる。それから三秒ほどしてまた顔を上げ、まぶたを開く。
そして――
こぼれるような笑みで振り向いてきた。
「…………」
楓子の胸が、震えた。
「佐倉さんに見てほしかった……確かめて、ほしかった」
照れたようにちらりと白い歯を見せる。小さな花が揺れたふうな印象だった。
「私、変われてるかな？　明るい顔、できてるかな……？」
それはまるで、たくさんの桜の蕾が一気に花開いたかのような、奇跡みたいな変化だと楓子は思った。微笑む花桜梨は、あたたかな春の風を纏っている。
――きっと、これがほんとうの八重さんなんだ……。
確信しながら、楓子はなんだかとても感動してしまう。
「うん……」
ほとんど無意識にうなずくと、花桜梨がほっと息をついた。
「よかった」
いつのまにか陽ざしが高くなってきて、周囲が明るさを増している。飛び散る噴水の滴や、

プールの水面(みなも)や、床の白い石までが、きらきらと眩(まばゆ)く輝(かがや)いているようだった。
「佐倉さん」
「何？」
「私……これから鳥越君に逢(あ)いに行ってくる」
きっと彼は驚くだろうと楓子は思った。そのあと、とても喜ぶだろう。
「うん。早く逢いに行ってあげて……」
「ありがとう」
花桜梨がとても美しい響きで言った。
「……佐倉さん」
歩きだそうとした花桜梨が、ふと振り向いてきた。
「何？」
花桜梨が目をそらしている。どうしたんだろう。緊張(きんちょう)しているようだ。
「これからも、私と友達でいてくれるかな……？」
そう不安げに訊ねられたとき、楓子はじわりと瞳が熱くなるのを感じた。
どうしてそんなことを訊くんだろう……。
「もちろん」
言葉とともに涙がぽろりとこぼれる。

にじんだ花桜梨の表情は、よく見えないけれど、うれしそうだった。

2

「あれ、どうしたの？　委員長」
控え室へと向かう通路で、ばったり俊太の友人に会った。高い背に上下クラブのジャージ姿。
このスポーツセンターでは今日、バレー大会の男子予選が行われていた。もうじき、ひびきの高校の試合も始まるはずだ。
「ひょっとして、鳥越に用だったり？」
友人がにやりとして訊いてきた。
「そうなの。呼んできてくれるかな？」
堂々とした小夜の肯定に彼はちょっと目を丸くしたが、
「ようやくガキっちい態度は卒業か。ま、いいことさ」
待ってろとばかりに背を向け、通路を歩いていった。
――今のが、最後になるかな。
壁にもたれて、小夜は苦笑(くしょう)した。
彼もすぐほんとうのことを知ることになるだろう。自分と俊太がそういう仲に見られること

は、もうじきなくなる。

「……………」

リノリウムの床が蛍光灯の光をぼんやり照り返している。視線を落とす小夜の表情からふっと苦笑いが消え、暗い真顔に変わった。

自分が嫌いになりそうだった。

自分の取った行動が信じられなかった……信じたくなかった。

――あたしは、あたしのことをもっと……。

正しい人間だと思っていた。

卑怯なことなど、ぜったいにしない人間だと思っていた。

ある種、完璧だとすら思っていたかもしれない。

だがそれは、あまりに愚かしい自己認識だったのだ。

――あたしは……汚い。

小夜は唇を嚙む。

心の中で何度もつぶやいた。

――汚い……。

「小夜」

聞き慣れた声に、小夜は振り向いた。

まちがうはずもなく、俊太だった。
「用ってなんだ？」
俊太は普段どおりの態度で訊ねてくるが、そこには気まずそうな色が微かににじんでいるのが小夜にはわかる。昔から、見てきたから。
『八重さんは、そういうことする人じゃないよ』
脳裏（のうり）に、昨日聞いた俊太の声が響く。
文化祭の帰り、花桜梨の過去を話したあとの俊太は、あっさりとした笑顔（えがお）でそう返してきた。
そんな俊太を見ているうち、小夜は胸が引き裂（ひさ）かれ……自分でも信じられない行動に出てしまったのだ。
つまり、花桜梨の家に押しかけ「俊太はがっかりしていた」と嘘（うそ）をついた――。
そして、花桜梨からも俊太と同じ言葉を返されたのだ。
自分は醜（みにく）く、とてもちっぽけだった……。
「おい、小夜？」
呼ばれて、小夜は我に返った。
「あ、ごめん」

言って、指先で前髪(まえがみ)を分けた。
「実はね、話したいことがあるの」
「話……？」
とたん、俊太がぎこちなくなる。小夜は安心させるために、そして複雑な想いを込めて、ため息混じりに笑ってみせた。
「さっき、八重さんが通(かよ)ってた学校に行って来たの」
「え」
あっけにとられた俊太の前で、小夜はほんの二時間ほど前のことを回想(かいそう)する。
その学校は土曜日を休日にしていて、小夜が行くとちょうど女子バレー部が練習をしていた。休憩に入ったとき、彼女たちに声をかけた。小夜は花桜梨が今、自分の高校に通っていることを話した上で事情を訊ねた。返ってきた答えは文化祭で聞いたものと同じ内容だったが、その態度に不自然さを感じて小夜は食い下がってみた。が、結局言葉を変えないまま彼女たちはすぐに練習へと戻っていった。
そして学校を出ようとしたとき、セッターの女の子に呼び止められたのである。
「……八重さん、部の存続(そんぞく)のために自分から罪をかぶったんだって」

小夜はそれだけを言った。俊太にはこれで十分だろう。
「そっか」
俊太は「やっぱり」というような満足げな表情を浮かべる。
――これで、あたしのやることは終わった……。
「というわけ。じゃ、あたし帰るね」
「小夜」
去ろうとしたとき、俊太が呼び止めてきた。
振り向くと、俊太は難(むずか)しそうに眉(まゆ)をひそめじっと自分を見つめてきている。
「……昨日の返事、するよ……」
熱い眼差(まなざ)し。
………。
こんな瞳を向けられるのは、これが最初で最後だろう。
「オレ、びっくりして……すごく考えたんだけど……まさか、おまえがそんなだとは思ってなくて……で、考えたんだけど……やっぱり、オレにとっておまえは――」
「ストップ」
小夜は止めた。
「もうわかったわ。あんた、そんなまどろっこしいから国語赤点なのよ」

できる限りいつもの二人に戻りたくて、小夜はそんな憎まれ口を言う。
「……ごめん」
なのに、俊太はこちらのそんな気持ちもわからずにうなだれてしまった。
――しょうがないわね。
小夜はなんだか、やれやれという気持ちだった。
「たいしたことないわ。どこにでもある風景よ」
言ってから、ちょっとキザかなと小夜は思う。
「あんたはせいぜい幸せになりなさい。あたしが納得できるようにね」
「………………」
俊太はあいかわらず不器用に黙り込んでいる。小夜がまた言葉をかけようとしたとき――
「おい、鳥越！」
通路の向こうから部員が呼んできた。
「早く来い！　練習で渡辺ケガしたから、おまえ代わりに出ろって！　監督が！」
「！」
俊太がはっとなって振り返った。
「よかったじゃない」
声をかけると、俊太が今度はゆっくりこちらに向く。

「このチャンスをきっちりものにするのよ？」
「あ、ああ……」
「鳥越！　早く！」
「ほら、がんばってきなさい」
小夜は俊太の肩を叩（たた）こうとして……やめた。
そのかわり、いつもとまったく同じなにげない表情を作ってこう言った。
「じゃ、月曜に学校でね」
すると、俊太もやっといつもどおりの馬鹿みたいな、いとしくてたまらない笑顔になる。
「ああ、学校で」
言って、俊太は部員に応えながら奥へと走っていく。
そして、背中が向こうの角（かど）に消えた。
「…………」
小夜は音も立てずに長い吐息（といき）をつく。それからきびすを返し、出口に向かって歩きはじめた。
と、見覚（みおぼ）えのある姿がこちらへやってきた。走ったのだろうか、息が弾（はず）んでいる。
「八重さん……」
声をかける前に、花桜梨もこちらに気づいたようだった。その歩（あゆ）みがしだいにゆっくりとなり、五メートルほど手前で立ち止まった。

無言のまま見つめてくる。
何か言ってくるのだろうか——小夜は身構えたが、花桜梨はむしろこちらの様子をうかがっているふうだった。
花桜梨の目線がちらりと自分の背後に移った。
小夜も振り返ってみる。奥へと続く道。
——ああ、そうか……。
立ちふさがる形になってしまっているのだ。
彼女には、自分のことがゲームに出てくる魔王のように映っているかもしれない。そう考えたとき小夜はなんだかおかしくて、くすりと口の端を上げた。
「ごめんね」
小夜はあやまった。それは、道をふさいでいることについてではない。
「あたし、八重さんに嘘ついてたの」
花桜梨がきょとんとなっている。ほんとうなら深々と頭を下げてもっと真摯にあやまらなければいけないところだが、この期に及んで変なプライドがじゃまをした。
——そのくらいは、勘弁してよ……。
「俊太はね、八重さんの前の学校でのこと話したとき、あなたと同じことを言ったの。『八重さんは、そういうことする人じゃないよ』って……」

「うん……」
その素直な花桜梨の声を聞いたとき、小夜は彼女がどこかいつもと違っていることに気がついた。
——なんだろう……とても……。
きれいだ。
まぶしいものを前にしたように目を細める。
ほんとうに追い払われる悪魔のようだと、小夜はつい自嘲気味に考えた。
ならば、そろそろ退散するとしよう。
「俊太、試合に出れることになったみたい」
そう言うと花桜梨が少し目を見開いた。それからすぐに、ふわりと口元をほころばせる。
「そうなんだ」
「………」
今まで花桜梨の笑顔を一度も見たことがなかったと、このとき小夜は気がついた。
初めて見たそれは春の日溜まりみたいにうららかで、そのあたたかさに小夜もつい笑みをこぼしてしまう。
だから、こんな最後の言葉も抵抗なく伝えられた。
「こんなこと言う資格ないけど、俊太のこと私の分まで応援してあげて。……それじゃ」

前に踏みだし、歩く。そして、花桜梨のわきを通り抜けた。
――よかった……。
花桜梨にもたらされた微笑みのまま、小夜は思う。
――これなら、諦められそう。
けれど、進むうちだんだんと微笑みの効果が切れてきた。一歩ごとに気持ちが沈んでいき、小夜はついに胸の奥からこみ上げる涙の衝動を感じた。
「ふっ……」
堪えて、変な笑い声になった。
――あいつのためになんか、泣いてやらない……。
小夜は変わらない歩調で進んでいく。
出口が見えてきた。
さんさんと光がさしている。今日は朝からいい天気だった。
――ここを出れば、大丈夫。
ぜんぶを過去にして、新しくなれる。
これはきっと必要な経験だったと思う。自分がこんなにも小さいと知ることができた。そういうところを見つけて、こうして、自分は成長していくのだ。
出口は目の前。

自動ドアが開く。もれてきた外の空気は、少し太陽の匂いがした。
小夜は瞳を閉じて、ゆっくりと深呼吸した。
ほら、もう大丈夫。

3

遠ざかっていく後ろ姿を見つめながら、花桜梨は彼女が抱いていた俊太への想いに今さらながら気がついていた。
女の子のくせに、どうも自分はそういうカンに恵まれていない。
小夜の姿が完全に見えなくなったとき、花桜梨は前を向いて奥へと歩き始めた。
「…………」
花桜梨は決めていた。これからは何があっても俊太に対して『せいいっぱい』でいようと。
案内板に従って花桜梨は階段を上り、観客席へと向かう。開放された扉が見えたとき、ホイッスルが聞こえた。
花桜梨は小走りで会場に入った。
へりになって四方を囲う観覧席は、各学校の制服やジャージを着た生徒たち、関係者たちでまばらに埋まっている。向こう側の席は、まるでモザイク模様のようだ。

眼下には、とても小さく見える一八×九メートルの山吹色のコート。ちょうどひびきの高校側がサーブするところだった。俊太は——出ていない。

ばしん、とサーブが打たれた。

白い放物線。何の変化もない甘い球。

正義学園のレフトバックが正確にレシーブした。

セッターが身をそらして後ろへ——Cクイック——トス。

宙に舞っていたスパイカーが一本の線となった理想的なフォームで腕をしならせた。

どん！

スパイクがひびきの側のコートに鋭く突き刺さった。

とたん、向こう側の席でひとかたまりになっている応援団が太鼓を打ち鳴らす。

『ゴーゴーレッツゴー！　レッツゴー！　正義!!』

『ゴーゴーレッツゴー！　レッツゴー！　正義!!』

かけ声に合わせ、上下一列に並んだチアガールがポンポンを手に振り付けを舞う。華やかな空気が会場中に広がった。

正義学園がスポーツの盛んな学校で特にバレーの強豪だということを、花桜梨は前の学校にいたときから知っていた。

前の席は埋まっていたが、ひびきのの生徒らしき姿はほとんどない。花桜梨は前から五列目

の席に腰かけ、ひびきの側のベンチを見た。
俊太の背中はすぐにわかった。
わかる前に、体が反応していたかもしれない。
ベンチにかける俊太はリベロであることがわかるように、ユニフォームに青いシャツを重ねている。
…………。
胸がどきどきと高鳴る。息が少しだけ、苦しくなる。
顔が見たかった。そばへ行きたかった。今の自分に、会ってほしかった……。
花桜梨がもどかしい気持ちで振り向かない俊太の背中を見ている間、会場には何度もボールを叩く音と叩きつける音が響いた。
正義学園の応援団が一段の歓声を上げたとき、俊太が悔しそうに膝をぶつ。
そのとき花桜梨も悔しくなった。彼と同じ気持ちになった。
ふいに、両チームのメンバーがベンチに引き返してきた。テクニカルタイムアウト。
あまりの早さに、花桜梨ははっとなって得点板に目を向けた。
八対ゼロ。リードしているのは――やはり正義学園。
「…………」
花桜梨はよく知っている。今年も大会を通じて正義学園はまちがいなく優勝候補の一角であ

ろう。ましてや、予選で負けることなどありえない……。
選手たちが再びコートに散っていく。俊太はまだ出ない。ベンチからじっとコートを見ているようだ。
花桜梨も少し、試合の動きを追ってみた。
正義学園のサーバーがフローターの構えからストレートのサーブを打つ。右に変化した。ひびきののバックレフトがかろうじて手ではじき、セッターがどうにか上げた。だがタイミングが合わず、スパイカーはチャンスボールとして相手に返さざるを得ない。
戻ってきた球を正義学園のバックがオーバーカット。セッターがぱん、とトスし、エーススパイカーが上がったブロックのはるか高みからあっさりスパイクを決めた。
『て・ら・か・わ・チャチャチャ！　もう一本！』
続いて正義側が今度はクロスのサーブを打った。
迎えたひびきののバックライトが動揺し、レシーブミス。ボールはコートの外に転がった。
『さ・さ・き・チャチャチャ！　もう一本！』
サービスエースに正義学園の応援席が沸く。これから、あのバックライトは「穴」として狙われることになるだろう。
まったく試合になっていなかった。
ある程度予想できたこととはいえ、花桜梨は茫然となる。正義学園のチームはすっかりリラ

ックスして、さまざまなフォーメーションや攻撃を試していくるようだった。この先へ向けての練習だと言わんばかりに。それはたしかに上位チームの戦略としては正しいことなのだ。だが……。

――！

そのとき、花桜梨はひびきののベンチの動きに気づいた。
俊太が立ち上がったのだ。
監督のもとに向かい、指示にうなずいている。
今日初めて目にした俊太の横顔は、昨日会ったばかりだというのにひどく懐かしい気がした。
そして俊太が走っていき、さっきレシーブミスをしたバックライトと入れ替わる。いよいよ、俊太がコートに立った。

「…………」

リベロが入っただけ。他の人にとってはなんでもないことだっただろう。だが、花桜梨にとってそれは、試合の意味そのものを変えてしまうことだった。
自分と関連のなかった光景が一瞬にして、自分の大切な何かを決めてしまう――まるで今コートに立っていると思えるほど自らに迫ったものとなったのだ。
腰を落とし、前かがみに構えた俊太。相手コートに向けた真剣な顔は、これまで知らなかった新しい発見で、はっとするほど格好よくて、きゅんと胸がせつなくなる。

た。
様子見か、ボールはまっすぐ俊太の方へ向かっていく。手前まで来たとき、また右に変化した。
ホイッスルが鳴り、正義学園がサーブを放った。
――がんばって。
だが、俊太は冷静(れいせい)だった。
見つめる花桜梨も、そうだった。
――あのときのようにやればいい。
暮れなずむ中央公園での彼の姿がそのまま重なる。
俊太はサイドステップで水平に移動し、板のようにした腕でボールを受け止め、膝のクッションを使ってセッターへと送りだした。
――いいボール。
だから、セッターもいいトスを上げられた。
そのいいトスを、跳(と)び上がったエーススパイカーがぴったりのタイミングで叩いた。相手のブロックはたった一枚。
ばしっ……。
ふいに会場が静かになった。正義学園の応援団が沈黙(ちんもく)したからだ。
花桜梨の表情がぱっと明るくなる。

エーススパイカーとセッターがうれしそうにハイタッチしている。初めてひびきののプレーが形になった。

そして、ゲーム開始以来のひびきのからのサーブが打たれた。

正義側のバックライトが難なく処理する。セッターが小細工なしのトスを上げて——

エーススパイカーが打った。

同時に、俊太が跳んだ。

ボールは俊太が倒れ込んだ正反対の、ラインぎりぎりに突き刺さった。

再び、どっと会場が沸いた。

『ゴーゴーレッツゴー！　レッツゴー！　正義!!』

『ゴーゴーレッツゴー！　レッツゴー！　正義!!』

俊太がすぐに立ち上がる。うつむいた顔は、自分自身と対話しているようだった。

そして相手コートを見据えて構えた。その眼差しには、ここからでもわかる強い意志が宿っている。

………。

そのとき花桜梨はまた、あの日の中央公園の情景を思いだした。並んだベンチで見つめた、彼の澄んだ眼差し。

『オレ……ぜったい一本上げるから』

はにかみながら言った「ちょっとした奇跡」を起こそうとしているのだろうか。自分との約束を守ろうとしているのだろうか……。

そうに違いない、と花桜梨は確信する。

——彼はそういう人だから……。

潤(うる)んだ瞳に俊太をとらえながら、花桜梨は願う。

——がんばって。

強く、強く——。自分にさえ向けたことのないひたむきさで祈った。

すでに何度となく鳴らされたホイッスルが響き、繰り返されていく。

俊太のレシーブが加わったおかげで、ひびきのはどうにか型になったプレーができるようになった。だが、そこにはやはり大きな実力差があり、展開が一方的であることは変わらない。

正義学園の二段トス。

その長いボールにエーススパイカーがきっちりと合わせ、強烈なアタックを放った。

俊太が跳んだ。

ボールは、伸ばされたこぶしのずっと先でどん！　とV字の軌跡(きせき)を描いた。

——がんばって……

転んだ俊太を見つめながら、花桜梨は膝の上に置いたこぶしにきゅ、と力を込める。
それからも相手がスパイクを打つたび俊太は食らいついたが、やはり男子のスパイクなどそうそう拾えるものではない。しかも相手は、あと一歩で全国大会に届こうかという強豪だ。
スコアは一五対一。
相手の攻撃に振り回され、ひびきのの選手たちはすっかり消耗していた。口を開いたまま、肩で息をしている。その顔からはすっかり戦意が喪失している。もはやチームは壊滅状態だった。
だが俊太だけは、同じく疲弊しながらも瞳に強い光を保ち続けていた。
「相手が正義ってのもあるだろうけど、あの学校弱えなぁ」
花桜梨の二つ隣で他校の生徒が話している。
「そうだけど、でもリベロはけっこうやらないか？」
「まーな。あいつだけはまともに正義と試合できてるって感じだな」
そんなやりとりを聞いて、花桜梨は試合の状況も忘れてうれしくなってしまう。
正義学園のサーバーがばしっ、と速いボールを打った。
コートの穴を狙ったものだったが、コースを読んだ俊太がすでに移動しており、鋭いボールを危なげなくレシーブした。
セッターがトス。

センターが跳躍し、フェイントで落とした。見極めた戦術ではなく、相手の強さから消極的になっているゆえのプレーだった。
あっさり拾われ、上がった球をエーススパイカーがダイレクトで打とうと宙に舞い――打った。
俊太がおもいきり床を蹴った。
伸び上がった俊太の体がコートと水平になり、落下しつつあるボールめがけ慣性の法則で進んでいく。懸命な顔。目にかかって揺れる前髪。なびくシャツ。
その先端にある右手のこぶしが白い球の輪郭にふれた。
ボールは進行方向にはじかれ、コート外の壁に衝突した。
俊太は失速し、そのままべしゃり、と硬い床に全身を叩きつけられた。
ふいに、花桜梨はいやな予感がした。
『て・ら・か・わ・チャチャチャ！　もう一本！』
歓声に混じって、二回目のタイムアウトを知らせるブザーが鳴る。
正義学園は早々に引き上げ、ひびきののメンバーも重い足取りでベンチへと向かう。
だが、俊太がまだ倒れたままだった。
――鳥越君……？
会場がわずかにざわめく。チームメイトたちが気づいたようにコートを振り返り、はっとな

って駆け寄った。
——鳥越君！
どよめきが起こったと同時に、花桜梨は強張った表情で腰を浮かせた。
が——チームメイトが膝をついて囲んだとき、俊太がむっくり起き上がった。花桜梨はほっとして席につく。
「大丈夫か？」と訊かれたらしき俊太は、いつもの明るい調子で頭をかく。「いやー、ごめんごめん」と応えているようだった。どうやら、軽い脳震とうを起こしたらしい。だが……。
——がんばって。
チームメイトとともにベンチへと引き返していく俊太の足どりは少し重たくて、疲れているように見えた。
——がんばって……。
ふせたられた彼の眼差しは、とてもつらそうに見えた。
花桜梨は、立ち上がっていた。
席を離れ、列の前を早足で歩いていく。ちらちら見てくる人たちの前を横切り、通路に出て、なだらかな段を下っていく。
へりの一番前に出て、花桜梨は身を乗りだした。そして——
「がんばって!!」

大声で叫んだ。
周囲の観衆がいっせいに振り向き、下にいるメンバーたちも見上げてくる。
俊太と、目が合った。
驚いた瞳。「八重さん……」と口の中でつぶやいたようだった。
…………。
不思議と、周りの音がまったく耳に入ってこない。
彼がいる。自分を見つめている。ただ、それだけ。
し……
「信じてるからっ!!」
花桜梨はせいいっぱいに言った。声が、想いが、彼に届くように。
――あなたを、信じてる……。
せいいっぱいに微笑んだ。
仰ぎながらぽかんとしていた俊太が、やがて穏やかな笑みをしてうなずく。その瞳は、とても深い色をしていた。
タイムが終わり、俊太がコートに戻っていく。
そして、ゲームが再開された。
「…………」

構えた俊太を視界にとらえながら、花桜梨は空を映す湖面のような心境でいる。
正義学園のサーブを、待ちかまえた俊太がレシーブした。
緊張も動揺もせず、花桜梨の心には波ひとつ立たない。
――だって。
彼を信じてるから。
ひびきののスパイクがブロックにはね返された。バックライトがかろうじて拾ったものの、ボールはそのまま相手コートへ行ってしまう。
彼は必ずやりとげると、花桜梨には疑いなく思えるから。
返ってきたボールを正義学園のレシーバーがオーバーカットでセッターに送った。動きを見せたセンターのもとにひびきののフォワードがブロックのため集まる。だが、セッターはふいに身をそらし、ずっと後方へ――Dクイックのトスをした。
回り込んでいたエーススパイカーが跳躍した。
――でも……。
結果がそうならなくてもいいのだ。
こうして彼を信じていられることこそが、自分にとって何よりもかけがえない。
その喜びを、花桜梨は今、存在のすべてで感じている。
スパイクが打たれた。

俊太が跳んだ。
それはまるで、敵のほうが俊太の動きに合わせたかのようだった。

ぼんっ――。

白いボールがふわりと浮かび上がった。
会場が小さくどよめく。起こったささやかな奇跡に。
「…………」
花桜梨は、言葉もない。
俊太のファインプレーはセッターのファインプレーを呼び、スパイカーへと受け継がれた。
この上なく美しい連携（れんけい）の最後に放たれたスパイクが、正義学園のコートに深々と突き刺さった。

わあっ――。
会場が震える。今日初めて、応援団以外の観衆が沸いた瞬間だった。
手を引かれて立ち上がった俊太は、仲間たちからばしばしと叩かれ、次々にハイタッチを求められる。まるで、勝利を収めたかのようなはしゃぎよう。この瞬間、壊滅状態だったチームは完全に生き返っていた。

そのとき、俊太がやや茫然としている花桜梨を見上げてきた。ひとつのことをやりとげた、すがすがしく、誇らしい顔だった。

…………。

花桜梨は、何も考えられなくなった。満ちてくる彼への想いに圧倒され、自分の意志で息さえできなかったけれど……ちゃんと、顔は笑えていた。

ホイッスルが響いた——。

春のフリル

まだ早いのに、もう陽が傾きはじめている。
すっかり葉の落ちた木の影が芝生から出て、駐車場のアスファルトにまで届いていた。
その幹にもたれる人影。
花桜梨は建物の出入口をじっと見つめ、そこから俊太が出てくるのを待っていた。
すでにけっこうな時間こうしているように思えたが、左手の時計を見るたびそれは気のせいだと教えられる。
また、時計をのぞいた。
「………」
左手を下ろしながら、花桜梨は数えるのも面倒なほど繰り返したため息をつく。こんな心地で誰かを待つのは初めてだった。
向こうの道路から、車の音が絶えず届いてくる。
いろいろと考え、やきもきしながら待ったわりに、その終わりはやけにあっさり訪れた。
自動ドアが開き、中からスポーツバッグをかついだ俊太が出てきた。
花桜梨が駆けつけようとする前に俊太がこちらに気づき、ほがらかな顔をして近づいてくる。
「待っててくれたんだ」
そう言った俊太からは、軽い疲労の気配がにじんでいた。
「うん」

応えてから、花桜梨はちょっとためらう仕草をする。それから、
「……試合、残念だったね」
と、声をかけた。
「うん」
俊太が苦笑いになる。
あれから見違えるような善戦をしたものの、結局ひびきのはストレートで敗れてしまった。
沈黙がやってくる間際、俊太がしみじみと言う。まっすぐに花桜梨の視線をとらえて。
「でも、よかったよ」
「一本、上げられたから……」
はにかんだ表情はとても満足そうで、瞳はあいかわらずきらきらとしている。
「なさけないところ、見せずにすんだ?」
花桜梨はいたずらっぽく訊ねた。
「え?」
聞き返した俊太に、花桜梨はゆっくり微笑みを浮かべる。まるで、とりまく風がふわりとふくらんだようだった。
「かっこよかったよ、鳥越君」
「…………」

俊太は、あっけにとられたようになっている。

「どうしたの？」

訊ねると、俊太はひとつまばたきをした。

「今日の八重さん……なんだか…………きれいだ」

「え？」

「あ、いやっ、なんでもないよ！」

「そう？」

ほんとはちゃんと、聞こえていた。

うれしくて、うれしくて、しょうがなかった。

――こんな自分になれるなんて、思ってなかった。

「なら、いいけど」

もう、自分はずっとあのまま変われないと、固定してしまったと思っていたのに。

なのに、こうして新しい自分になってみると、それはなんて簡単なことなんだろうと思えた。

――でも、そうじゃない……。

やはり難しいことなのだ。それは勇気と、力がいることなのだ。ひとりではとても無理だった。できたのは、その二つを自分にくれた人がいるからだ。

――佐倉さんと、彼……。

ふと、ゆるやかな風が頬をなでてくる。
　ひんやりと冷たい。そういえば、夕方から気温が下がると天気予報で言っていた。
「あのさ八重さん、オレ腹へっちゃったんだけど……よかったらどこかつき合ってくれないかな?」
　ぐぅ、という音が聞こえてきそうな様子で俊太が訊いてきた。
「うん、いいよ」
「よかった。えーと、じゃあどこに行こうかな……」
「ファーストフード、行かない?」
「え?」
　俊太が意外そうに見てくる。
　たしかに、ほとんど寄ることはない。あの味はけっこう好きだったが、あそこはひとりで食事すると妙にさびしい気持ちにさせられる場所なのだ。
「行きたいの」
　──あなたと二人で。
　俊太がほっとしたように笑う。
「いやー、正直よかったよ。オレ今、バーガーとかそういうの、めちゃめちゃ食べたくてさ。じゃ、行こうか?」

「うん」
歩きだそうとしたとき、俊太がふいに、花桜梨がもたれていた木を見上げる。
それは、桜の木だった。
「……来年の春の大会目指して、がんばるよ」
見上げながら、俊太がつぶやくように言ってきた。
「うん……」
花桜梨も振り返って桜を仰いだ。痛々しいような細い枝が広がっている。花桜梨の目には、まだない小さな蕾が映っていた。
——来年の、春……。
あの蕾は可憐な花を咲かせるだろう。周りの人たちを喜ばせる存在になるだろう。
——あ……。
花桜梨は瞳を見開いた。
「どうしたの、八重さん？」
「あ、ううん。なんでもないの」
小さく首を振る。
「そろそろ行こうか？」
「うん、行こう」

そして二人は並んで歩きだす。
今さっき、花桜梨は白昼夢を見た。
蕾がいっせいに咲いて満開になった幻。春の風に、フリルのように揺れるいっぱいの桜の花。
「……鳥越君」
「何？」
振り向いてきた俊太を、花桜梨はそっと見つめる。
「私ね、決めたの」
「何を？」
そう俊太に訊ねられたとき、花桜梨はただ、惜しげもない微笑みを返した。
——これからは……。
せいいっぱいの笑顔で、
せいいっぱいの明るさで、
せいいっぱいの私で——
あなたを、好きでいようと思う。
咲いた桜の蕾。
幻だけれど、あれは現実。

あれは今の自分。
そして、未来。

END

あとがき

女の子の心はわかりません。
そう思います。
『ときメモ』でデートしても女の子からしょっちゅう「今日は疲れちゃった」と言われますし、もし理解を持てていたなら、きっと今より素敵な人生を歩んでいたでしょう（泣笑）。
そんな私が、今回『八重さんの視点』という、ウルトラがつくほど難しい条件で物語を書くこととなりました。
――八重さんは、普段何を考えて生活しているのだろう……？
とても悩みました。
あの八重さんは学校で、家で、どういうふうに、どんな思考で過ごしているのか……と。
さらに、ゲームにおいて八重さんは一～二年目のうちは主人公がどれだけがんばってもほとんど態度を変えてくれません。そして、三年目の春――『咲き遅れの桜・決意』――から、八重さんは見違えるような笑顔で接してくれるようになります。
――その一～二年目の間、八重さんの心の中ではいったい何が起こっているのだろう……？

さっぱりわかりませんでした。
あらためてゲームをしたり、攻略本を読んだりしてみたのですが、八重さんはあまり自分のことを語ってきてくれません。
私はこういうときこう思う、こう感じている、あれは、これは……。
ときどき話してくれることもあるのですが、どうにも断片的で「八重さんはこんな人なんだ」という全体像がつかめなかったのです。他人との接触を拒んで心を閉ざしているのですから、わからないのは、当然といえば当然のことでした。かといって——
「いやー、わかりませんでしたよ。はっはっは」
と、諦めるわけにもいかず、八重さんを知る数少ない資料であるＣＤ『ＢｌｏｏｍｉｎｇＳｔｏｒｉｅｓ２』を何度も何度も聴いてみました。
……このとき、かなり追いつめられていたのでしょう。
歌詞やモノローグにおいて、八重さんが「あなた」という存在に頼りきっているような印象があったものですから、
——ひょっとしたら、八重さんはものすごく依存心の強い人間なのかもしれない。
という着想にはじまり、私は暴走していきました。
八重さんが猫や熱帯魚という手のかかるものを好むのは、自分があれこれ世話をしなくてはいけない——つまり「必要な自分」に頼ってくれる相手の存在を支えとし、そこに依存しよう

とする心理から来ているのでは？

とか、

八重さんが「人に媚びているように見えるから」という理由で犬を嫌うのは、そこに自分の隠された本質を投影しているせいだとは考えられないだろうか？

とか、

結婚したら、夫ひとすじの趣味多き専業主婦になるのかなあ……？

などという、妄想にまで至りました。

……当然、役には立ちませんでした。

それでもお話を書かないわけにはいかないので、悩んで悩んで、どうにか「こうじゃないか？」と思う『八重さんの視点』をこわごわと描いてみました。

私なりの仮説が、これを読んでくださっている方々のそれと、少しでも近いことを祈るばかりです。

あと、今回は小夜をはじめとする手前味噌なキャラクターが多く、彼女たちが『ときめきメモリアル』の世界を壊していないかどうかも大きな不安です。あたたかい目で見ていただければ、とても幸いです。

けっきょく、女の子の心はわからなくて、八重さんのそれはいっそうわからなくて、だからこそ八重さんは魅力的なんじゃないかと……そんなふうに思いました。

最後になりますが、この場を借りて関係者の方々にお礼をさせていただきたいと思います。
いつもご面倒をおかけしてしまっている師匠(ししょう)のあかほりさとる様、花田十輝様。
お忙しい中、各段階のチェックや細(こま)かな質問にもったいないほどの丁寧(ていねい)なお答えを下さったＫＣＥ東京の西浦様、本を作るにあたっていろいろお世話になりましたメタルユーキ様、竹田様。
遅筆(ちひつ)ゆえにご苦労をおかけしてしまいましたメディアワークスの高島様、丸山様。
そして、前巻を読んでくださった皆様。おかげさまでこの本を書くことができました。
本当に、ありがとうございました。
最近ちょっと胃が痛くなったりもしますが、きっと今田は幸せ者です。

二〇〇一年　六月　　　今田　隆文

解説

オース！　メタルユーキだ！　電撃文庫『ときめきメモリアル2』の第2弾が出版されましたね。購入して下さった皆さんどうもアリガト・これも日頃から応援して下さっているみなさんの希望がかなったたまものではないかな？
　さて今回も「君のうしろすがた」を執筆した今田隆文君が書いている訳ですが、八重さんを中心とした物語が今田流の語り口で切なく感動的に描かれていることと思います。八重花桜梨ファンはもちろんのこと、「ときめきメモリアル2」をプレイした方であれば誰でも楽しめる内容になっているのではないでしょうか。
　ゲームの方も発売からそろそろ2年が経とうとしています。その間にこの文庫をはじめ、ゲームのほうでは「Substories」シリーズが、ＣＤでもドラマシリーズが発売され、本編では描かれていなかったストーリーが色々な形で展開され、そのひとつひとつがみなさんの思い出になっていくことだろうと思います。このゲームの制作中から見守ってきた私にとって、多くの方々が支持して下さって応援して下さることによってこれだけ多彩な展開ができる事は大変嬉しく思いますし、文庫もこのあとシリーズとして発売されていくことを期待しています。
　今回の物語もこの文章を書く少し前に読ませていただきましたが、ときめきメモリアルのよ

うな形態のゲームをプレイした後であれば本に書かれたセリフの1つ1つがあのキャラクター声で聞こえてくるから不思議ですね。こういう連動はときめきメモリアルにはすごく合っていると思います。また今田君もこのゲームの世界感や個々のキャラクターの性格など全てをきっちりと理解した上で書かれていることがこれだけの一体感を出しているのではないでしょうか？

ここで少し内容について触れてみると周囲に心を閉ざしている八重さんがクラスメイトの一人として位しか認識の無かった鳥越俊太の事を知るにつれ徐々に彼に対する想いが深まっていき、彼の出場する試合では彼女が一緒に試合をしているくらい気持ちが一つになって応援している姿の描写のあと、せいいっぱいの笑顔で、せいいっぱいの明るさで、せいいっぱいの自分で彼を好きでいようと思う八重さんの心の変化は読む人をも巻き込まずにはいないでしょう。そして自分を鳥越俊太と重ね合わせたとき八重さんの事がますます好きになっていることに気がつくのではないでしょうか。

みなさんにもこの物語のようなすばらしい恋がおとずれる事を祈ってこの辺にさせていただきます。それではまたチャオ!!

メタルユーキ

ときめきメモリアル2

対応機種●	プレイステーション
メーカー●	コナミ
ジャンル●	SLG
定価●	6,800円(税抜)
発売日●	1999年11月25日

　恋愛SLGの代名詞『ときめきメモリアル』の続編ゲーム。前作の隣町という舞台設定で、登場人物は全て新キャラ。プレイヤーキャラを成長させつつヒロインたちと高校生活のエピソードを紡いでいく進行パターンは前作から踏襲。さらに、ヒロインとの幼年期の想い出をオープニングで作ったり、プレイヤーキャラの名前を呼びかけてくれる音声システムを導入することで、パワーアップしている。

◉今田隆文著作リスト

著書：「ときめきメモリアル2　君のうしろすがた」（電撃G'S文庫）

本書に対するご意見、ご感想をお寄せください。

■

あて先

〒101-8305 東京都千代田区神田駿河台1-8 東京YWCA会館
メディアワークス電撃G's文庫編集部
「今田隆文先生」係
「コナミ・オフィシャル」係

■

電撃文庫

ときめきメモリアル2②
あなたを信じてる

今田隆文

発行　二〇〇一年八月十五日　初版発行

発行者　佐藤辰男

発行所　株式会社メディアワークス
〒一〇一-八三〇五　東京都千代田区神田駿河台一-八
東京YWCA会館
電話〇三-五二八一-五二〇八（編集）

発売元　株式会社角川書店
〒一〇二-八一七七　東京都千代田区富士見二-十三-三
電話〇三-三二三八-八六〇五（営業）

装丁者　荻窪裕司（META＋MANIERA）

印刷・製本　旭印刷株式会社

ISBN4-8402-1885-4 C0193

電撃文庫創刊に際して

文庫は、我が国にとどまらず、世界の書籍の流れのなかで〝小さな巨人〟としての地位を築いてきた。古今東西の名著を、廉価で手に入りやすい形で提供してきたからこそ、人は文庫を自分の師として、また青春の想い出として、語りついできたのである。

その源を、文化的にはドイツのレクラム文庫に求めるにせよ、規模の上でイギリスのペンギンブックスに求めるにせよ、いま文庫は知識人の層の多様化に従って、ますますその意義を大きくしていると言ってよい。

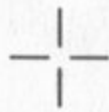
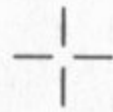
文庫出版の意味するものは、激動の現代のみならず将来にわたって、大きくなることはあっても、小さくなることはないだろう。

「電撃文庫」は、そのように多様化した対象に応え、歴史に耐えうる作品を収録するのはもちろん、新しい世紀を迎えるにあたって、既成の枠をこえる新鮮で強烈なアイ・オープナーたりたい。

その特異さ故に、この存在は、かつて文庫がはじめて出版世界に登場したときと、同じ戸惑いを読書人に与えるかもしれない。

しかし、〈Changing Time, Changing Publishing〉時代は変わって、出版も変わる。時を重ねるなかで、精神の糧として、心の一隅を占めるものとして、次なる文化の担い手の若者たちに確かな評価を得られると信じて、ここに「電撃文庫」を出版する。

1993年6月10日
角川歴彦

電撃ゲーム文庫

KONAMI

リングオブレッド

RING of ЯED

戦いの果てに
キミは何を見るのか

著◎竹内 誠
イラスト／コナミオフィシャル

発行◎メディアワークス

ルームメイト2001

-Ryoko-

こんな涼子はいかがですか!?

いつもと違う、同居生活をご賞味あれ

著●長坂れむ

イラスト●丸藤広貴

発行◎メディアワークス

今田隆文（いまだたかふみ）

1976年8月26日ごろ生まれる。就職氷河期のさなか、まだ運が残っていたのか、あかほりさとるに拾われ、花田十輝にしつけを受け、小説家としてデビュー。今回は苦労に苦労を重ね、八重花桜梨を描く……原稿の最終チェックではメディアワークスに缶詰めになった。

【電撃文庫作品】

ときめきメモリアル2　君のうしろすがた
ときめきメモリアル2②　あなたを信じてる

イラスト：コナミ・オフィシャル

カバー／旭印刷

A01-08

G's

ときめきメモリアル2 ②
あなたを信じてる

今田隆文（SATZ）

電撃文庫

¥ 560

ISBN4-8402-1885-4

C0193 ¥560E

発行◉メディアワークス

定価：本体560円
※消費税が別に加算されます